
エンダ

日葵

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

エンダ

【Nコード】

N8274X

【作者名】

日葵

【あらすじ】

「元、私は決して、己の不幸を嘆いている訳ではない。私は真実が知りたいのだ。何故私がこの世界に呼ばれたのか。私がここに来る為に犠牲にされた事、策略、全てが知りたい」

異世界へ強引に連れて来られたハルが、助けしてくれた元と共に（利用し?）、「エンダ」とし

て生きて行くストーリー！。

別サイトで同作品を掲載
しております。現在8章まで掲載中です（現在改訂中です）

第1章 Usual spot - 1

キーボードにデータを打ち込みながら、呼び出す内線音に視線を液晶画面に向ける。そこに映し出される名前に、小さい溜息を吐きながら、受話器を取り上げた。

「お茶」

「……分かりました」

ガタリと席を立つと、給湯室に体を翻す。斜め後ろに座る上司が、ニヤリと口元を引き上げている姿が目映った。

『……わざわざ内線って、何の意味があるのよ』

お茶汲みは女性社員の仕事だという、古い体質の会社の考え方に異論はない。しかし、ほぼ真後ろに位置付ける上司の指示に、毎回ゲンナリする。お茶つぱを急須に入れながら、深い溜息を吐いた。

『ここで雑巾の搾り汁なんて入れたら、すつきりするのかな』

勿論そんな陰湿な事はしないが、酷い時には三十分おきに内線がなる現状に、そんな考えも過って仕方がない。そのお茶も、後ろの観葉植物に捨てている事など、百も承知している。お陰でレンタルの植物は、半年も持たなく枯れてしまう。

私は、給湯室に掛けられているカレンダーに目を移した。カレンダーは十二月……今年も一年が終わる。

「ただいま……」

マンションのドアを開けて、暗闇に向かって眩く。部屋の灯りを付けて、テレビのスイッチを付けると、ドツと盛り上がる特番が映し出された。

二年程前から、自分の存在価値について考え込むようになった。もっと言えば、全てが虚しい。生きる価値を見出せない自分に気づく。

一番の原因……それは分かっている。三年前、突然襲った母の

死。それからだ、全てが虚しくなったのは。亡き愛する人を思い出すのは辛い……それなのにふとした瞬間に母の事を思い出してしまう。

ソファに座り、缶ビールの蓋を開けた。アルコールの匂いが鼻に付くが、グイッと飲み干す。酒は強いほうだが、癖になると困るので飲むのは週二回と決めている。

『そんなルールを作っている時点で、もう駄目だっというか……』
深い溜息を掻き消す様に、テレビからは延々と、騒々しい音が流れてくる。芸人が放つ言葉に、会場がワツと盛り上がりを何度も繰り返している。

「何がそんなに楽しいのだろう」

眉間に皺を寄せながら、チャンネルを変えるが、どこも同じような番組だ。特に意識して見ている訳ではないが、テレビの音に感情が紛れた。こんな割り当てられた空間に一人で居ると、無性に堪らない漠然とした不安が襲ってくる。深く考えすぎるとロクな事がない、そう考えて、無意識にテレビを付ける。そうやって何年も何回も過ごしてきた。

『前は、良かったな……』

声に成らない言葉をグツと呑み込む。数年前は、家に帰れば母が居た。特に会話が無くても、得られたあの安心感や安らぎは、何物にも換え難い。

「一人になって気づいても……なあ」

私の母は本当に苦労人だった。働かない父親のせいで幼少の頃は、一日中働いている記憶しかない。貧しい幼少時代だったが、母の愛に包まれて育った私は、父の事だけが悩みの種で済んでいた。

母の記憶は、私の胸をこんなにも苦しくする。飲んでは暴力を振るう父親から、いつも守ってくれた母。無償の愛……母から受けたこの愛で、私はこの世界で生きる事が出来たのだ。父親が病気で亡くなって、ようやくと親子二人で心穏やかに暮らす日々、

「いよいよこれから、お母さんの人生だよ。やりたい事やりなよね」

そう言葉にする私に、

「今までも自分の為に生きてきたわよ」

そっと笑う人だった。もっと伝えたい事は沢山あったのに、三年前だ……あの日会社に掛かってきた電話によって、全てが一瞬で消え失せた。

【道に飛び出した子供を助けようとして……】

電話の声が耳に入らず、緊迫した声も遠くで聞こえた様な気がした。

もう三年も経つのに、一体いつになったら、母の事を暖かい気持ちで思い出せるのだろうか。昨日まで話していた声が聞けなくなつて、大切な人が突然居なくなつて……。寂しい。虚しくて堪らないのだ。私はこれから、寂しく長い人生を送しかない、そう思わずにはいられない。

今までは、どんなに居た堪れない気持ちに陥つても、帰れば母がいた。そこには、私が帰る場所が確かにあった。それが当たり前だったあの頃。一人じゃなかった、あの頃。母の死後、私はこの都会でたった一人だ。生きて行くだけの人生を送っている。大げさと思われるかもしれないが、心の虚無感が私を負の感情へ押し流す。

それからの私は、

「孤独」

この言葉に、都度苛まれるようになった。

勿論今の状況は、母の事だけが原因ではない。仕事、友人、恋愛、結婚の事、全てにおいて将来の自分。女三十代。結婚の予定も無い。あるとすれば、社歴だけが長くなる仕事だけだ。

生きていく以上は、どのような立場であろうと働かなければならない。それが社会だ、というか現実だ。実際、私の仕事は忙しいほうだと思う。毎日、毎年同じだ。数字の積み上げを行い、期限通りに仕事を上げなければならぬ。経理事務員として毎日二十一時位の帰宅時間となる。遅くも無いが早くも無く、そこから自分の為に

何が出来るのだろうか？ そんな余力があるのなら、明日の仕事の為に取っておきたい位だ。

一体誰の為に、何のために走り続けているのか？ 誰かに教えてほしい。私がどこに向かっているのか。……馬鹿な自分、そう思い自嘲気味に笑った。全ては自分が選択してきたくせに、と。

二本目の缶を開けて、ぼんやりと窓を見た。カーテンの隙間からは、暗い闇が見える。こんな空の下には、私みたいな人間はごまんという筈だ。こうやって先の不安に押しつぶされそうな夜を過ごし、孤独を感じ必死に足掻く人間など腐る程居る筈なのに。何故這いあがれないのだろう……そして私は、何だ、何なんだ。そう自問しながら、今日も眠るのだ。

「夢見が悪いっていうのも、原因の一つなんだよなあ」
ベッドに横たわり、ボソリと呟く。恐らく母の死が原因なのだろうが、数年前から夢見が悪い。どんな夢を見ているのか朝には忘れてしまっただが、目が覚めると、気分が下がりドツと疲れる朝を迎える事が多くなった。

私は体を横に向けると、溜息を吐きながら目を閉じた。

第1章 Usual spot - 1 (後書き)

第1章 Usual spotは主に主人公の女性の心の葛藤を書かせて頂きました。

少し重たい章になっておりますが、ここからストーリーが繋がって行くかと思うと、今からドキドキしています。それでは、楽しんで頂けるように日々精進致します。宜しくお願い致します。

第1章 Usual spot - 2

「今でなくてはいいませんか？」

私は声のトーンを落とすし、眼前の上司を挑発しないように静かに問うた。しかしそんな気遣いは全て無駄に終わり、耳障りな声が響く。オフィスが広いせいもあり、声は全体に響き渡っている。その状況に、内心深い溜息を吐いた。

「当然だろう！！ 人を育てるのに、時期なんて関係ないと思うが？ 優秀な！ 優秀な人材にチャンスを与えるのは、会社の義務だ！！」

入社して数カ月ばかりの新人に、大きなプロジェクトを任せようという話だ。必要以上の怒涛に、思わず皆が振り返る。その視線を背中に感じながら、更に声のトーンを落とすしながら、

「はい。しかしプレッシャーで入社出来なくなった社員も多数出ておりますし、出来れば後数カ月お待ち頂けたら、業務の内容も理解出来てよいと思いますが……」

そこまで広くないフロアの中で、眼前の上司はテンションを上げるかの様に更に声を張り上げた。怒涛に近い罵声に、ある者は苦笑いをし、ある者は溜息交じりに外に出て、ある者は面白おかしく傍観している。

「はあ〜？ 君に聞いているのは、ただの確認なんだがねえ。彼らが持っている仕事を君が出来るかどうかをだ」

興奮している上司の声は、フロア全体に響き渡り、背中に感じる周囲の雰囲気は最悪だった。誰もが息を殺し、事の成り行きを見守っている。そんな皆の息遣いが聞こえてきそうで、嫌気がさす。会社がどう私を判断しているのか？ そんな事を、こんな場面で何故曝け出されなければならないのか。

『だったら初めからそう問えばいいのに……』

「私に、彼らの仕事を担当しろと……というお話でしょうか？」

慣れている。こんなことは。今まで何度繰り返されてきたのだから。部内で新人の仕事だと認識されている仕事であつても……だ。本来ならば黙つて受けるべきだろう。

『でも、一体いつまで??』

そんな心の葛藤を、見透かしたように口元を緩めながら、上司は言葉が続けた。

「そつだ。この部署に暇なのは君だけだろう?」

何がそんなに嬉しいのだろう……緩む口元を手で隠しながら、舐めるような眼で見上げてくる。

もつと業務的に伝えてくれたら、こんなに心が揺らされる事も無いのに。上司はおもむろにデスクから、耳かきを取り出し、耳の穴を掃除し始めた。もうこれ以上話す気も無いのだろう。更に左手でパソコンのキーボード打ち付けている。

「……そうですか。……今担当している業務の事もありますし。少しお時間を頂いても宜しいでしょうか?」

そつ、伝えるだけで精いっぱいだった。パチーン、パチーンと弾くキーボードの音がイヤに耳に付く。恐らく今起きた状況を誰かに報告するのだろう。この上司は、そうやって自分の地位を確立してきた。社内では有名な話で、一人をターゲット絞り、徹底的に追い込む。その対象は必ず女性社員で、女性社員の離職率を上げたい会社の思惑だという声も噂される位だった。

席に戻つた私は、パソコンを目の前にして、ゆっくりと息を吐いた。数年前から槍玉にあがつた私は、それでも会社に留まっている。四十近い女の転職がどれ程悲惨か分かっているつもりだ。それに……と呟く。

『私の誇りなんだ。今の仕事は』

そう何度も心の中で呟いて、伝票に手を掛けた。

「はあ……」

その日の夜、行きつけのBARで、止まらない溜息に友人を付き合わせていた。同じ会社で働く女性、沙織だ。営業の前線で戦っている沙織は強くて明るく、会社で一目置かれている存在だった。経理に所属しているとはいえ、全てがシステム化されている現在では、営業の彼女とは接点が無い。しかしプレゼン資料の経費の件で私は、「ねえ、一度飲みに行かない？」

その声を掛けられた。端正な顔立ちの沙織から、嬉しそうにジッと見つめられた私は、不毛にもドキドキした位だ。

「え？」

事務的に業務を伝えていた最中での突然の誘いに、正直面喰った。会社の女性社員達は、プライベートを重視する傾向がある。企画された飲み会にこそ参加するが、プライベートで飲みに行くなんて、ここ数年無かった事だ。しかし誘いに乗ってみると、評判通りの素敵な女性で、常に明るく前向きな正確に、いつの日か心を許せる唯一の友人になっていた。上司から不当な扱いを受けた日は、どこからか聞き付け、「飲もうよ！」と誘ってくれる。それが単純に嬉しい。

『沙織が居なかったら、とっくの昔に会社辞めていた。沙織が居るから頑張れるって思うよ』

「本当にどうしたのかしらね、女を」

沙織はそう言うと、グラスのウィスキーに口を付ける。コハク色のグラスの中に、アイスボールが光を反射してキラリと光った。彼女のセリフは、何も私だけへの励ましではない。二年前に結婚した彼女は、大きなプロジェクトをあっさりと外された経験を持つ。営業でトップ三の結果を出し続ける、彼女に対する会社の期待は大きか

った。女子社員の間では、結婚が過小評価の対象にならないのではないか？ 女性蔑視の傾向が強い、会社の転換材料になるのではと、ひそかに期待されていた。

しかし会社は、沙織をマネージャーから一般社員に降格させた。会社の言い分はこうだ。

「君には期待していたのだがねえ。結婚した以上、子供が出来る事を想定すると、会社はリスクを負った訳だ。そこを理解してほしいね」

沙織は、ロックグラスをカタリと傾け、

「大体、あの人にそんな権限あるの？ 部長に相談しなよ。絶対私的な意見だつて。毎日仕事もせずにインターネットをしているような奴よ。真に受けちゃ駄目！ もしあの男の行動が会社の命だったとしても、屈する必要はないからね」

人の陰口を言わない彼女にしては、珍しい発言をする。勿論、私を氣遣う優しいさだった。今は沙織の優しさにどっぷりと甘えてしまう。「会社は私をどうしたいのかな？ 勿論仕事は一生懸命やるよ。お金貰っているし。でもあんな言われ方をしなければいけない程、駄目なの？ 私。もうどうやってても、駄目の様な気がする。」

……駄目だなあ、今のは愚痴だね。……うん、沙織の言う通り、仕事を頑張っていればいいよね。今の仕事、結構責任があつて遣り甲斐を感じているんだ」

心配そうに顔を向ける沙織にハッと気づき、気を取り直して笑った。私の言葉に、少し安心した表情を浮かべながら、

「全然！！ 聞くつもりで誘ったんだもん。溜め込んだらダメよ！ いっぱい話しな」

そう笑いながら、彼女はゆっくりと言葉を繋いだ。

「でも、ね。多分私、敢えて今のポジションを選択したの。会社の歯車として、頑張る事に限界を感じていたし……ね」
そんな選択もあるよと、ヤンワリと言ってくれている。

「そうだね……」

自分に聞きたい……私は、どうしたいの？一生働くことに不安がないと言えば嘘になるだろう。でも結婚の予定はないし、繰り返される生活に、劇的な転換期なんて訪れる筈もない。

『だから働いているの？ ううん、そうじゃない。生活の他に大事なものが仕事にはある』

……私の存在価値というのだろうか。しかし、今ではその価値ですら見失いそうになる。昔は母がそんな存在だった。それが幸せだったのに。一体どうしてこんな事になってしまったのだろうか。こんな出口のない、問答を一体いつまで繰り返すのだろうか？

そう思うと気持ちが沈むのだが、沙織に心配かけたくない一心で、沙織の言葉に微笑みを返す。目の前の優しい友人は、こんなにも親身に心配してくれる。沙織が居るから、あんな会社でも頑張っているのだ……そう思うと、グラスを一気に飲み干した。

「昔はもつと飲めたのに……ごめん」

「何言ってるの！ 今日付き合ってくれただけで、助かったよ。本当に楽しかった。スッキリしたしね！！ 旦那さんに宜しく伝えてね」

「ううん、私も一緒に飲みたかったし。また行こうね。旦那も会いたがっているよ。今度、家に遊びに来て」

そう言っただけで彼女は、彼女を待つ家族の元へ帰って行くのだ。彼女の後姿を駅で見守りながら、改札に定期を翳した。沢山の人が帰宅を急ぎ、私を何人も追い越して行く。帰宅時の電車の中は、平日の遅い時間だというのに結構混んでいた。ふと窓に映った自分の顔を見ながら思う。

『歳……取ったな（疲れ皺が醜く感じて、思わず目を背けた）……』

最近、愚痴っぽくて嫌になる。沙織不快な想いをしていないかな』

この電車みたいに、私の人生の行き着く先が分かっていたら、こんなに不安に成る事もないのに。

『下らない。考えてどうするの？ 良い事なんて起る筈もないの
に』

一人の部屋に帰った私は、おもむろにテレビのチャンネルを入れた。何をやる気力も起きない。ソファにしな垂れながら、脱力感にバタリと横になった。テレビからは、自己啓発に勤しむ若者達の特集が組まれている。専門学校を卒業した私は、直ぐに今の会社に就職した。今では大学卒しか取らない会社だが、当時はバブルも後半という事もあり、何とか滑り込む事が出来たのだ。それから、正にコツコツとただひたすらに仕事をしてきた。仲間達が退職していく中で、私はひたすら働いてきた。仕事のスキルを上げる為に、様々な資格も取得した。しかしそれが何になっっているのだろう。テレビに映る未来ある姿が忍びなくなり、早々にベッドに横たわった。今ではリストラの対象になりつつあり、上司の嫌味に付き合わされる日々。

『二十年近く・・・何だったんだろう・・・』

こんな夜は何度なく過ごしてきたのに、今日の出来事は私の心を無性にかき乱す。そう・・・こんな夜は困る。この虚無感に結論が出ず、抜け出せないループが辛い。私は深い溜息を吐いた。

・・・寝よう。いつか変わる。変わらなくても、私の考えがいつか変わるだろう。私の世の中に対する矛盾が矛盾でなくなる日が来るから。そう、思いながら目を閉じた。

「やだあ。ホントに無理。暗あーい！」

クスクスと笑う声が、すぐ耳元で聞こえたような気がして、背中がゾクリと冷えた。

『今、何か聞こえなかった？ まさか・・・』

私は一人暮らした。しかもここは、マンションの一室・・・現実的にこの声はあり得ない。思わず息が止まる。

・・・気のせい？ そう思うのに、体がピクリとも動かせない。

少しでも動いてしまったら、何かが終わってしまいそうな気がした。横を向いたまま自分の心臓の高鳴りがやけに耳に付く。一瞬、静寂が広がり、暗闇だけが周辺に広がる。

・・・何も聞こえてこない、あるのは暗闇が故の静寂だけ。最近ネガティブな発想に陥りやすいせいかな、幻聴まで聞こえる様になってしまったのだろうか。

「はあ！」

息を止めていた事すら忘れていた。

「大丈夫？ 私」

そんな自分に、思わず一人言を呟いた。そう言えば聞いた事がある。配管などを通して、周辺の部屋の音が響く事があるって。

「ふう」

やっと、呪縛から解き放たれたように、体を捻り天井を見上げた瞬間・・・淡く光る何かが目の前にいた。いや、浮いていたのだ。

「え・・・ちょ・・・」

この世界に不思議があるとすれば、こういうことかもしれない。光を発しているくせに、闇に対して照らす影響力は無いかのように、その場所だけが淡い光で包まれている。こんな時に何だが、幻想的で美しい・・・そんな事を思ったりもする。

どれ位の時間が過ぎただろう。

『・・・もしかしたら、光の屈折？』

そう思える程の長い時間が過ぎ、この奇妙な現象に、恐怖が遠のく錯覚に陥り始めていた。だからだろうか、思わず、そう思わず手を伸ばしてしまった。あともう少しで、その淡い光に触れようとした瞬間、

「馬鹿なの？」

何の高揚もない、台詞のような言葉が、耳に届いた。

「ねえ・・・危機感ないの？」

相変わらず、球体は淡い光のままだったが、言葉を発する物体に言

葉を無くす。・・・とうとう、私おかしくなってしまうたのだろうか？会社はどうしよう。友人は悲しむだろうか？生活出来なくなっちゃうな。あーきつと誰かに迷惑をかけてしまう。こんな状況下で、漠然と考えながら、私はその光を見つめていた。

「危機感無い人間で怖いわね。今貴方は、この世界では考えられない状況に立たされている筈だけど・・・よく不用意に触ろうなんて気になるわね？ 何に対してもそう？」

幻聴まで・・・それにしても、これは私の中の声なのだろうか。だとすると、随分と容赦がない。

「そう・・・かもね」

その光は明らかに失望しているかのような声を上げた。あまりに流暢に会話が続くものだから、会話をする事に違和感が無くなっていく。

「貴方に言いたいのは、自分のルールが世界の常識って思っていないかって事よ。私のルールから言えば、未知数の物体に自ら触れる行為は自殺行為だと思っし、貴方がどっぷりと浸かっている絶望も、貴方だけのルールによって作られているってどうか、がんじがらめに縛られているように感じるけど？」

そもそも、未知数の物体に安易に触れる行為が、この世界の常識だというのなら、私がおかしい事になるけどね」

この物体の言葉は、至極当然だった。通常であれば、恐怖が先に立って触ろうなんて気にもしないだろう。お酒が入っているせいなのかかもしれないが、危機感が無いと言われれば、その通りだ。しかし今は恐怖よりもこの物体の発する言葉に、気持ちが悪く反応してしまう。

「私が今の状況を作り出しているって？」

「そうよ。状況はどうにでもなるのに、周りが変わる事に期待するが故に生まれてくる、絶・望ってやつね」

グツと手に力がこもり、体全体にじんわり嫌な汗を掻く。こんなお決まりのセリフに、いちいち熱くなってどうするのだ。どんな窮地

に追い込まれようとも、何度も自身をコントロールしてきた。そう思いながらも、今日の理不尽さを思い出すと、感情が先に立つ。

「っ……！ 私は、私のルールでこんな状態になっているわけじゃ、ない！ 確かに全て私が選んできたわけだけど、世の中には不可抗力で、どうにもならない事があるの！ 嫌なら辞めることも選択肢の一つだなんて、他人だから言える言葉よ！ 生きていかなきゃいけないのに……。私は、私の限られた資源の中で出来ることをやっているだけよ！」

激しく高鳴る心臓が、今にも爆発しそうだ。

第1章 Usual spot - 5

光は、くっくつと笑いながら、上下に震え、そして・・・、

「ぷっ！ あーははは。それって自分の中で使いならされた言葉？ そうやって自分に言い訳しながら生きてきたの？ もう！ ヤダ

」
「・・・は？」

笑いを堪える必要がないと言わんばかりの態度に、この夢が妄想から一刻も早く覚めたかった。何故どうにもならない現状を、否定されなければならぬのか。この声が自分自身としても、息をするのも苦しくなる程悔しくて仕方がない。可笑しくて仕方がないと言わんばかりに、光の玉は未だに上下に震えている様子を見て、屈辱から布団を頭から被った。

・・・寝よう。病気のこと、明日考えよう。明日の朝、このままだったら病院に行こう。これからの事も、明日ちゃんと考えよう。全ては明日だ。

「・・・」
部屋に静寂が訪れ、自分の息遣いしか聞こえてこない。布団の中で、少し息苦しさを感じながら、どうかこのまま寝てしまいたい。このまま光が消え失せて、私をかき乱す余計な事を言わないように、ただただ祈っていた。そんな私の願いも虚しく、

「ねえ・・・」

自分の心の声なのか、光は執拗に話し掛けてくる。

「この状態を無視して、寝てリセット出来るなんて思っている時点でおかしいでしょ？」

『違う！！ これは夢だから！！！！』

微動だにしない私に向かって、淡々と言葉を繋ぐ光に、ジワリと嫌な汗をかく。こんな非現実をどう受け入れればいいのだろう。先

程の怒りの感情は通り過ぎ、今は明日から直面するであろう現実、考えがまとまらない。

「・・・ふう。幻像でも、夢でもないわよ。私は」
布団をはぐ事も出来ず、それでも光の発する一言一句を逃さぬように、全神経が言葉を追うのだ。一体、何がどうしてしまったのだ。

「大体、皆自分がおかしくなったか、夢かかって思うのよねえ。確かにこの世界では現実的ではないかもしれないけど、全く他の発想は出来ないものかしら？ 自分達の世界が全てだと思っている、人間らしいと言えば人間らしいのかしらね」
布団を上げる事も出来ずに、布団の中の暗闇を凝視し続ける。

『・・・やばい・・・。本気でやばい。現実逃避もここまで来ると、救い様が無いんじゃない？』

これって日常生活が出来るレベルなのかな。どっちにしても、人に迷惑は掛けない様に・・・しなきゃ
頼れる親戚なんて、知り合いなんていない。明日までこの状態が続くようであれば、正気の内に対策を取らなければ、真剣にそんな事を考えていた。

布団に包まっただまま、反応しない私にお構いなく光は語り続ける。私に言い聞かせる訳ではないのかもしれない。まるで独り言のように、ブツブツと呟いているのだ。

「そもそも、この生きにくい世界に固執して生き続ける理由はなに？ 生きとし生ける者が、純粹に生きている事が、自然の摂理ではないの？ 何故どう生きているのか？ が、重要になるのか理解出来ない。

考える事を与えられた人間の悲しいサガ？ 生きている事が一番重要ではないの？ その理由すら追及せずに・・・一生自分は幸せではないと考え続けるの？」

光の問いかけに、ガバツと布団を剥ぐ。きちんと終わらせなければ、きつと朝までこの状態だ。明日は仕事だというのに、「冗談じゃ

ない。一睡もせずに仕事をするなんて、今の私には考えられないのだから・・・こんな状態に陥っても、明日の仕事の事が気になってしまう。根っからの仕事人間だと思つと苦笑いだ。私は光と対面し、私は無意識に大きな息を吐いた。

「私に、何が言いたいのか？」

（続く）

第1章 Usual spot - 6

光は相変わらず、鈍く光り続けている。

「提案があるの。貴方にとっては現実的ではない話をするけど」
先程までの軽口が一切消え去り、急に声のトーンを落とし話し始めた。光から語られる内容は、夢の様な話で、現実離れた内容に、やはり夢なのか・・・そう感じざるを得ない。光の声だけが響く空間は、光と私だけが存在して居るかの様な錯覚を覚える。

いやにゆつくりと誘うその声は、底に沈んで行くようだった。地の底から響く様な、優しい母の声のような、逆らえない父の怒鳴り声のような、何とも表現する事が難しい。今まで聞いた事がない、音に堕ちて行く様で、足元が覚束ないように落ち着かない。

「短的に言うけど、この世界を捨てて、貴方の経験を活かせる世界に行ってみない？」

「・・・転職のお誘いな訳？」

敢えて言ってみたが、言葉にした事を後悔する程の冷やかさに、グツと言葉に詰まる。

「・・・生きていく場所を、ちょっとそこまで変えてなんて話ではないわね。」

この世界、貴方が生きているという現実を捨てて・・・そうね、この世界で一度死んで、私が生きている世界に来てほしいって言うたら、分かる？」

光が発した「死ぬ」という言葉だけが、やけに現実的に感じて背中がゾクリと冷えた。状況的に簡単な話ではないと思っていたが、夢にしても妄想にしても「死ぬ」などと聞くと、ゾツとしない。

「え？死ぬ？えっ？何故？？もしかして、やっぱりやばい状態？何なの？いきなり死ぬなんて」

沢山の疑問が浮かんでは消える。緊張と恐怖のあまり、少し声が上

ずっているかもしれないが、何とか声を絞り出し問うた。

「・・・死ぬのは困るよ、勿論」

「何故？」

何故困るのか、本当に理解出来ないと言わんばかりだ。いや、何故分からないのか理解出来ない。「何故？」この言葉に迷いからではなく、あまりにも常識的な問いに、直ぐに答える事が出来ずにいた。私の戸惑いなど何の障害にもならないと言う様に、爆弾発言を放った後でも変わらない声は、淡々と言葉を繋ぐ。

「あゝこの世界では死ぬって言う事よ。死ぬといっても、別の場所生きていくの。」

そもそも、今でも何故生きているのか分からないのでしょうか？ 貴方はこんなに頑張っているのに。誰も貴方の価値に気付いていないという事は、ここに貴方の場所は、ここではないのではないかしら。恐らく、どれだけ時間を経過したとしても、貴方が置かれた状況は変わらない。いいえ？ 年を重ねていく分、もっと生きていくことが辛くなるわね。だって、周りが貴方の価値を分かっているんだもの？

辛いわよ。年を取った後に、後悔しても遅いのよ。断言出来るわ、貴方は、何度でも絶望を、繰り返す」

いや、死んで別の場所って・・・行ってどうする！！ そう突っ込みを入れてはみるが、光の言葉に思わずゴクリと息を飲んだ。今の状態よりも悪くなっている・・・将来の私。あまりにもハッキリ断言するものだから、予言の様に脳内に響く。

「・・・そんなこと、分からないでしょ・・・？」

・・・フフフ

まだ分からないの？ そう言わんばかりに、光は侮蔑した失笑を発する。

「分かるわ。貴方は、数年前も同じ悩みを抱えていたわ。ただ今と違うのは、まだ将来に対して希望を持っていた事。多少若かったから。何事も経験だと思っていたのではなかったかしら。ま、仕事

だけではなく全てに、おいてね。

ほら、現に現状は悪くなっているじゃない？ 何にも変わっていないわ」

光は、一切私への気遣いを排除し、一方的に捲し立てた。そして「現状は悪化している」と言い放った後、一時の静寂が訪れた。私の思考は、今や目まぐるしく動きまくり、心臓は痛い位に高鳴り、息をするのも苦しい。断る言葉が即答出来ないのは、光が発した先ほどの言葉によって、押さえつけられているからだ。

『・・・そうだったな』

認めたくない、そう頭では強がってみても、心は激しく動揺していた。確かにそうなのだ。少し状況は変わっているが、今と差ほど変化がない悩みを抱えていた。変わりたくても、変われない自分。

自分の現状は・・・悪くなる一方だということに。

「変わりたくないの??」

そんな言葉に、グツと体に力がこもる。この光は、私の思考が読めるのではないか? 冷静になろうとする私の心を、ピンポイントで掻き乱す。

「・・・変わる?」

思わず光が発する言葉を、復唱してしまう自分が悲しい。何故、聞いてしまうのか? この異様さは明らかなのに。私の反応に感觸を得たのか、高揚したような口調に変化しつつある。

「ええ。それは勿論保障するわ! 私の世界は、一〇〇%実力世界だもの。この矛盾した世の中よりも、随分シンプルよ。

貴方達は、私の世界でいう英雄なの。世界の民は、貴方達をエンダと慕い、尊敬し、崇めている。こんなちっばけな世界での貴方の絶望なんて、取るに足らないものよ」

「具体的に何を?」

光は私の言葉に強い感觸を示し、興奮して居る様に見えて、私の心が警鐘を鳴らした。「危険だ」と。この状況下で興奮している自分がいる事是否定出来ない、と同時に冷静に分析をしようと躍起になっている事も事実だった。

「・・・。私の世界の民を救ってほしいの」

その光は、つい前までの饒舌が嘘かのように、随分と言葉を選択しながら話を進め始めた。

「今、私の世界は、今にも滅んでしまいそうな程、危機に瀕しているわ。罪もない、弱者が苦しんでいる。この状況を打破する事ができる救世主を、世界の民は探している。

・・・貴方だったら出来ると思ったの。だから、タブーを犯してこの世界にやって来た」

光の言葉は、私の心を熱くする。私だからこそ出来る何かがある

らしい。しかし、その症状を恥じながら、私は冷静に、冷静に自分の心を諫める。

「あのね……。私に何が出来るの？ 私には特別な力も、人並み以上の腕力も、知性もないわよ。もつと言えば、もう四〇歳も近いおばさんなの。この世の中には、もつと貴方が望む能力を持った相応しい人がいると思うけど？」

・・・そう、私に何が出来るのだ。この世の中さえもままならないというのに。言葉にしてみても改めて思う。こんな私に何が出来るというのだ。しかも「死んで」行くという。そんな事は出来ない。ここまで考えて、自分の発想に可笑しくなった。

『これは夢なのに。若しくは、私の現実逃避なのに、真面目に・・・馬鹿みたい』

私が、こう答えるのを待っていたかの様に、光は間髪入れずに答えた。夢だと思いながらも、夢にしてはリアルな展開に、心の中でブツブツと分析を続ける。どうしても私でなければならぬ理由が見つからないのだ。

「この世界の常識なんて、何一つ関係ない！ 年齢も、能力も、何もかも超越して人間の資質だけで戦える世界なの」
更に強い口調でその光はこう言い放った。

「だからこそ、私は貴方を選んだ。人として、常識のある貴方に託してみたいの！ だってそれが、私達の世界にとって絶対無二の強さになるから」

分かってている。分かっているのだ。この光は、私の一番弱い部分を見越して言っている事位。こう伝えれば私が反応する事を見越している。目的は分かっただけじゃない。それに、それは人として正しいのか？・・・そう思っているのに、何かが変わる・・・そう考える自分がある。

・・・それでも、私の中の声が、本当にそれでいいの？ そう問うのだ。

この世界を中途半端に逃げ出して、次の世界で上手く生きていける筈が無い、と。

「死んで生まれ変わりたいと思えるほど、自分が不幸だとも思えない。悪いけど、他をあたって」

馬鹿な私・・・この世界から逃げ出してどうするの。仕事だって、私だから出来ている事があるはずよ。こんな事、絶対あっちゃいけないよ。いくら夢だとしても、そんな事に希望を持つっちゃ駄目だ。そう、今までの人生や友達全てを投げ出していい筈なんて、ない。・・・これが私の妄想でなければの話だ。

少しの沈黙後、光は怒りを爆発させる訳でもなく、抑揚のない声で呟く。

「ふ・・・ん、そう？ また、来るわ」

光がそう告げた瞬間、部屋の中は漆黒の闇が広がり、そこには隣の住民のテレビの音だけが、低く響いていた。

第2章 The selection - 1

パソコンにデータを打ち込みながら、昨日の夜の事を思い返していた。気もそぞろになり、何度もバックスペースキーを押す。

『夢・・・』

いや、夢にしてはリアルで生々しい。何度も「変な夢を見た」と思おうとしても、光の一言ひとことが、頭から拭う事が出来ずにいる。こんなに鮮明に覚えているなんて、未だ嘗て体験した事がなかった。でも・・・と思う。

【自分の世界を救って欲しい】

そんな本やゲームの中の話・・・正気の沙汰ではない。本気で病んでしまったのかと思うのだが、目が覚めたら全てがいつも通りだった。しかし、病気の人間は一樣にそう思うのではないだろうか？

『・・・どうしよう、病院に行くべき？』

「はあー」

無意識に溜息を吐いた。周りの雑踏が、遠い場所から聞こえてくるような感覚に陥る。気が重い。気持ちだけがやけに高揚して、反動でとても疲れた感じに良く似ている。朝からずっとこの思考のループに陥っていた。

『今すぐ帰りたい・・・』

目頭を押さえながら、けだるくパソコンに目を向ける。先程からちっとも仕事が進んでいない。積み重ねた書類に目を向けて、溜息混じりに手を伸ばしたその時、右下から社内メールが浮かんた。

【お疲れ様】

『え、沙織？』

今日は朝から外回りだと言っていたのに、社内に居る事に驚いた。

【おはよう。朝見かけたら、何だか疲れているかなって感じだよ。大丈夫？ 昨日飲みすぎちゃった？】

彼女の優しさが、文面から滲み出ていて、いつもより何倍も嬉しかった。気にかけてくれる人がいる。それが、有り難くそして嬉しい。『それなのに、自分の中の声なんか心乱されて馬鹿だ、私。私ってば・・・単に寂しかっただけなんじゃない？』
そう思うと恥ずかしさに顔が熱くなる。

【昨日はお疲れ様。 実は昨日、変な体験をして】
いけない。本当におかしくなっちゃって思われちゃう。一気にデリートキーで削除をしながら、何とか無難な文章を打ち込んでみる。

【昨日はお疲れ様。 あれ、外回りは？】
愚痴が多くなっちゃってしまっただけ。 楽しかったね。 聞いてくれてありがとう！ すっきりしちゃった。

疲れてる？ そんな事ないよ。 でも、昨日少し飲みすぎちゃったのかな？ 夢見が悪くて（<|>） でも、大丈夫。

【気にかけてくれてありがとう！】
・・・送信、と。 夢見が悪いという事にした。 私、大丈夫だよ。

「ふー」と一息ついた時、彼女からのメールが浮かび上がってきた。返信が早い！ 夢見が悪いなんて書いたから、心配してくれているのだろう。 心配させた事を詫びながらも、心穏やかにメールに目を移す。

【外回りだったんだけど、急遽予定変更になったの。

ふふふ。 その夢見の話聞きたいな。一緒にランチしようよ！】
沙織の存在は、自分は孤独じゃないと気づかせてくれる。今日の朝、普通に目覚めて良かった・・・仕事に来る事が出来て良かった。そして、そう思えて良かった。腕時計に目をやると、後二時間足らずでランチの時間だ。 つい先程まで、中々手が出なかった書類の束に手を掛けた。

『二時間あったら終わるわね。 よし、ランチを楽しめるように、頑張って終わらせちゃお！』

最近忙しかったから、少し疲れていたのかもね』
『そう思うと、心なしかキーボードを弾く指先が、軽くなるのを感じた。』

第2章 The selection - 2

沙織の言葉に、微笑みを堪えながら、ランチの了承メールを飛ばした。

『あはは。大した夢じゃないって。でも、ありがとう！ じゃ、パスタ行く？ ほら、この前行った（＾・＾） じゃお昼にね』
送信、と。思わずニンマリ口元が緩む。

「あら、何だかご機嫌ですねぇ」
同じフロアの後輩が声を掛けてきた。

「え？ そう？」
データを打ち込む手を止めて、上司からの視線を阻むように背を向け対応する。こんな場面を良く思う上司ではないからだ。少しでも長く話そうものなら「給料泥棒かね。就業時間中は、集中してほしいものだがね。」なんていう声が飛んでくる。当たり前前の注意だと思っているが、今日はこれ以上の気遣いは出来ない、そう考えての対応策だった。

「忙しいけど、もうすぐこの仕事が終わるそうだからかな」
そう答えながら、朝のセットにどの位の時間を要しているのか想像も出来ない、完璧な風貌に少し見とれながら笑った。

「そうなんですかあ〜？」
後輩は大きな瞳を更に大きくしながら、髪をクルクルと指で回しソツと耳打ちをする。

「昨日の・・・あれ。気にしない方がいいですよ。あの粘着質って、もう病気ですから、ね？ みんな言っていますよ。嫌がらせだっつて」

この会社の女性社員だからこそ、分かる暗黙の空気が流れる。私は、小刻みに頷いた。

「じゃあ〜」

そう言いながら、後輩は屈託のない笑顔で微笑み、その場を後にし

た。彼女の言葉は、私に対する嫌みではない。

これが会社の現状だ。この会社の女性社員は、希望をもって入社した時から、長い年月を掛けて、少しずつ仕事を諦め、この会社に期待する事を止める。先程声を掛けてきた後輩も、入社当時は会社の在り方に随分と会社に警鐘を鳴らし、戦っていた一人だった。しかし、

「これ以上会社の方針に納得できないのであれば、部署移動も・
」

そんな会社の声に、女性社員は落胆し諦める。だから、それぞれが方向修正を行っていくのだ。ある者はプライベートに。ある者は結婚に。ある者は外の世界へ可能性を求めて、会社を辞めていく。女性蔑視だと叫ぶ前にやる事があるのでは？と思う時期もあった。しかし、会社全体に根付いた覆らない現状に、皆の思考は止まるのだ。私は、どこにも行けなかった。社会人として与えられた仕事、そしてそれ以上の可能性を信じて、疑問を繰り返しながら、方向転換が出来ずここまで来たのだ。

これ以上考えてはいけない。ここで、私は思考を止めた。

「で？ どんな夢だったのよ？」

ゴルゴンゾーラのパスタを口に運んでいた私に、沙織は嬉しそうに聞いてきた。

会社の近くの洋食店で、既に店内は一杯だ。私たちは十二時丁度にダッシュをして、何とか席を確保出来た。必死に走ったものだから、到着した時には息切れがひどく二人で笑った。スパゲティはとても美味しく、沙織との会話は楽しくて、朝の憂鬱な気持ちを、あつという間に払拭してくれる。

「何でそんな嬉しそうなのよ？」

私は話したい衝動を何とか抑え、ニヤニヤ笑う沙織に問う。

「だって、夢見が悪いって言っている割にすっきりした顔をしているじゃない？ 実は素敵な夢だったのかしら？ って思ってるね。」

ねえ？ ホントに夢の話？？」

もぐもぐと口を動かしながら、それは貴方の気遣いが嬉しいからなの……そう暖かい気持ちになって自然と笑みが零れる。

沙織の言葉に背中を押された気持ちに成り、

「昨日の今日でそんな事、ある訳ないじゃない！」

うーん、あのね……笑うよ。絶対。人の夢を聞きたがるなんて、変な人〜」

まだ話してもいないのに、嬉しそうに笑う沙織を見ながら、絶対笑われると確信した。私はかなり用心深く、内容をかなりオブラートに包んで、あたかも夢だったかのように（実際夢だったと思うのだが）昨日の夜の事を話した。

「で？ その光から自分の世界を救ってくれって言われたって？」私の言葉を復唱しながら、沙織はポカンと私を見ている。私は波立つ心臓を必死に隠しながら、とぼけた顔で彼女を見る。

「ねえ？ 変な夢でしょ？？ 何だか可笑しくなっちゃって」

沙織は、止まっていた手を思い出した様に動かしながら、スパゲティをパクリと一口頬張った。モグモグする口を押さえながら、今にも吹き出しそうな顔をしている。

「ん、もう！ 何の願望よ？ 勇者に成っちゃうの？」

二人、「無いつて！ そもそも成れないって！ て言うか、無理だから！ あはは！」と噴き出した。

「なーんだ。何とも思っていないかった人が夢に出てきて、好きってことに気付いたの……なーんていう甘〜い展開を期待していたのにい。ツマンナイ！」

沙織の想像力の豊かさに、思わず笑いが出てしまう。

「言っただじゃん、変な夢だって。そもそも、一体なんの妄想よ。さすがに、それはないんじゃない？」

完全否定する私の言葉に、

「分からないじゃない？ 駄目よ〜自分から否定したら、夢にも出ないからね」

そう言いながら、沙織は少しプツと頬を膨らませ、悪戯げに笑った。私は、そんな彼女を見て、ホッと体の力が抜けた。

『なーんだ、やっぱり夢だったんだ』

いつもの日常に、自然とそう思えた。そうか、そういう風に笑い飛ばしてほしかったのか……。

「午後は？ 外出なの？」

「うーん。そうだねえ。予定はあつたけど、今日は会社にいる予定。事務処理が溜まってて。いい加減マネージャーから怒られそう」

食後のコーヒーを飲みながら、ふうと彼女は溜息を吐く。私はお昼が終了する二十分前の時間が好きだった。明るいつゆの光と他愛無い会話が、どうしてこんなに楽しいのだろう。

「ふーん。一日外出していると仕事が溜まって大変だねえ」

「いえいえ、一日パソコンと向き合っている方が無理ですから！」

「だ〜から、事務処理溜まるんでしょ??」

「違うない！」

店を出る頃には、朝とは打って変わって、晴れ晴れとした歩みで部署に向かった。

第2章 The selection - 3

昼食から戻った私は、先程までの幸せな気持ちと相反した状況に追い込まれていた。

「少し時間、いいかね？」

上司がさも愉快だと言わんばかりに、ニタニタと笑いながら肩を叩いて来たのだ。いつもであれば、長々と自席で小言を言うタイプなのに、あえて会議室を指定してきた時、嫌な予感が過った。

広い会議室に二人が向かい合って座ると、圧迫される空気に気持ちがあたふたする。そんな空気すらも楽しむ様に、上司は長い前置きを置きながら言葉を繋いだ。

「それでね。君に、会社からお願いがあつてねえ」

上司の猫なで声を聞いた瞬間、後頭部から背中にゾワツとした感覚が流れた。もったいぶりながら、あのねえ、でねえと繰り返している。

「庶務に欠員が出てねえ。ほら庶務って仕事は地味だけどさあ、やる事いっぱいあるじゃない？ だって、社員が働きやすい状況を作るのが仕事でしょ？」

「……あの、それで……？」

この後の展開は、聞かずとも分かる。上司の言葉を待つまでも無く、私の脳裏には様々な思いが駆け巡る。

『……庶務？でも、まさか？ 部に私がいなくなったら？ いなかったら？』

出世をする道はなくても、それは会社の方針だからと思っていた。私の存在は、認められていると、認められている筈だと思って頑張ってきたのだ。目の前の男は目を細めながら、嬉しそうに薄ら笑いを続けている。言葉を発せない私に向かって、トドメを刺す様に大きく身乗り出す。

「ふう。だからねえ、長く経理で実績を積んでもらった君に、今度は庶務で活躍してほしいと思っっているのだよ」

「・・・その経験を活かす仕事が庶務課にあるとは思えない。いや、庶務の仕事がどうと言う訳ではない。会社に無駄な仕事はない。会社に所属している以上、異動は当然視野に入れておくべきだろう。会社は組織なのだから・・・そう思っているのに、思考は拒絶を続ける。」

「分かっていて。分かっているけど！今の部署で頑張ってきた・・・それが唯一、この会社にいる理由だった。それだけを支えに、仕事に取り組んで来た。それだけが、私の誇りで。それだけが、私の希望で・・・」

（庶務課は、長年勤めてきた女性社員の、最後に行き着く場所と言われている場所だ。評価は厳しく、社内の不満の捌け口。会社がこの部署に辞令を出すときは、リストラ勧告と同じだといわれている部署。またの名を、「不要島」。忌み嫌われる部署だと言われている。ここに異動を命じられた社員は、それだけで退職を決意する程の部署だった。）

この会社に勤めてきて、初めてじわりと目頭が熱くなった。しかし寸でで、その感情を押し殺す。この人の前で泣きたくない、その一心で何とかその一線を越えずに済んでいた。

「課長、私の・・・仕事は？」

「あー。君はもうその事は心配しなくていいよ。僕が見るから。大体さあ、君少し立場をわきまえて発言したまえよ。この前だって僕が分かっているような発言なんてして、僕の立場ないじゃない？まあったく！飛ばされても文句言えないよねえ。見ている人は見てるっていうかさあ。」

「だいたいさ〜長年勤めているからって、勘違いしてないかね？仕事は年数じゃないよね、どれだけ仕事に対して誠意と責任を持

つてやるかでしょう？ 自分の専売特許ですくみたいな顔してもらつても、会社として迷惑つていうか、そんな会社の迷惑、分かっている？ そんな・・・」

どこかの自己啓発の本を読みあげる様な言葉は、私の中に何一つ入つて来なかつた。

『この前の報復？ そんな理由で？』

「自分だけが、全体を把握しているなんて思っている訳？ そんな訳ないよねえ。マニュアルが徹底されているこのご時世に。誰でも出来るつての。あんな仕事。」

自分だけが特別ななんて思つて仕事されると迷惑だ」

私を飛ばす理由をずらずらと並べ、課長は捲くし立ててくる。ガラシとした会議室に、上司だけの声が響き、頭の中で木霊するような錯覚を覚える。

「おつしやられている意味が、分かりません」

こうなると、手がつけれない。でも、言わずにいられない。勿論仕事で、彼の事を馬鹿にした態度を取つたつもりは無い。チームの事を思い、経験からくる助言だと思つていた。そんな風に思われてしまつていたのかと思うと、もう自分の全てが否定されたような気がして、自分がこの場に居る事自体が不思議でならなかつた。

私の言葉がカンに障つたのか、フーフーと荒い息を吐きながら、こう上司は吐き捨てた。

「ていうか、も、明日からうちの課に来なくていいから。荷物まとめて、とつとと庶務に行つてよ」

この言葉に、今まで我慢してきた感情が、一気に沸点まで到達し、そして弾けた。何なのだ、この状況は。

「その言葉は、会社のご判断ですか？ 部長に確認させて頂いても宜しいのでしょうか！」

私の剣幕に、切り札と言わんばかりに、ニタリと笑う。

「ふう、当たり前だろ。会社からの辞令だよ。君に対するね。あ

くまで僕は、代弁者だけど？」
そう言い放った。

『え……？』

底の見えない地底へ、一気に突き落とされた……。そう感じた。これが会社の判断だつて？ 意も言われぬ、虚無感が襲う。

何故？ 何故に、長年頑張ってきた私に？ ここまでの仕打ちって何なの？ 誰にでも出来る……。そんなことは分かっている。

『ふ……。リストラ対象者は、皆一様にそう思うか……。』

突き付けられた現実に、何だかもう、どうでもよくなってきた。窓から差す午後の暖かい日差しですら、私の気持ちの慰めにもならない。廊下から聞こえる雑踏が、別の世界の音のように聞こえて来る。仕事も、会社も、この上司も、怒りも、悲しみも、どうでもいい。

さすがに、ジワリとくる感情を抑えきれなくなる。あーもう耐えられない。いつその事、辞めてしまおうか。考えていなかった訳ではない。今の生活は出来なくなるかもしれないが、今以上の屈辱があるだろうか？

今までの自分を思うと、可笑しいのか、悲しいのか、何故か全てが混じり合い、自虐的に少し笑った。

第2章 The selection - 4

その刹那、突如昨日の光が現れた。

「え」

あまりの衝撃で動けない私に、その光は気だるそうに単調な声で、合わせてこの状況が当たり前と言わんばかりに告げる。

「さあ、どうするの？ 昨日はあせって台無しにしちゃうと元も子もないから、一旦引き下がったけど、正直あんたに付いているのも飽きちゃった。何とか扉は開かれたし、もう強引にでも連れて行くわ」

「何故・・・ここに？」

光の先に居る上司に目を向けると、こんな状態にも関わらず、にやにやと締らない顔をしている。

「私・・・しか見えていないの？ やっぱり私がおかしく・・・」
絶望の淵に立たされる思いで、もう一度目を落した時、上司の異変に気付いた。確かに笑いながら座っているのだが、明らかに人間のそれらしくない。人間はこんな風に、不自然に存在する事が出来るのだらうか。

一瞬、突然の光の出現に、驚いて動作が止まっているのかと思っただが、全てが一瞬にして画像として切り取られたようだった。半開きの口、そして今では焦点が定まっていない目。正に蠅人形そのものだ。

「な・・・何？ 何が起きているの！」

あまりの非現実的な光景に、思わず叫ぶ。理解の範疇を超える状況に、ゴクリと息を飲んだ。

「何なのよ！ 私がおかしいの？ 何故私なのよ！」

「もう、本当に面倒くさい・・・この女」

私の叫びに、ブツブツと言葉を繋ぐ。

「あゝうざい。たく、こっちの人間は、何故にそう考えすぎるのかしら？ もう少し、シンプルにしてくれない？ 面倒だわ。それとも、自分の世界の常識以外を、受け入れるキャパが少なすぎるのかしら。」

「はあ・・・本当に理解不能。あんたである理由は、昨日伝えたわ。ま、もっと言うと、子供だと死ぬ事を現実に捉えられなくて、すぐ死んじゃうって事かしら」

「光の玉は私の存在など、どうでもいいというかのように、独り言のように捲くし立てている。」

「ゲーム感覚だといいい結果を出すんだけどねえ。少し痛い思いしただけで、戦意喪失しちゃうし。自分の限界が図れなくて、力のコントロールにムラがあるし・・・。だから、簡単に生まれ変わる、元の世界に戻るなんて夢を見る。大人も同じようなものだけど、諦めも早いから。」

「物事の道理が分かる前から育てても良いのだけど、そんな時間も無いしね。じゃ〜どうしようかかって考えた時、大人に目を付けたって訳。人間って人生が半分を過ぎると、漠然と命は永遠ではない事を認識する様になるのよねえ。・・・それに、特にあんた、もうこの世界にいらぬ人間じゃない？ 通常は成功者が選ばれるけど、あんたに限っては、この理由しかないって」

「あ・・・の、どうするつもり？」

「全く！ 思った以上に時間が掛かったわ。最悪最低な状況に追い込まれても、何かしら活路を見出したりして・・・本当に、冗談じゃないわよ。本当に厄介な人間。」

「私だって、もっといい人材に当たりたいじゃない！」
「私の質問なんて耳に入っていないようだ。明らかに私に対する不満にゾクリと背筋が凍る。意味は理解出来ないが、昨日とは、全く異なる状況である事だけは明らかだった。こんな場所に突然出てきたのも、状況が切迫している様に感じる。」

「扉が開いたって何！？」

さすがにもう夢だとは、思えなくなってきた。何よりも、この状況は異常だ。

思わず後ずさりをした瞬間、光から鋭く何か伸びて手を掴んだ。「いやっ！」

そのまま今まで味わった事が無い程の力で、グツと吊るし上げられた。余りにも強い力のせいで、掴まれた手首から血の気が引き、思わず唸る。何とか振り解くべく、手を掴んでいるものに目を移した時、思わず目を疑った。

それは手だった。しかし、只の手では無い。私の手を掴んでいる手？・・・え、これは骨？

「言っただでしょ。あんたが生きている現実を捨ててって。あはは。」

あゝはははははははは！！

光の感情は今や沸点に達したかのように、甲高い高笑い繰り返す。この異常な状況に、恐怖のあまり動く事も話す事も出来ない私に、その光はこう繋げる。

「死にたくなかった訳ではないみたいだど・・・でも、未練もないでしょ？」

そんな恐ろしい言葉と同時に、グイツと光に引き寄せられた。光だけで、他は何も見えない。見えない事が救いとすら思える。

「痛！！」

更に腕をねじ上げられ、骸骨の手は今や目の前まで迫っていた。もう、私の存在なんてさほど重要では無いと言わんばかりに、自身身に言い聞かせるように言葉を繋げる。

「もう、私は十分待ったわよね？ 多少強引でも、もう構わないわ。」

そもそも、貴方が良い理由なんて知らないわよ。私が聞きたい位だわ。

ネガティブでえ、力も無いくせに正義感だけが存在価値で？ 正

しい事をしていれば幸せになれるって思っている馬鹿な生き物。正に暗いったら。なのに、何の努力もしない上に、全てにおいて中途半端で。

今までスカウトしてきた中で、一番つまらない人種。それなのに、あんた、また頑張るつもりでいたでしょ？ 我慢出来なくなっただわ、いい加減。

何とか扉は開かれたし、あんたの意志なんて、どーでも良いの。強引にでも、連れて行く、わ！！」

掴まれた手に、更に力がこもる。

「私、本当にあんたが嫌い。あの世界で、さっさと、のたれ死になさい。」

悪意が籠る言葉と声に、体から汗がドツと噴出した。自分自身に何が起こっているのも理解出来ない。理解出来ないが、昨日とは打って変わって危険な状況である事は確かで、生まれて初めて「死」というものを、強く実感する状況に追い込まれている・・・それだけは理解出来た。

第2章 The selection 5

ギヤハハハ!!!

さも愉快だと言わんばかりに、光が笑う様に、目を背ける事が出来ず直視してしまう。死ぬ恐怖よりも何倍もこの光が怖い。更に締め上げられ血の気が引き、もう駄目だと意識が朦朧とした時だった。

バン!!

その刹那、会議室のドアが、勢いよく開かれた。驚いて振り返ると、颯爽と入ってきたのは、誰でも無い、沙織だった。

「沙織!?!」

知った顔に、思わず叫ぶ。いや、ここは会社だ。誰が会議室に入ってきてても、おかしくはない。しかし、こんな不可解な状況に、知った人間が現れる事に驚いた。使用中なのを知らなくて、入ってきたのだろうか。

「逃げて!」

私は、無我夢中で沙織に向かって叫んでいた。彼女をこんな狂った状況に、巻き込みたくない! 光の後ろに蠟人形のように存在している上司の様になつてしまつたら!

「何だかおかしいの! だから!」

それでも沙織は、何事も無いかのように、ゆっくりと近づいて・・・そう思つた瞬間、私と骸骨の手を振りほどいていた。その行動はあまりにも速く、一瞬何が起こつたのか、動く事が出来なかつた位だ。しかし一番驚いたのは、光の主だったかもしれない。一瞬沈黙が流れ、

「えっ? は? なに? あんたなんなの?」

動揺する声が響く。沙織に手を引かれるままに、今まさに私達がドアから抜けようとした時に、

「な! てめえ! 何者だぁー!!」

耳につく怒涛が、割れんばかりに響き渡った。その直後、空気を振らす衝撃が、私達の髪先を突き抜けた。揺れる髪に違和感を覚え、思わず振り返った先には・・・つい先程通り過ぎた場所が、音も無く挟られている光景が広がっている。それは正に一瞬にして、豆腐を押し潰したように、ただその空間だけがぼっかり壊れていたのだ。

「はっ・・・？」

言葉にならない。何が起きているのだ。一体、昨日から何が変わってしまったのだというのだろう。

「走れ！」

沙織の声に反応して、無意識に足が前に進んだ。沙織は私の手を引いて、中央のエレベーターを指し、廊下を駆け抜ける。毎日沢山の人が行き来する通路なのに、誰一人として会わない。扉の向こうに広がるはずのオフィスにも、人の気配を全く感じない。

何故私と沙織が、こんな状態で、ここにいるんだろう。

「どこに行くの!？」

エレベーターに乗り込むと、一階のボタンを押し、続けて「閉」のボタンを押す沙織に思わず叫んでいた。目の前の廊下に向かって目を見開き、ボタンを押し続ける沙織の視線を追った時、あの「手」が目前に迫っていた。骸骨の手だけが、私を捕まえんと骨だけの指を広げ、私達を追いかけてくる。

「ちょ！ 止まれ！！ ふざけんよ！！ てめえ！！」

伸ばされた手に、『捕まってしまう！』恐怖に思わず目を瞑った瞬間、エレベーターの扉が閉じた。体を感じる降下感。状況の変化についていけず、息が上がる。

「あ・・・」

問いかけようとした私の言葉を遮り、沙織は言った。怖い位のまっすぐな目に、この異常な状態が現実であると思ひ知らされる。姿かたちは沙織なのに、醸し出す雰囲気は、全く面影を感じさせない。

とてつもない威圧感を感じる。

「契約は結ばれた。貴方は、もうこの世界に留まる事は出来ない。決めなければならぬ」

「沙織・・・？・・・貴方、誰？」

沙織はそこで一度、一息置き言った。

「New worldに先導する案内役を選択するのだ。私か、先程の骸骨の手か」

私は、思わず沙織の腕を握り締め・・・その自身の手を見て、今自分が大きく震えている事に気付いた。

「わ、私は何も契約なんて」

心臓の高鳴りで、声が上手く出ない。沙織は強い視線を投げたきり、微動だにしない。

「そうだろう。しかしあいつは、貴方の強い失望感を利用して、強引に扉を開けてしまった。

もう時間が無い。手短に言おう。貴方の精神は肉体から引き離され、この狭間の世界のみ存在している。この場所は、New worldの扉が開いている間だけ開かれる。もう幾分もしない内に消滅する。・・・このエレベーターが下に着くまでに決めなければならぬ」

「死んだの？ 私・・・」

行きたくないって言いたいの、一切の拒絶を許さない物言いに、それだけが言葉として口から出た。滴り落ちる涙は、こんなに熱いの。

「あの光が現れた瞬間に、貴方はあの男の前で倒れた。本来は、この世界との決別を本人が強く望まないと開かれない扉が、貴方を絶望に導く事で強引にこじ開けたのだ。

そのお陰で、開いた扉の衝撃を辿り、私はここに来る事が出来たのだ。お昼に貴方の話を聞いて、目を離さないようにしていたのだが・・・巧妙に隠されてしまった」

体中の血が逆流したかのように、カーと熱くなった。その時の光景が目に見えぬ。慌てふためく上司と、左遷を言い渡されてショック

で倒れた私。

「もう、この世界には戻って来られないの？」

「・・・その希望だけは捨てるのだ。もう貴方はこの世界の所有物ではない」

二人の間に、沈黙が広がった。暫しの間二人は、エレベーターが降下する階数を目で追う。三階のランプが付いた。もう一度沙織を見たが、不動のまま何も言っていない。沙織ですら、味方ではないのかもしれない。当然の様に、この世界との決別を口にするのだから。

戻りたい・・・つい先程までの日常に。それでも、でも分からないけど、もうこれしかないのでしょうか？ 誰と行くかですって？ 心の中で降下する階数を数えた。二階、一階・・・ふーと大きな息を吸った。

「行くわ。貴方と」

(第2章 終わり)

第3章 New Land - 1

強風が女の体を揺らした。外気の冷たさが、体に吹きつける風が、否応が無しに体の自由を奪っていく。

「な・・・え？」

『ついさつきまで、エレベーターの中にいた筈・・・なのに？』
混乱する思考を何とか整理しようと躍起になる。しかし現実味が無い状況に、混乱し困惑し、思考回路が止まった。もう一度、周りの風景に目を向ける。

「ここ・・・どこ？」

どこまでも続く広大な土地、うつそうと続く深い緑の森、巨大な山脈が連なっている。空には雲が立ち込め、灰色の世界がどこまでも続いていた。

『一体どこまでが現実なの？』

そびえ立つ山脈とほぼ同じ高さに浮いている自分。風で息苦しく、今や女の体は、バサバサと風に振られる木の葉の様だ。たまらず隣の沙織の腕を掴んだ・・・筈であった。触れた感触に、激しい違和感を覚え体が固まった。想像していたそれとあまりに違っていたのだ。

受けた衝撃に女はそれを直視し、それも女を静かに見つめていた。
『・・・な、これは何？』

目の前の異質な何かは、明らかに人間ではない。しかし、地球のどれとも違う。

身丈は三メートル位あるだろうか。人間の手に当たるであろう部分は、足のつま先に当たるほど長い。首は飛びだし、顔の半分以上もあるうかという裂けた巨大な口。ギロリとした大きな目は金色に鈍く光り、獣の様に縦に黒い瞳孔が入っていた。それだけでも倒れそうな程の衝撃なのに、この生物は静かに、そして厳かに世界の序章を告げる。

「この世界に来たならば、これから起こるであろう事を全て受け入れることだ。貴方の常識はここでは通用しない。

しかし、受け入れなければ・・・そう、決して希望を失ってはならない。何を聞いたかは知らないが、貴方がこの世界に必要なことは確かなのだから。自分がやるべきことを探し出し、その為だけに生きていくのだ」

『しゃべる・・・ん、だ？』

「あ・・・貴方と一緒に？」

どこまで受け入れればいいのか分からないまま、女は生きて行く為に問うた。しかし一時置いた後に、

「・・・この世界に来たエンダに同行者はいない。基本、初めは一人だ。我々先導者がエンダと会う事は二度とない。」

この回答は、女を失望させるのに十分だった。日本という安全な国で、何不自由なく生きてきたのだ。今、こんな世界に放り出されたら、それこそ直ぐにでも死んでしまう。

「ちよっ！ 待つて。こんな場所で、一人で?? 言語は? 生活の糧は? こんな私に何が出来るの? 私に望むことは何?」

すぎるような気持ちで問う女に、緑の生き物は淡々と答えた。

「矛盾に感じるかもしれないが、エンダ個々に望む事は何も無い。この世界で死なずに、生きる事だけだ・・・道は既に作られている」

「既について・・・どの様に? あの骸骨は、この世界の人々を救ってほしいって言うていたわ。何かあるから、他の世界から私を連れてきたのでしょうか? どうすれば良いの? 教えて! 何を目的にして生きていけば・・・」

何とか喰い下がる女の言葉を、無情にも打ち砕く声が響く。

「今、全てを伝えることは出来ない。貴方が自分で気づかなければ、この世界に来た真の理由は解読出来ない。・・・何故今日という日が訪れたのか、分かる日が必ず来るだろう。今は、ただ生きることだけを考える事だ。そうでなければ、今日にでも貴方は死ぬ」

目の前の生き物は、女に質問の余地を与えない。しかし「死ぬ」その言葉だけが、脳裏に何度も木霊する。

『死ぬって・・・そんな世界だったなんて・・・？』

「時間がない。今から始まりの地に連れて行く。初期のエンダが、生きて行くのに最適な場所だ。そこから、状況を整えて・・・」

何一つ納得する言葉を得られずに、話が矢継ぎ早に進んでいく事に、女はどうする事も出来ずにいた。しかし刹那、沙織の事を思い出したのだ。

「さ、沙織は？ 無事なんでしょうね！？ 沙織に何かしたら・・・！」

『私・・・自分の事ばかりで！！・・・何かしたら・・・こんな生き物を目の前にして、何が出来ていうの？ こんなに震えは止まらなくて、異常な世界で体一つで生きている私に。』

・・・でも何が起きているのか全く理解は出来ないけど、私のせいで沙織に何かあったら！』

沙織を思うと、生きた心地がしない。女の言葉に、金色の瞳をジッと向けてその生き物は静かに答えた。

「問題は無い。我々は、直接あなた方の世界の人間に危害を加える事は出来ない。時々あの人間を通じて、貴方の情報を収集させてもらっていた。あの人間を媒体に出来たのも、狭間の世界が開かれたあの瞬間だけだ。あの光に包まれた骸骨も、貴方があの世界に居なければ何の手出しも出来ない。勿論私が近づく事も不可能だ。」

あの人間の貴方に対する慈しみが、私をあの場に導いた」

今この瞬間だけは、女は恐怖を忘れて目の前の生物にジッと目を向けた。一〇〇%信じた訳ではない。しかし自分を案じる沙織の優しさは、信じられる。そしてこの生き物にそう言わしめた沙織を思うと、目頭がグツと熱くなった。目の前の生き物の瞳の奥を読み取る事など到底不可能だが、見た目の得体の知れなさとは裏腹に、自分を導いてくれた行動を思い返し、漠然と、本当に漠然と、

『信じても良いのだろうか？』

そう思い始めていた。

第3章 New Land - 2

「探した」

その時、別の声が出た。この声には聞き覚えがある。一番受け入れがたい声が響き、女の体がビクリと揺れた。

『夢なら覚めて!!』

恐る恐る声の方向を振り返ると、目の前には山と見間違っほどの巨体がそびえ立っていた。

「え……」

隣の生き物の比では無い。女の世界では存在しない生物に茫然と立ち竦む。その女の前に、スツと緑の生き物が立ちはだかり、体格の違いに怯むことなく飄々と言葉を繋ぐ。

「ほお……よくこの場所が探し出せたものだ」

巨体の生き物は、噴き出す怒りを何とか押さえ込み、

「……接点地点を血眼になって探したわ。広い世界だからって、ゆっくり構えてんじゃないよ。こーの盗人があ!!」

感情が一気に沸点に到達する様に、語尾が大気を揺らす。手だけの骸骨は、今や身丈が一メートルもあるつかという巨体と化し、上半身が骸骨、下半身が馬の様な風貌に変わっていた。声を発している部分が顔なのだが、鋭利な牙……ここからの位置では、それしか見ることが出来ない。

『光の正体はこれだったの!?!』

手だけの骸骨の正体に、ガクリと膝が折れペタリと座り込んだ（と言っても、空の上で不安定この上ない）。目の前に立つ緑の生き物が、普通に見えてしまう程禍々しい姿だ。

「この女をこの世界に連れてくるだけに、どれだけの時間を要したと思う? 扉を開くまでに五年よ? 色々な手回しを重ねて（ここで何かを思い出したか様に、ギャハハと笑った）、やあっと開いたというのにい? それを横から? 冗談じゃないよ!」

ドン！！！！

言葉が終わると同時に、一瞬にして爆音と業火が渦巻く様に襲いかかってきた。世界を全て飲み込みそうな炎に、女はギョツと目を閉じる。

『死ぬんだ・・・私』

「目を開くのだ。これから先、如何なる苦難に立ち向かおうとも、見開いた目を閉じてはいけない。全てを見届け、己の進むべき道を見間違わない為に」

轟音に紛れて、緑の生き物の淡々とした声が切れ切れに聞こえてきた。その声に導かれる様に、目を見開いた時、一瞬心地よい風が吹いた。

「てめえ」

骸骨が黒煙を口からブスブス吐き、怒りにその身を震わせる。

緑の生き物と女を守ったのは、光の壁と見間違わんばかりの巨大な盾だった。荘厳な音と共に光の盾が出現し、幻想的な光景が広がっていた。業火は盾にその行く手をはばかれ、散り散りに消えつつある。

『今の何・・・？ 炎？ 盾？・・・どうやって出したの？』

目の前で繰り広げられる現実を受け入れきれない。

「その攻撃・・・この者を殺す気か？」

「てめえ、何者だ・・・」

全てを燃やしつくしたと確信していたのだろう。予想を反した結果に緊張感が漂う。

「どれだけの時間を有したとしても、この世界に来る者は、自らが扉を開けなければならぬ。だがしかし、お前は・・・この世界の秩序を破つたのだ」

何者にも屈しない強い尊厳を保ちながら、緑の生き物は淡々と答えた。

「チツジヨ〜？ てめえ、覇騎王の関係の者か？ 古いしきたり

に縛られて、この世界を壊そうとした悪の権現。・・・ないな、全て滅んだはずだ。

そもそも、やり方がなんだって？ 正義も悪もねえよ？ 行き着く場所は一つだ。問題は、誰が連れてきたかだ。

ちなみに、こいつは駄目だ。絶対明日にでも死ぬね。別に捨て置いてもいいけど、こいつ殺さなきゃ気が済まな、い！！！」

骸骨は、発した言葉と同時に巨大な爪を振り落した。緑の生き物同様、女を捕らえた！！そう骸骨が「ニヤリ」と笑った瞬間、二人の姿は一瞬にして消えた。

「クソが！！！」

女が体を掴まれたと認識した瞬間、体に強いGがかかった。体が押しつぶされる感覚に目がくらみ、今にも気を失いそうだ。受ける風圧で目を開ける事もままならない。

『あの骸骨から、逃げているの？』

最悪の状況に追い込まれている筈なのに、何故か先程の骸骨の言葉がやけに耳に残る。

『扉を開くまでに五年・・・？』

【この女をこの世界に連れてくるだけに、どれだけの時間を要したと思う？ 扉を開くまでに五年よ？ 色々な手回しを重ねて、やあっと開いたというのにい？】

『骸骨の手が、私を連れてくるのに五年を要した・・・？五年・・・？色々な手回しって・・・え？・・・え？』

嫌な汗がジワリと全身から噴出す。「と、止めて」そう、思わず声に出した瞬間だった。更に体全体に強い衝撃が襲う。・・・そう感じた瞬間、女は緑の手から投げ出されていた。女は見た。天地の様子。そして緑の生き物が、自分からずっと離れた場所から落下していくのを。

女の意識は、ここで途絶えた。

第3章 New Land - 3

「うう……」
女は、冷たい土の感触、そして直接肌に触れる外気の寒さに目が覚めた。

軋む体を何とか起こし、周りを見渡す。先程の二体の生物の気配はどこもなく、あるのは見渡す限り無残にひび割れた枯れた土地だけだ。

「頭……痛い……」

まとまらない意識を何とか集中しようとするのだが、脳が考える事を拒否している。加えて頭が割れそうな程、痛い。

『寒い……』

身を刺すような寒さだった。今まで体現した事の無い気候に、身も心も凍りつく。寒いはずだ。女が纏っている物と言えば、肌着と、薄い皮のワンピース。そして、薄い革靴。それだけだった。何故か女は、これだけの装備で荒れ地に一人置き去りにされていたのだ。

あれほどの高さから落下して、何故無事なのだろうか。混沌とする意識の中で、女は必死に何かを思い出そうとして足掻く。思い出そうとする端先から、記憶がこぼれ落ちていく感覚。ガシガシと額を掻いた。

『思い出せ！ 思い出さなければ。大事な事が、忘れていけない事があった筈。私は何故ここに……私がここにいる、理由。理由……？』

「お母さん……」

女が思わず唸る。自分が発した言葉に、頬を涙が伝い、

「お母さん……」

フラリと立ち上がり、どこことなしに歩き始めた。ゴツゴツとした地面が、薄い足裏の皮に食い込む、

『痛い……寒い……。』

この広い空の下、どこに進むべき道がどこなのか分からない。しかし自分の何かが警鐘を鳴らす。ここにいたら確実に死ぬぞと、死にたくなかったら歩くのだと。心の声に従い、重たい体を引きずる様に歩き続ける。冷たい外気と、鋭い風が女の肌を突き刺していく。

「お母さん・・・お母さん・・・お母さん・・・」

思考はほぼ停止していた。意識して呟いている言葉では無い。しかし女は、呟くのを諦めない。何があっても、この単語だけは忘れてはならない、零れ落ちる記憶の奥に刻み込まれている。

ズルズル・・・。何日歩き続けただろう。革靴は既に原形を留めない程ボロボロになり、靴底はかろうじて薄皮で繋がっているばかりだ。原形を留めていないのは何も服だけではない。そこには嘗て女性であった面影すらなく、痩せこけ全身が雨風や埃で真っ黒な女の姿がある。

寒い、痛い・・・もうそんな痛覚すら女にはない。状況は一向に良くなり、更に悪化するばかりだ。強風が吹き荒れれば、一〇〇メートル進むだけでも一時間以上かかる事もあった（あくまで感覚だが・・・）。明確な意志や目的があつた訳ではない。歩かなければ・・・生きなければ・・・生きて確認しなければならぬ。その意識だけが、女を歩かせていた。

ズルツ、ズルツ足を引きずりながら、その歩く音だけがひたすら耳に入ってくる。ズルツ、ズルツこのテンポを崩してはならない。少しでも歩く事を辞めたら、もう一歩も歩くことは出来ない。一歩一歩ずつ歩き続ける。

荒野には、更に冷たく厳しい大気が吹き荒れた。杖の代わりとして枯れ木を持つ手も、当の昔に無い。朦朧とする意識の中で、『歩かなければ、止まるな、足を前に、前に・・・』そう何度呟いた事か。

しかし女に限界が来た。動けない。もう何時間も後一步が踏み出せ
ずにいる。

『あと後一步・・・あと一步・・・あと一步・・・後一步・・・
朦朧とする意識の中で、目の前に広がる荒れ地を見続けた。もう、
涙も出ない、声すら出ない。見渡す限り、生き物の気配もない。』

『お母さん・・・』

そこで、女の意識は途切れた。

第3章 New Land 4

ドドドドドドドツツドオオ!

地響きを轟かせ、一頭の巨大な生き物が荒地を駆け抜けていた。これが獰猛な種類の生き物であることは一目瞭然で、興奮している口元からは止めどなく涎が滴り落ちていた。また血走ったその深紅の眼は、どこを見ているのは計り知れない。毛が短く、剥き出しの黒々とした皮膚が、この生き物の獰猛さを否応が無しに際立たせていた。

この世界の獣は、人を襲った事があるか否かの二種類に分けられる。ひと度人間を襲えば、その額に宝玉が浮かび上がり、明確な意思を持ち人を襲う様になるのだ。この獣の額にも、その宝玉が怪しげな赤い光が爛々と湛えていた。

名を「ギヴソン」といい、身の丈が人間の三倍はあるつかという生き物である（ギヴソンという名は、人間達が付けた通り名だ）。勿論、人に慣れる生き物ではない。赤い目をギョロギョロさせながら、何もない荒地をひたすら駆けていた。

しかしそのギヴソンに跨っているのは人間であり、手綱を悠々と操りながら目的地へ誘導している。随分ガタイが良い男で、背中には自分と同じ身丈程の剣を携えていた。ごついゴーグルでその表情は読み取る事が出来ない。

「フフーン」

乗り心地は決して良い方ではないだろう。しかし、そんな事は感じさせない位、終始安定した走りだ。

この走りは勿論、ギヴソンの意志ではない。この獣は、隙あらばと、この憎たらしい人間を振り落とそうとしていたし、屈辱的行為を虐げる人間を、今すぐにでも喰らってやると息巻いていた。しかし、どうやっても自分の願いは敵わない。認めたくないが、自分の

力を遙かに上回っている。

「くん？」

その人間に肩にちよこんと腰掛けていた小動物が、少し鳴いた。毛は長く、少し長めの耳と、大きな目、そしてフサフサの尻尾。この男には似つかわしくない可愛い生き物だ。全身で風を受けながら、正面右の遙か地平線を見ている。大きな目には、荒れた地しか映っていないかと思われた。しかし、更に大きく見開かれた目に映ったものは……、

「くんつくつくくく」

止まれと言わんばかりに、この小動物は男に向かって吠えた。しかし男は気付かない。小動物は、一生懸命頬を体で押した。頬に当たる柔らかい毛並みに、驚き男は問うた。

「えええー？ 何ですか？ タロチャアアン」

めったに見せない可愛らしい行為に、男のテンションは一気に上がる。

「……」

ガブツ！！

「ギャ！ 痛い痛いー！！」

思いつきり耳を齧られ、あまりの痛さに思わず手綱を引く。砂埃を立てながら、ギヴソンはしぶしぶ従い、走りを止めた。

男は涙目で耳を擦りながら、

「タロ！ 何すんの！ いきなり噛むなって言ってるんだろーが！

いや、噛むなってる」

野太いでかい声で、タロと呼ばれた小動物を怒鳴った。しかしタロは、男の様子など気にも留めていないかの様に（実際、全く気にしていない）、ある方向に視線を移した。耳を押えながら、タロの視線に合わせた。

「なんだあ？ あらあ？」

枯れた灰色の世界に、薄ぼんやりとした光が見えた。こんな荒野に、

光り輝く光？ 場所は少し離れているようだが、ギヴソンを走らせれば一〇分位で着きそうな距離だ。一刻も早く一つ目の海を越えたかったが、

「へへっ。面白そうじゃねーか！」

そう悪戯ぼく笑うと、思いっきりギヴソンの脇腹を蹴り上げた。その衝撃で狂ったように、ギヴソンは走り出す。

「ん〜どこだ？」

その光は、少しずつ発光を弱め、か細くなり靄のようにしか見えない。この広い荒地だ。光が消えたら、まずその場所を見つける事は不可能だ。しかし左肩の小動物には、まだその光がはつきり見えているようだった。一点だけを見つめ、微動だにしない。・・・この世界の生き物にしか分からない何か・・・か？ そう男は感じた。

「お前が頼りだぜ！」

強く手綱を握りしめ、男は叫んだ。夕口は小さく「くんっ」と小さく鳴いた。

ガゴン！

男はギヴソンの手綱を地中深く突き刺した。無駄な足掻きをするギヴソンを横目に、目の前の汚いぼろ雑巾に目を移す。

「たくよ〜」

男がその場所に到着した場所には、光の代わりにぼろ雑巾が打ち捨てられていた。正直こんなにしょぼい結果になるうとは、考えてもみなかった。この世界らしく、冒険の扉が開いているかと思ったのに。

「こらあなんだ？ 布？・・・服う？ ちえ、せっかく来たってんのに、無駄足とはね〜 あ？」

さてと・・・と、踵を返し立ち去ろうとした時、布の切れ間から、人間の掌と思しきものが見えた。

「あゝ人間か？ 何でこんな所に？」

ぼろ雑巾と見間違う程、肌も血色はなく枝の様だった。男は周りをグルリと見渡すが、仲間らしき人影はおるか、生き物の気配すらない。それもそうだろう。この荒地は果てしなく広く、旅人は敢えて遠回りをしてまで避ける場所だ。

この世界は広い・・・安住の地を持たずにさすらう人間達の中には、死に対する尊厳が薄い人間達も居る。

「あー死んで捨てられたか？・・・しょうがねえ。埋めてやるか」

一旦上げた視線を落とすと、タロがぼろ雑巾の頬らしき所をペロペロと舐めている。その可愛らしい仕草に、

「おい、腹こわすぞ。ったく、何お前、そんな可愛い行為も出来んの？ 知らなかつたんですけど？」

そう日頃の恨み節を聞かせながら、ひょいと持ち上げると、

「・・・え？」

微かだが、「ピクツ」と体が動いたのだ。意識はないが、微かに息使いを感じる。その様子を見届け、タロがびよんと肩に乗った。早く行けと言わんばかりに、グイグイと男の頬を押す・・・決してじやれている訳ではない。そして、それは男も良く分かっていた。

「え、何？ 連れて行くの？ 何で？」

タロが早く行けと言わんばかりに催促をするが、あからさまに受け入れがたい表情を浮かべ、

「いや、あの、ホントに嫌なんですけど」

そう訴えてみる。この世界の人間を拾ってどうするのだ。仮に回復したとして、その後の対応に困る。ジリジリと後ずさる男に、痺れをきらしたタロが、大きく口を開けてガブリと耳を噛んだ。

「・・・うぎゃー！！ 痛ってー・・・あのなあ、お前拾うのと訳違うんだって！」

男は深い溜息をついたが、タロの催促に諦めたのかそのボ口を肩に

乗せた。そして、怒りを剥き出しにするギヴソンに踵を返す。

「よっしゃっ！ 帰るか！」

グツと手綱を引き上げて、ギヴソンの背中に飛び乗った。

第3章 New Land - 5

「暖かい・・・」

「甘い・・・？」

女は深い意識の底から、浮き上がるようにスーと目を覚ました。

「ここ・・・どこ・・・」

全く思考回路が働かない。自分の意識で動かせる目だけを、左右上下に移してみる。ふとシンプルな天井の木目が目に映った。

「部屋の・・・中？ 何故、こんな所に・・・」

荒野と打って変わった状況に困惑しながらも、自分が柔らかい布団に包まれている事に気づく。羽毛の様な軽さと温かさに、全身で幸せを噛みしめる（ただの綿の布団だったが、女にとっては至上の幸福だった）。

「布団・・・何て・・・柔らかいの？」

体は鉛の様に重く、起き上がる事すら出来ないが、何とか状況だけは掴みたくて躍起になった。自分が何故ここに居るのか理解出来ないまま、荒野とは比べ物にならない位の安全な世界に、気持ちが焦って仕方がない。

「目え、覚めたか？」

突然、野太い声が左手方向から聞こえてきた。自分以外の存在に（こんな場所に居て何だか）、ビクリと心臓が跳ねる。それだけの衝撃で、グラスと目の前が歪んだ。何とか目だけ向けると、

「おらっ、食え。てか、舐めろ」

女の反応など微塵も期待していない物言いで、強引にスプーンが口に押しつけられてきた。

「誰？」

随分と大きな男だ。虚ろな目に飛び込んできたのは、シャツの上からでも分かる鍛えられた筋肉。ゴツゴツとした手、武骨に生えた髭・

・陽に焼けた肌。

「にんげん・・・」

女は虚ろに呟いた。

押しつけられたスプーンから、トロツとした甘い液体が口の中に流れ込む。何日も食物を入れていない胃に、ゆっくりと染み込む優しい甘さ。深い眠りに落ちそうな虚ろな意識が、突然クリアになった。

「お前エングだったんだな。だったらこれは、地球でいう蜂蜜みたいなもんだ。体力を回復する効果がある。食えるだけ、今は食つとけよ」

『蜂蜜か・・・そうだな。この味はそうだ。あれ？ はちみつつてなんだっけ？』

懐かしい様な、そんな物は知らない様な・・・頭と心がちぐはぐな感覚に陥る。そんな女の様子を、じっと見ていた男が問うた。

「お前え、名前は？」

『なまえ・・・なまえ・・・？』

初めは名前という単語すら認識出来ずに、女はキョトンと男を見た。何日も声を発していなかったからか、上手く言葉を発する事が出来ない。喉で声が詰まり、ゴホツとむせてしまう。

「ナマエ・・・なまえは・・・」

『思い出せない。記憶がシャッフルされてしまったかのように、上手く組み立てられずにいる。何故、ここにいるのだろう。この人は誰？ そもそも、私は何なのだ。思わず片手で額を押さえる。なまえすら思い出せない自分に、混乱してしまう。あれ？ なまえって何だっけ？』

こんなこと、今まで一度も体験した事がない・・・ない？ そうなの？ それすらも分からない』

大きな影が目の前を横切った。

バチン！

その時、女の体に衝撃が走った。初めて会った筈の男から、両頬を掌で弾かれたのだ。痛みはない。痛みはないが、ハツとした。男は掌を女の頬に乗せたまま、真剣な眼差しで女に問うた。その声は決して荒くはなく、ただただ真剣だった。

「おいっ！ しつかりしろ。名前だよ！ なーまーえー。お前は誰だ？

いいか！？ ここで忘れたら、一生思い出せなくなんぞ。思い出せ！ 俺らにとつては、あの世界から来たって事は絶対に忘れちゃなんねえ。自分のルーツだけは、忘れちゃいけないよ。いいか？ 荒野からゆつくり遡るんだ。

何で、一人であんな所に倒れていたんだ？ 何で、一人で荒野に居たんだ？」

そこまで言うと、ジツと女に視線を向けた。男の迫力に押される様に、必死に記憶を辿り、そして、一番近くにある記憶を掴み取った。「なぜ・・・荒野に？・・・そうだ、もう一歩も歩けなかった。そこで、記憶途切れて。そう、ひたすら歩いてきたから・・・何日も、枯れた土ばかりの広大な土地を、行けども歩いた。途中、砂嵐に巻き込まれたり、豪雨に降られたり・・・時には、水たまりの水すら飲んだ。その水たまりも直ぐに日上がってしまったけど・・・考えてみたら、あの雨が無かつたら私死んでいたかもしれない・・・」

混沌とする意識の中で、止めどない記憶が口から溢れてくる。そんな様子を、男は何も言わず見つめていた。

「そうだ・・・目が覚めたらあの荒野にいたんだ。だって私、空から投げ・・・出され・・・て」

そこまで辿った時、突如女の目から涙が溢れ出した。

『何故・・・忘れるなんて・・・』

大事な記憶を忘れかけていた事実を驚愕し、そして思い出させた事に安堵の気持ち溢れる。

『思い出した。何故自分が、この不可思議な世界にいるのか？
何故、荒野を彷徨っていたのか、歩き続ける理由は何だったか。何
故、全てが受け入れられない事ばかりなのか』

・・・言葉にならなかった。女の頬に涙が一通り流れ落ちた時、こ
つい男の掌が両頬をグーと押した。そして豪快に白い歯を見せて、
ニカツと笑った。

「んで、あんた名前は？」

この男は何なのだ。女は、涙と荒野を歩いた汚れでくしゃくしゃの
顔になりながら、押されてタコのようにになった顔で呟く。

「ハル・・・」

声が続かない。男は名前を聞くと、更に太陽みたいに笑った。コロ
コロと表情が変わる男だ。人間らしい・・・女はぼんやりと思った。

「そっか、ハル。俺はゲン、元だ。んで、こいつは、タロ」

いつの間にか元の肩に乗りながら、ハルの顔を覗き込む小動物を指
して言った。タロと呼ばれた小動物は、元の腕を伝いハルの肩まで
降りると、涙に濡れた頬をペロペロ舐めてくれた。

『慰めてくれて・・・いるのかな？』

動物の温かな体温を感じるこの瞬間が、奇跡の様だ。頬を包む元の
掌の大きく優しい掌が、荒み固まった心をゆつくりと溶かす。

その後、ハルの頬を押し続ける元の手の甲を、思いつきりタロが
噛んだ・・・その様子に、ハルは薄く笑う。

この世界で、まだ死なずに生きている。この数日間、願う事すら
罪だった感情と情景に、涙が溢れて止まらなかった。

第3章 New Land 6

ハルが元に助けられて、数日が経とうとしていた。外の日差しの暖かさ、柔らかい土の感触に人知れず感動を覚える。宿からは、エンダと呼ばれる人々の笑い声が響き、何とも平穏な日々が過ぎて行く。元が言うには、各地にこのような宿が沢山あり、基本エンダは宿を渡り歩きながら生活をするらしかった。

「エンダは一箇所に留まねえからな」

『元の言葉は、どのような意味を持つのだろう・・・』
そう言う元の表情は、読み取れない感情を含んでいる。ハルの体調が万全ではない為、元は込み入った話を極力避けていて、真意は分からない。

「精神的なものも、回復に影響が出ちまうからな」

ハルは体調が良くなると、宿の周りを散策するのが日課になっていた。落ちていた体力を何とか改善しようと考えての事だが、直ぐに疲れが出てしまい、寝込む事も多い。

宿の周辺は木々が切れる場所で、湖には暖かな日差しが降り注ぐ何とも穏やかな場所だ。宿の周りには、所々に小さい花が咲き、鳥がさえずり、時々魚が水面を跳ねる音が聞こえてくる。

「灰色の世界かと思っていた・・・」

自分が数日前まで置かれていた現状を思えば、この世界の何と美しい事か・・・。しかし、今のハルには、空も、空気もそして生き物ですら、何もかもが常識では図れない。

そう、まずこの空だ。強い日差しの太陽と、熱を感じさせない大きな星がいくつも空にあり（空の色が青い事は救いだった）、その大半は空の色に透けていた。しかし、背後の只ならぬ殺気に、ハルはグルリと振り返る。

「これだけは、慣れそうもないな・・・」

宿から少し離れた、見晴らしの良い場所に繋がれている獣・・・名をギブソンといった。四肢を鎖で繋がれてもなお、暴れているのだろう。獣の周りは、無残にも地表が露わになっていた。元に近寄るなど言われている獣は、先程からジツと自分を伺っている。大人しくしているように見えるが、滝のように流れている涎、奥底に怪しく赤く光る眼を見る限りでは、自分をどう思っているのか、手に取るように分かるのだった。

「でも、本当に異質なのは自分自身だろうか？」

そう失笑を含みながら、自身の体に目を移した。目に映った枯れ木の様な体に、思わず笑いすら出てしまう。荒野を彷徨い続けたせいなのか、この世界に来たばかりの「低スキル者」だからなのか、いつ折れてもおかしくない程の骨と皮だけの体。ましてや、身長が二〇cm程縮んだように感じる。身長だけではない。痩せているという次元を超えて、日本風の顔が少し彫が深くなっているし、髪の毛腰程の長さになり、太い黒髪が柔らかい少しシルバーが入った栗色を湛えているのだ。

『全くの別人だ。気持ち悪い・・・。これには、何の意味があるのだろう』

外見が変わるのは、正直本位ではない。こんな異世界に来たとしても、私は私なのだと思いたかった。

棒きれのような手を見ながら、ハルはグツと掌を握り締めたその時、

「ちえ、あいつら煩くて寝てらんねえや。エンダになったばかりで、浮かれてやがる。・・・おいつ、あんま無理すんな？ 万全じゃないと疲れるからな。ここは」

元が宿の入口からノソツと出て来て、声を掛けてきた。元が現れた途端、獣が発する殺気が少しばかり小さくなった様に思う。

『あんな獣を従えるなんて、一体どれ位強いのかな・・・』

フツと可笑しくなった。「強い」が世界の基準になるなど、考えた事もなかったからだ。そんな事を思っていると、元の足元からハルの肩を目指してタロが走り寄ってきた。スルルと体を上がってくと、ハルの頬にスリスリと体を摺り寄せてくる。

「タロ」

タロの陽だまりのような匂いに、ハルは目を細めながらも声を押し殺して咳く。

「寝てばかりもられない。早く体力をつけて・・・早く「始まりの地」に行かなければ」

元に言った訳ではない、自分自身に言ったのだ。この動かない体が、何とも歯がゆい。いつまで経っても回復しない体力に、辟易する。

『こんな場所で、のんびりしている場合じゃないのに・・・!』
目の前の頑固な女に、元は深い溜息を吐いた。何度も何度も、この女に言い聞かせてきた。この世界では、低スキルの人間にとつて、体力の低下がどれ程の危険を伴うものなのか。この体にまわりつく膜が、否応なしに体力を削げ、エンダを死に追いやるというのに。
「・・・ま、いいけどね。俺もここではやることねえし。もう少し付き合ってやらあ。・・・タロの野郎も、お前に慣れてやがるしな(怒)」

「もう訳ない・・・」

元の言葉に、ハルは本心から謝罪した。元には、本当に感謝している。行き倒れていた自分を助けてくれただけでなく、体力が回復するまで面倒まで見てくれている。利用しているようで、本当に申し訳ないのだから、今はもう元だけが頼りなのだ。

「早く体力を回復して・・・出て行くから」

元は頭を掻きながら、んな事言っつてんじゃねえよ。そう呟いた。居心地が悪い状況に、目を伏せると足で地面をガシガシと押し固める。チラリと見た目線の先には、じっと自分を見続けているタロの視線が刺す様に見えた。

「ちっ、恨めしそうに見てんじゃねー。何だよ、俺正しいんだぜ

？何かあったら困んの自分なのにさ・・・たく、俺は間違った事、
言っでなくねえ？？」
元は、寂しそうに口を尖らせた。

第3章 New Land - 7

元が深い溜息を吐いた。

「だから・・・無理すんなって・・・」

その日の午後、二人と一匹は森の中に居た。忠告を聞き入れないハルの付き添いで、森の中を散策する羽目になっていた。森は見た目以上に深く、奥に行けば行く程深い緑に覆われていく。

「付き合わせて・・・」

ハルの言葉に、怒ったように元は答える。

「悪いって思ってたんなら、大人しくしてくれよ。・・・てかさあ、迷惑や面倒だから言ってるじゃねえから。今さ、無理して長引いたらどうすんの？」

前に言っただけど、俺達エンダの使命は、獣の脅威から民を救う事だ。俺達はそれだけの為に、この世界に存在していると言っても過言じゃねえ。だからさ、獣と戦わずして、死ぬなんてエンダの恥だぜ。っていうか、まだあんたはエンダじゃないけどさ」

右も左も分からないこの世界で、エンダと言われても正直ピンと来ない。増してや、ここに連れて来られた真の目的が、獣を倒しこの世界の民を救う事だったとは。

『倒す・・・って、色んな意味で無理だと思うけど・・・』

もとの世界では、生きる為に得る食料も、見知らぬ誰かが殺生したものだ。甘いと言われれば、甘いのだろう。

『この手で、命を摘むなんて・・・出来るのか？』

ハルは、自分の宿命を受け入れきれない自分の甘さを恥じた。

『止まったら駄目だ。今は進むしかない・・・』

そう何度も自分に言い聞かせて、無理やり前向きになろうと足掻いている。

そんなハルの苦悩を横目で見ながら、元は言葉を更に繋げた。

「俺の話で申し訳ねーけど、俺がここに来たばつかの時に、自分のレベル以上の獣を狙ったんだよ。そりゃ、倒せればかなりのスキルアップが望める。この世界は、獣を倒せば倒す程、自力が上がるからな。」

皆、躍起さ（いやスキルアップの為に獣を倒している訳じゃないが・
・）誰も自分達が死ぬなんて思っちゃいねえから、無理したんだな。命からがら逃げおおせたが、俺以外は回復出来なくて消えちまった。死ななきゃ大丈夫じゃ、ねえ。体力の限界が来たら、突然消えんだ。」

もとの世界に戻ったなんて言う奴らもいるが、そんな都合のいい話なんて信じられねえ。この世界に連れて来られる前に、散々言われたしな。」

こんな世界で、何も残せずに消滅するなんて俺は嫌だね。」

獣を狩るのが俺らの使命だとしても、もっと目的持って生きたいじゃん。俺は五つの海を越えた場所にあると言われていて、獣が生まれる場所を潰したいんだ。それが出来れば、ここに来た意味もあるってもんだろ？」

ここまで一気に話した元は、少し間を置いてこう言った。

「死んだら元も子もねえ。やりたい事も出来ずに消えてもいいのかよ」

「・・・」

元の言いたい事は良く分かる。少しずつ回復している体力が、少しずつ剥ぎ取られていく。」

『この外気が一番のネックだ・・・』

そうハルは思う。この世界の気は、どこまでも澄んでいて、体の細胞一つ一つに酸素が行き渡る・・・そんな感覚を受ける。心地いい、心地いいはずなのに・・・皮膚が、内臓が、髪の毛一本までもこの世界を拒絶している。体を守る皮膚が一枚剥がされた様な、この居心地の悪さが、お前は这个世界の住人ではない事を忘れるな、と言われているようなものだ。」

この世界に来て、常に胃もたれと吐き気に苦しめられていた。体調が良い日でも、少し無理をすると、症状が重くなり立つ事すら困難になる。

ハルは、元の言葉を噛みしめた。

『体力の回復が遅れたら、私はこの世界からも消えてしまう・・・もとの世界に帰れる？』

骸骨を思い出し、自虐的に少し笑った。そうして、

『死ねない。私は、まだ死ねない』

そう拳を握り締める。

『でもこのままじゃ・・・』

そんなハルを見ながら、元は頭をボリボリと掻き、首をゴキゴキと鳴らした。元は今後の事を考えあぐねていたのだ。

『こいつは・・・もたないかもしれないなあ。あまりにも体力が無さ過ぎる。もう少しスキルアップすれば、体力の回復が勝るんだがなあ。』

でもなあ、獣と戦っても絶対勝てねえし』

元は考えに集中するあまり、考えている事が口から零れ落ちていた。脳と口が直結しているかのように、大きな独り言をブツブツと呟いている。

「んー・・・始まりの地に行けば、今よりずっと楽になるだろうが・・・ここからは随分距離があるし、如何せん交通手段があれじゃあ、着くまでにおつ死んじゃうし。それにあいつ、すげー獣くせーから、もう臭くてそれだけで死んじゃうっていうか。

かと言って、行かないや何も始まらねえし・・・。あーもう！何で、洗礼を受けてねえ奴が、あんな場所で行き倒れていたんだ？」
ハルは蓄積する疲労感を感じつつ、元の言葉に耳を傾けていた。

『いい奴だな』

本心からそう思う。タロと言えば、ハルの肩にちょこんと乗りながら、あまりにも大きな元の独り言に、少し呆れ気味に元を見ている。

「ヴー……！ もう少し体力が残っていたら、話は違うんだが・
・・」

元は頭をガシガシと掻いた。どうやってしても、ハルが始まりの地に足を踏み入れる事が出来る気がしないのだ。

「でも、自分の世界を捨ててこの世界に来たってんのに……。
エンダにも成れずに死ぬなんて、あんまりだよなあ。何とかしてやりてえんだけど」

どうにも出来ない状況に、元は思わず天を仰いだ。ハルは元の独り言を、ジツと噛みしめていた。

第3章 New Land - 8

・・・疲れた。ハルは、木の根元にペタンと座り込んで、一步も動けずにいた。森の半分まで行き、宿に引き返している途中だった。肩で息をするハルを見かねて、元が近くの泉まで湧水を汲みに行ったのだ。

「何やっているの？ 私」

ギリリツと拳を握り締め、力無く地面を叩き付けた。これでは本末転倒ではないか……。元の忠告も聞かずに自分勝手に動き回って、動けなくなったら助けてもらって。親切に甘えて……。最悪だ……。自己嫌悪で死にそうになる。分かっている、分かっているのに、どうすればいいのかわからない。ただ、体力を付けたいだけなのに。

ハルは溜息交じりに、タロの姿を追って木の上を見た。木の枝では、ハルの傍に残ったタロが、ちょこちょこ動き回っている。タロの無邪気な様子を見ると、心が少し安らぐような気持ちになりフツと微笑んだ。しかしその瞬間、

「あつ！」

タロの直ぐ背後に大きな影が写った。ゆっくりと大木に巻きつきながら、タロの背後から迫ってきている。この位置からは全貌が掴めない程、大きい……。ハルの三倍以上あるつかという大蛇の姿だった

「タロ！ 危ない！ 逃げて！」

グワツ！

ハルの声と同時に、大蛇はタロを目掛けて襲ってきた。ハルの声でタロは間一髪、別の枝に飛び移り難を逃れた。つい先程まで飛び跳ねていた場所は、大蛇の攻撃で、無残にも大きくえぐられている。

「タロツ！」

しかし飛び移った先の枝は、タロの体重を支えきれしていない。そのままバランスを崩し、枝にしがみ付く体勢に、

「くうー・・・ん」

タロが、か細く鳴いた。その姿に大蛇は体を大きく揺らし、タイミングを図りながら飛びかからんばかりだ。

「タロから離れて！」

ハルは咄嗟に、歩行用の補助として渡されていたメイスを、大蛇目掛けて投げ付けた。こんな杖がタロの助けになるとは思わなかったが、

『何とか気を逸らせないと！』

その一心であった。メイスが手を離れた瞬間、

「えっ？」

ハルの僅かな体力がゴソツともぎ取られ、強烈な脱力感に襲われる。

「た・タロ・・・」

闇雲に投げられたメイスは、一気に大蛇に向かって加速した。

ドスッ！

メイスがおびただしい何かを纏って、明確な意志を持つかの様に大蛇の額に突き刺さった。

ドオオン！！

大蛇は体を傾倒させ、地響きと共に落下した。落下の衝撃で、落ち葉が巻き上がり宙に舞う。

同時に、ハルもその場に倒れこんだ。

「馬鹿野郎！！」

次にハルが目覚めた時には、何故か宿のベッドの中だった。朦朧とする意識の中で、元と目が合った瞬間、間髪入れずに怒鳴られたのだ。

もう、どこにも力が入らず、瞼すら開けていられない。

「今はゆっくり休むんだ。動くなよ、辛うじて残っている体力まで無くなっちまう」

元の声が遠い所から聞こえてくる。メイスを投げ付けた時からの記憶が途切れ、何故無事だったのか不思議でならない。ただただ重力

が何倍も負荷され、深い闇に体が沈んでいく様だ。

ハルが再度深い眠りに落ちかけた時、ポタポタと手の甲に水滴が落ちた。何とか視線を向けると、タロがポロポロと涙を落している。

「タ……」

無事で良かった……思わず動かない手を上げようとした時、

「動くんじゃないってんだろ！死にてえのか！！」

元の怒涛が響く。

「寝ろっ！今は何も考えずに寝るんだ！」

その声に導かれる様に、ハルはまた眠りという深い底に落ちて行った。

第3章 New Land - 9

「いよつしやー、この峠を越えたら始まりの地だ！！ 一気に越えつぞー！！」

ドドドオドドオドドオオオツ

狂ったように駆けるキヴソンを操りながら、元は野太い声で叫んだ。ハルを左肩に乗せ、右手でキヴソンを扱う姿は、正に戦士そのもので一種の風格すら感じさせる。

「大丈夫か？ しんどかったら、休むぞ！？ 辛かったら後ろに移れよな」

ギヴソンを走らせ半日が経過しているが、元とギヴソンに疲労の色は全く見えない。

「・・・かまわん。このまま走り続けてくれ。元が休みたかったら休めばいい・・・」

力の限り駆け抜ける、キヴソンの乗り心地は決して良くない。しかし弱音など吐いていられない。ようやく始まりの地に立てるのだから。元からエンダが始まりの地を踏まなければならない理由を聞いてから、居ても立ってもいらなくなかった。

『あの緑の生き物が、私を連れて行こうとしていた場所・・・か』
「ガハハ！ んじゃーこのまま一気に行くぜ！ 天気が良い内に、距離を稼ぎたいからなあ！」

元は、そう叫びながら、ガツツとキヴソンの脇腹を勢いよく蹴り上げた。キヴソンは狂ったように雄叫びを上げ、更に走りを加速させる。

元は手綱を握り締め、視線を遠くに飛ばした。進むべき方向を確認し、後は手綱を操るだけだ。峠は深く険しいが、ギヴソンの足であれば今日中に越える事が出来るだろう。方向が固まると、元はチラリと肩の上のハルを見た。ハルは長い髪を風になびかせながら、遙か先をジツと見続けている。表情からは何を考えているのか、汲

み取る事は出来ない。最近は前にも増して、感情を表に出さなくなっていた。

『しかし・・・何が起きたかと思っただぜ』

あの時、ハルの叫び声で駆け付けてみれば、ハルが大蛇を前にして倒れていた。

「くそ!!! 遅かったか!」

慌てて剣を抜いて駆け寄れば、大蛇は既に絶命していて、その体は尻尾から消え始めていた。長い胴体に隠れて見えなかったが、額にメイスが突き刺さっている。どう見ても致命傷は、この額のメイスしか考えられない。元は訳が分からないまま、すぐさまハルの首元に手を添えて脈を確かめた。

「極僅かだが・・・脈はある」

元は、そのままゆっくりとハルを抱え上げた。

くうくう・・・

「タ、タロ!!! (この俺がタロの安否を忘れるなんて)」

枝にしがみ付いたままのタロの姿と、えぐられた大木を見て、元は眉間に皺を寄せた。

恐らくタロを助ける為に、大蛇にメイスを投げつけたのだろう。しかしあんな細い棒だ。ただ闇雲に投げただけでは、当然に仕留める事は出来ない。元はメイスに手を掛け、グイツと引き抜いた。元は戦士だ。当然に魔力はなく感じる事は不可能だが、このメイスは名手の作で魔力を増大させる効力があるらしい。

「こいつの消耗を考えると、魔力を使ってメイスを武器にした・・・、と考えるのが妥当か?」

しかし、と元は思う。

『仮に魔力が使えたとして、あの蛇は低スキル者が倒せるレベルじゃねえ。しかもこいつはエンダじゃねえんだぞ? 何なんだ、こいつは。』

・・・ま、獣を倒した事で、旅が出来る程度までスキルも上がった

しな。結果オーライか』

思考が行き止まり、ジロリとハルを見た。正確には、ハルの肩に乗っているタロを見た。あの日以来、片時もハルの傍を離れようとなし。何とも安心しきった顔で、ハルと同じ先を見ている。

時々、嬉しそうに擦り寄る姿を見ると、無性に胸の奥がムズムズするのだ。

『……もしもし。最初に獣から襲われていたお前を助けたの、俺なんですけど？』

かつてない喪失感に胸がざわつく。

『もしかして、もしかして……このままハルについて行っちゃうんじゃ？』

ハルはエンダになっただとしても、俺と一緒に旅が出来るレベルじゃねえ。始まりの地まで送ったら、そこで別れる……その時タロはどうすんの？』

今までタロと過ごしてきた思い出が、走馬灯のように浮かんでは消えていく。(いつも噛まれたり、引っ搔かれたりして、ろくな思い出がないが)タロとの別れを想像するだけで、元の目頭がジンと熱くなった。

『タロ……』

元は思わず溢れる涙を、誰にも気づかれないうちにそっと拭った。

第3章 New Land - 10

ハルは深い溜息を吐いた。

「いやいや、溜息吐いたって仕方無いからさ。　たく、疲れたんならそう言えっつーの！」

元達は、始まりの地に程近い町の宿に居た。またもやハルはベッドの中だったし、元は相変わらずブツブツ文句を言っている。

予定では、とっくに始まりの地に到着している筈だった・・・思うと、ハルの心は落ち着かず、気持ちだけが逸って仕方がない。「肝が冷えたぜ」

道中始まり地を目前にして、ハルが元の肩から後ろに倒れ込んだのだ。間一髪で元が体を支えたが、ギヴソンの体から振り落とされる一歩手前で、最後の渓谷に差し掛かった場所での出来事だった。

宿のベッドに寝かされたハルは、すぐ尽きる体力にうんざりしている様子で、真上の天井を見据えながら元に問う。

「あとどれ位で、始まりの地に着く？」

ハルの問いに「今は休む時だからな」そう言いながら、元は乱雑にブーツを脱ぎ捨てた。

「あー・・・。この町には以前立ち寄った事があるから・・・あの当方で四日位か。めっちゃ弱かったからなあ、あんな距離に四日って・・・ハハハ。」

今回はギヴソンもいるし、本当に目前だよ。だからあんま焦るなって」

当時の事を思い出し「くはは」と笑った。自分よりも小さい獣ですら、命からがら逃げ帰った事もある。それが今やギヴソンのクラスを従えるまでになったのだ。感慨深いものを感じる。

「あんなに弱くて、よく生き延びられたもんだよなあ。って言うか、ここまで強くなれるもんなのかねえ。ゲームみたいに、戦えば

戦うほど強くなるからさ。こう見えても俺、ちったー名の知れた戦士なんだぜ？ここら辺に来るとき、昔を思い出すよ。あんなギリギリのラインでよく死なずにきたもんだ」

元は昔を懐かしみ、目を細めた。宿が用意したお茶に口を付け、フウと溜息を吐く。宿の窓から、太陽が沈むオレンジ色の光が優しく差し込んで眩しい。

「当時の俺は、弱いながらに強くなりたーい一心でさ・・・、」
「・・・」

「あの・・・聞いている？」

全く反応が無いハルに目を向けると、寝息を立てて寝入っていた。

最近無理せず寝てくれるのは、確かに有り難かったが、

「あつそ・・・えっと、風呂入ろうっと」

軽い溜息を吐きながら、そっと眩いた。

翌日は眩い位の快晴で、気持ちの良い朝だった。

「この辺りは、気候も良くて低レベル者にとっては、生きやすい場所さ」

宿の窓を開きながら、太陽の光に目を細め、元がハルに言う。

「そうか、生きやすい場所か・・・」

そう元の言葉を復唱する。少し動けるようになったハルは、いつもの如く町に足を向けた。この世界が異世界で、民は獣に怯え暮らす日々を強いられるとはいえ、人の営みは自分達の世界と全く変わらない。

「あのな」

少し諦めが入りながらも、元は根気よくハルを戒める。

「昨日ゆっくり休みだから調子が良いんだ。そもそも町に出たくなかったら、宿に居ればよいだろう」

空気のように言い放つハルに、

「うわ、何その言い方。お前がやたらめったら倒れっから心配してやってんのに。大体、何が調子が良いって？ 嘘つくくなっつもの！

！ もう、知らんぞ！ ホントに知らんぞ！ 倒れても、面倒見きれんからな！」

「今日は調子が良い」

「って言いながら、お前すくぐ倒れんじゃん」

そんな取り留めない会話を繰り返しながら（主にしゃべっているのは元だが）、二人と一匹は町の中央へと歩みを進めた。

ギヴソンは、町からずっと離れた場所に嚴重に繋がれている。この町には、ギヴソンレベルを扱える施設が無く、苦肉の策として、人が踏み入らない沼地に置いてきたのだ。戻った時のギヴソンの不機嫌さを思うと、元の気はドツと重くなるのだ。

『機嫌が悪いーと、あいつモロ走りに出るからなあ。食料を買って行って機嫌取らなきゃな』

元はゲンナリしながら、沼で暴れているだろうギヴソンを思い返す。「きつと全身泥だらけだ。体を洗う水も持っていこう・・・」等と、ブツブツ呟いている。

中央では、賑やかな市場が催されており、この世界の人々が大勢行き来していた。至る所に店が出ていて、荒野と一軒宿が世界の全てだったハルは、町の活気に内心驚く。中央から少し離れた場所にベンチを見つけ、元はハルを座らせた。

「飲み物買ってくるから」

そう言つて、元は市場の中に消えて行った。

「面倒見が良い男だ・・・」

人ごみに消えていく元を見ながら、タロに向かってそう呟いた。タロはいかにも興味がなさそうに、クハーと大きな欠伸を一つして、ハルの手の中で丸くなっている。自分を見つけてくれたタロや、始まりの地に送ってくれる元を思うと、この世界で得た奇跡に、感謝してもしきれない。

「ありがたいな・・・」

元と離れて随分の時間が経つが、一向に帰ってくる気配がない。探しに行くのも、この人ごみだ。行き違いになると、後々（元が）面倒くさいなので、動かず待つことにした。

ハルが目を閉じると、町の雑踏が音楽のように聞こえてくる。異国の町は、こんな感じなのだろうか。人々の声すら、流れる川のように留まる事を知らず、ハルを通り過ぎて行く。

心地よい雑踏の音の中、ウトウトとハルが仕掛けた時・・・市場から、どよめきに似た歓声が上がった。集まった人々の輪の中心に目を向けると、見覚えがある大きな男が抜け出した。人々の羨望の眼差しを受けながら、元がこちらに歩いてくる。元は、ドカツとハルの隣に腰掛けると、綺麗な瓶に入った飲み物を渡した。

「いやゝすまん。待たせたな。実は、婆さんが物盗りにあつて困っていたから、犯人探しをする羽目になつちまつて。

掴まえたは良いけど、それが以前、ここで捕まえた奴でさ。こいつも懲りないなと思つていたら、何と物盗りにあつていた婆さんも同じ人でさ。全く！狙われているよ、ありやゝ」

そう一気に話し、グビリとジュースを飲み干した。元から手渡されたジュースを口に運ぶと、果汁の程良い酸味と甘みに体が癒されていく。

「やつぱ平和な町だよなあ・・・。一つ目の海を越えたらこんなもんじゃねえから・・・何だか、平和すぎて気が緩むよ。ほら、見てよこれ、婆さんから貰つちまつた。いらねえつて言つただけどさ、今更ながらに、腰当て。ハハハ」

笑う元の言葉を、ハルは異国の言葉のように聞いていた。

第4章 From now on - 1

始まりの地と称される町は、俄かに騒然としていた。異質な物を見る様な人々の目線は、明らかに元達一向に向けられている。

「我々の何がそんなに珍しいんだ？」

注目されている事にすら気付いて居なかった元は、屋台の肉の塊に目を向けながら言った。

「ん〜？ 注目？？・・・あ〜・・・こいつが珍しいんだろう？ こんな獣、ここら辺にはいないからなあ」

自分の倍以上もあるギヴソンの手綱を、難なく引きながら飄々と答える。いつもは町に持ち込む事などしないのだが、周辺に待機させる場所がない為の苦肉の策だった。

確かに元の言う通りで、この町には似つかわしくない獣だ。元に自由を奪われ大人しくしているが、獷猛な性質は隠しきれぬ筈も無く、全面に出る殺気に町の人々が警戒するのも無理もない。

「せめてその滴り落ちる涎だけでも、押さえる事が出来れば・・・」

『
そうは思いながらも、異質なものはギヴソンだけではない、とも思う。痩せて枝の様になったハルも、エンダとして相当の使い手であろう元も、平和なこの町には不釣り合いだった。町の雑踏に気を取られていたハルは、フウと息を吐いた。』

『この町が、始まりの地。・・・やっと、やっとここまで来た。』

『ここから、全てが始まる・・・』

これから先の旅を思うと浮かれても居られないのだが、何とも穏やかで心が軽くなる町にハルは目を細めた。何処からともなく聞こえる笛の音、鈴の音、軽やかな音楽。本当に獣に苦しめられている世界なのだろうか？ ハルはこの世界の民に目を向けた。

『同じ姿形ではあるが・・・違和感だな。どことなく生気を感じない』

生気が薄い。楽しく走り回る子供達ですら、気持ちの高揚を感じ取る事が出来ない。エンダと言われる人々と一線を画していた。

『当たり前か・・・異世界の民なのだ。しかし人型だとすると、あの生き物達は何だったのだ？ この場所で骸骨が待ち構えて居るかとも思ったが、今の処そんな気配は無い。・・・死んだと思っっているのだろうか？』

殺されかけた事を思い出し、人知れず冷笑した。

「おい、着いたぞ！」

元の声に、ハルはハツとして顔を上げた。

「ここが「始まりの地」だ」

元達の周りに、一風の乾いた風が吹き抜け、ハルの髪を揺らす。眼前に現れたのは、白く巨大な建造物だった。どのように立てたのか理解出来ない程、建物の上の方は霞みがかっている。

「ここが？ 始まりの地はこの町の事を差している訳ではないのか」

キョトンとするハルの言葉に、元は深い溜息を吐きながら言葉を繋いだ。

「おめえ、ホント何も聞いてないのな。始まりの地ってんのは、この宮殿そのものを差してんだ。町を訪れただけでは、エンダに成れねえ事は説明しているよな。」

ここで洗礼を受けて、初めてエンダになれる。エンダにとっては、この宮殿から全てが始まった。ここが、「始まりの地」と呼ばれる由縁だよ」

のどかで小さなこの町に全く不似合いな上、建物自体が尊厳且つ厳格の象徴だと言わんばかりだ。訪れる者達を圧倒的に威圧していて、前に立つのも息苦しくなる。

ここが始まりの地だと言われるように、建物の周りには、ハルと同じ目的である人々が一際多く集まっていた。これから起こる事に集中しなければならぬのだが、様々な思いが脳裏を過り気が散

漫になる。

『自分達の世界を捨てた事に、後悔している様子はない。何故あんなに意気揚々と・・・』

この思いは、非難や否定ではない。そう思えた方が、どんなに楽しろうか・・・心から思うのだ。正直聞きたい位だ。何故その人生を選ぶ事が出来たのかと。

『元が何故エンダと成ることを選んだのか、いつか聞く日が来るのだろうか・・・』

そんなエンダ達の間をすり抜け、先に進むハルに元が声を掛ける。

「おい、俺達はここで待っているから。戻ってきたらここに寄りな。話したい事がある。あ、それと「協会」の奴らを怒らせんなよ。面倒な奴らだから」

そう言つて元は、入口の端にドカツと座り込んだ。手綱を引く強さで、ギヴソンの体が土に沈む。そしてハルの後に着いて行くタロをガシツと掴んで、諭す様に言った。

「俺達は留守番だ。本人しか行けねえんだ」

「キュー・・・ん」

不服そうに鳴くタロに目配せをして、ハルは入口に踵を返す。眼前に立ち塞がる宮殿に足を踏み込む瞬間、

ドン！

「あ、すみません！」

建物の入り口で小さな男の子が飛び出して来た。少年は、ペコリと頭を下げると、意気揚々と町に飛び出して行く。そうかと思えば、入口で美しい女性が頭をもたげて座り込んでいた。

「・・・」

そんな人々を横目に、ハルは宮殿に足を踏み入れた。

第4章 Form now on 2

「こんにちは。始まりの地にようこそ」

ハルが扉を開いた時、全身を白装束で包んだ女性から声を掛けられた。抑揚のない声がやけに耳に残る。

「ここは始まりの地。エンダが世界から洗礼を受ける場所。

……どうぞこちらに」

女性に導かれるまま、迷路のように広い宮殿の中を着いて行く。ハルは無意識にゴクリと息を飲んだ。この場所の事、そしてこれから起きる事を、あらかじめ元から聞いていたからだ。この場所で洗礼を受けると、自分はエンダとなる。

ハルの訪問を事前から分かっていたかのように、説明も無く大広間に案内され、段取り良く進んでいく。太陽の光が燦々と降り注ぐ広間には、全身を白装束で纏った人物が六人、円をなぞる様に立っていた。着衣からそれ相当の人物だと見て取れが、どの人物も深くフード被りその表情を見る事は叶わない。

『協会の民か……』

「どうぞ、円の中にお立ち下さい」

女性の感情のない声が続く。

ハルは言われるままに、広間の中心に向かって歩みを進めた。目を凝らすと、その円は中心から外に向かって不思議な文字が彫られている。

ハルが円の中心に、立ち位置を決めた時、頭上から光り輝く気配を感じた。ふと目を上げると、女神と天使が描かれた壁画が、少しずつその形を変えていき、溢れんばかりの星が零れる夜空に変貌を遂げた。

『綺麗だな……』

こんな緊迫した状態なのに、暫し心を奪われる程、幻想的な光景だ。

星が降り落ちそうな光景に、この世界だったらその星ですら掴む事が出来るのではないか・・・そんな事を考えていた。

カツツ

その時、正面に位置付けている人物が、床に杖を突き立てた。

「この場所をお分かりか？」

「・・・」

反応を示さないハルに、その人物は重々しい低い声で答えた。

「・・・ふう、良からう。」

もう数百年以上前になるが、この世界は凶悪な獣が溢れだし、人々の生活を脅かすようになった。どこから派生したのかすら分からない上、更なる事実は先人達を驚愕させた。その獣は、我々の攻撃が一切通じない生物だったのだ。我々にとて、戦う事に秀でた歴史がある、がしかし、どれだけの兵力を持っていたとしても、その獣には傷一つ付けることが出来なかった。

我々では成すすべも無く、いよいよ人類滅亡かと思われた時、多くの星が降る夜にその奇跡は起こった。

突如現れた異世界の民は、自らをエンダと名乗ったと言う。エンダは、獣を一太刀で倒し、既に風化していた魔法を使った。先人達は、正に困窮した世界に、救世主が現れたと歓喜した。

しかし、この世界でエンダが生き続ける事は容易い事ではない。お主にも気づいておるだろうが、水も太陽の光も、大気ですらエンダの生命を脅かす。

傷ついたエンダを救うべく、我々の祖先が回復の祈りを捧げた場所が、ここ「始まりの地」だ。先人達の祈りは天に届き、エンダがこの世界で生きていく奇跡を授かった。

天の奇跡、それはエンダとエンダの属していた世界の柵を断ち切り、この世界の危機を救うべくした能力を授かる事。能力は人それぞれ、それが洗礼だ。

天の奇跡によって、貴方はこの世界を救うエンダとなるのだ」

ハルは白装束の人物の話を、静かに聞き入っていた。

『天の奇跡ね・・・胡散くさい話した。しかし、昔話とはそんなものか。』

・・・エンダ・・・この世界を救う異世界の民か』

白装束に身を包んだ人物は、更に語尾を強めて、

「さあ、確認させて頂こう。お主はこの世界に蔓延る邪悪な根源を打ち破る為に、我々の民を救うべくこの地に降り立った。相違無いか？」

声を聞く限りでは、かなりの高齢のようだ。十分すぎる程の存在感に、この建物と同じ様な尊厳と威厳を感じる。

『断る人間などいないのだろうな・・・』

ハルは静かに息を吸い、

「そのつもりだ」

力強く、そう答えた。

ハルの返事を聞く否や、白装束を纏った六人は、手を胸で組み、呪文を詠唱し始めた。その呪文に反応するかのように、床の円が光り輝き、何重もの円が浮かび上がる。そして、そのまま光の系は呪文となり、ハルを包み込んでいく。ハルは折り重なる細い光の系を、微動だにせず見入っていた。

『本当に、不思議な世界だな・・・』

一片の隙間もなく、光の系がハルを包みこんだ時、厳格な声が言葉を紡ぐ。

「古き時代より、この地はエンダを数多く導いてきた。それは、神のみぞ知る、エンダの在り方を指し示す。

武器を持って戦うか、己の体を鍛錬して武器とするか、精霊との契約にて魔族になりて敵を滅ぼすか、聖者の加護を身に纏い救いの手を差し伸べるか・・・幾多ものエンダの在り方。その在り方を今指し示さん。

それ以上でもそれ以下でもない。それがエンダ」

取り巻く呪文がひととき大きくなった。あまりに何重にも重なり合うものだから、歌の様に聞こえてくる。

ハルはグツと拳に力を込めた。ハルにはここで起きる全ての事実を受け入れる覚悟がある。どのタイプのエンダになるうとも、これから先自分の思いを見失わない様に、今日の事を心に刻み込む。

光に包まれながら、白装束の言葉を思い返していた。

「エンダとエンダの属する世界の柵を断ち切り・・・か」
今やハルは、人の形を成した光の人型と化していた。

「やつと息が出来た」

この光に包まれた時から、今までの息苦しさから解放され、膨大な空気が体内に染み渡っていく。身体の細胞一つ一つに、自分を守る薄い膜が出来たかのようなようだ。

どれくらいの間が経ったのだろう、白装束の人々の呪文の音が次第に小さくなっていく。完全に聞こえなくなったその瞬間、身を覆う光の糸は消えてなくなり、それだけではない。協会の人々も、零れそうな星を湛えた天井も、床に描かれていた円も全てが消え失せていた。

あるのはガランとした大広間だけとなり、今や誰一人としての気配も感じられない。

「・・・」

ハルは自身の変化に目を移した。今まで着用していた服は、ズボンの丈が異様に長い（合うサイズが無かったのか元の趣味が悪いのかは不明）男の子が着る様な服だったのに、今は白い布のシンプルなワンピースになっていたし、皮の靴は皮のブーツに変化していた。

「何かには成ったらしいな」

そう呟いた時、ハルの体の奥底から、ある感情が噴き出した。

「・・・え？」

無意識に瞳から涙が溢れ出る。感動・不安・希望・恐怖・喜び・悲しみ・愛しみ・怒り・・・数多もの感情に押し潰されそうだ。この感情をどう説明していいのかわからない。得も言われぬ感情が、涙となって溢れだすのだ。

そして全ての涙が流れ落ちた時、手に受けた涙を見ながら、ハルは目を細めた。

「そうか・・・これは、あの世界との決別の涙だ」

ハルは、この事実を受け入れた。自分でも驚くほど、心は静かで穏やかだった。涙は悲しくて流れた訳ではない。感情とは別の場所から、涙が零れ落ちたのだ。

一度天井を見上げ目を閉じ、濡れた頬を袖でグイッと拭くと、
「行くぞ」

誰に言う訳でもなく呟いた後、出口に向かって歩き始めた。

第4章 From now on - 3

扉を開けると、人々の雑踏が波の様に飛び込んできた。広間に案内された時には、誰一人として会わなかった通路に今は沢山の人々が行き来している。

『・・・』

ハルが怪訝そうに周りを見渡していると、庭から感嘆に似た溜息が零れた。中央に配置された噴水に、人だかりが出来ている。溜息の中心に位置する男性は、金髪の長い髪を無造作に垂らし、派手な衣装を身に纏っている。何とも人目を引くほど美しい。

『吟遊詩人か・・・』

男が、弦をポロンと奏でた。

「五つの海、貴方を慕って越える海

荒れ狂う海の支配者よ

天駆ける神の化身よ

その歌声で僕の願いを叶えておくれ

僕の願いは、貴方と共に在る筈なのに

始めに交わされた約束は、貴方を苦しめるだけとなった

千の夜を越えて、繰り返される悲劇と喜劇

貴方の悲しみに終止符を

僕の苦悩に終止符を

世界の望みを探し出し、その手で叶えてくれないか

元
に
．．．さあ、五つの海を越えて、翡翠の涙を越えて、どうぞ僕の

毎夜貴方を慕いて夢を見る

僕の懺悔が海を越えて

貴方に届く夢を見る

どうか僕の願いを叶えておくれ．．．そして許して

貴方を慕って千の夜．．．」

ハルは、歩みを止めて吟遊詩人の歌に暫し聴き入っていた。

「ふむ．．．そろそろか」

外で待つ元は、胡坐に頼杖をつきながら、ハルが出てくるのを待っていた。ハルが建物に入って一時間が過ぎた頃だ。自分の時の事を思えば、じきに出てくるだろう。元は、落ち着かない個性的な同行者に目を向けた。

額に宝玉を持つ獣ギヴソンは、周囲の気配をくまなく窺っている。隙あらば、いつでも襲いかかるチャンスを狙っているのだろう（ま、そんなミスしねえけど）。タロはタロで、元の肩に乗ったり歩いて正面入り口まで行ったりと、ソワソワしている（この様子を見て、元はガツクリと肩を落とした）。そんな二匹の動向を目で追いながら、

『そうか……。俺、ここから旅立って、もう一年以上経ったのか』

そう懐かしい様な、それでいてこんな所で何やってんだという罪悪感が襲う。こんなのにんびりしている間にも、沢山の命が危険に晒されているというのに……。その時、ギヴソンがピクリと体を硬直させた。

「ん？」

元がギヴソンの意識の先に目を向けると、白装束を着た人物がこちらに向かって歩いてくる。

「げっ」

元の気持ちに反応するように、ググルルルルッ！ ギヴソンは低く唸りながら、地面に鋭い爪を喰い込ませた。

「暴れんな……」

元はボソリと呟くと、ギヴソンの手綱をグツと握り締め、地面にめり込ませる。その人物は元の前に立ちはだかると、ギヴソンの殺気など気にも留めず淡々と言葉を繋いだ。

「貴方……。困りますね。」

こんな場所に、一つ目の海を越えた世界の生き物を連れ込むとは。しかも、その獣の額……。人を襲った事がありますね？ 何故狩らないのか理解出来ませんよ。

貴方もそうだ。何故今更「始まりの地」に？ ここを出発されて一年以上お立ちのようですが。貴方がたの役割をお忘れですか？

エンダとは獣を狩る為だけに存在して居る事を、忘れてはいけませんよ。

そもそもどうやってこの地に？ 原則海を越えたら、戻って来られない筈ですが？」

表情はフードに隠れ見る事は叶わないが、元を侮蔑しているのは明らかだ。矢継ぎ早に質問を重ねる協会の人間に、元は姿勢を崩さず飄々と答えた。

「俺だって知らねえーよ。たく、せっかく一つ目の海を越えて、

これからって時に、いきなりこの「始まりの地」に飛ばされたんだ。どうやって戻ってきたのかもよく分からねえ。洞窟の中で戦っている時だ。こいつらと一緒にな。

それにこいつは、俺の足だ。移動手段として獣を従えるのは、エ نداが成せる技、自分よりも弱い獣だ。問題ないだろ？」

元の言葉に、ギヴソンがブルリと震えた。それが怒りからか恐れなのかは分からなかったが、今は構っていられない。狩りの対象にされたら困るのだ。

協会に属する白装束の男は、暫し考え込んでいたが、結論に到達したのか服の裾を翻し、建物方向へ歩き出した。しかし、再度振り返り、元に向かってこう言い放った。

「貴方……。多少強くなったつもりなのですが、そのレベルで満足されていては、ねえ。

こんな場所に舞い戻って、のんびりされてるようでは……。貴方、いつか死にますよ？

おや、これは失礼……。ご心配から言葉が過ぎましたか？」

そう言うと、後は一度も振り返る事無く、建物の中に消えて行った。元はその姿を一瞥し、無表情なまま鼻を鳴らす。

「ち、いけすかねえ」

そう深い溜息を吐いた。協会とはあの白装束軍団の組織だ。表の世界には出てこない組織だが、この世界では絶大な影響力を持つ。名目上エ نداの支援を行う組織ではあるが、エ نداを駒以下程度にしか思っておらず、密かにエ ندا達からは、煙たがれている組織だった。

「全く……。関わりたくねえってのに……」

そう毒づく元の肩から、タロが勢いよく飛び降りた。その向かった先には、

「おっ？」

白装束と入れ替わりで、ハルが入口から出て来たのだ。

変わった。

まずは服だ。不思議な現象だが、エンダが戦闘や危険に晒されると着衣がバトルドレスに変貌を遂げる。このバトルドレスが優秀で、エンダはこの服によって、数々の至難を乗り越える事が可能となるのだ。正にこれはエンダの証しだった。

「便利だぞ、それは」

元はニヤリと笑った。服だけでは無い。この世界に受け入れられた自然感は、別れる前とは劇的に違う。意図せずにレベルが上がリ、多少の抵抗力は備わったが、相変わらず頬がこけ手脚は棒きれのようだった。それが今は、頬にほんのりピンク色の血色を湛え、全身に強い生気を発するまでに変わった。

「何かには成れたらしいな。戦士ではなさそうだが・・・」

そう言つて、元は白い歯を見せながらニカッと笑った。

第4章 From now on - 4

「ちよつと、目立ってきたな。一旦町から離れるぜ」

元の提案で、一行は休む間もなく町を出た。元の言う通り、ギウソ
ンに対する畏れからか、先程までの雑踏が嘘の様に、静まり返つて
いる。獣を狩る事が生業である筈のエンダ達ですら、物影に隠れる
始末だ。

一行は小高い丘に上り、どことない世界を見ていた。

「息、出来るようになったか？」

元にそう言われて、

『ああ、私の身体を気付かっただの事か・・・』

何故こんな場所にと、ハルは訝しがったが、エンダになった自分へ
の気遣いだろうと解釈をした。ハルは全身に風を受けながら小さく
頷く。

「つい先程まで、この受ける風すら苦痛でしかなかったのにな」

元は扉を開けて、直ぐこの場所を訪れたから（というか、連れて来
られた）当時は多少辛かっただけで、ハルの苦しみは理解してあげ
られない。しかし、落ち着いた表情を見ると、エンダになれて本当
に良かったと安堵するのだ。

元は一度目を閉じ、そしてハルの掌中のタロに目を移す。

『ここからスタートするには、この上ない状態の良さだ。まずレ
ベルは問題ないだろう。能力に対する抵抗感もなさそうだし。そう
すると・・・』

元はハルの掌で安心しきつたように寛ぐタロに、優しい眼差しを向
けた。

『お別れなんだな、タロ』

始まりの地で、ハルに駆け寄る相棒の姿を見て元は決意した。熱い
思いが元の胸を締め付ける。目頭が熱くなるのを、グツと押えた。

『いや、お前が幸せならば、それでいい……。ハルだったら、安心してお前を預けられるってもんだ』

この場所を選んだには訳がある。ハルに夕口を託した後に、颯爽とギヴソンに乗り込み駆けて行けば、多少なりとも記憶に残る別れになるのではないか……。そんな僅かな期待があつての事だ。

『情けない……。俺』

「……。頼みがある」

同時に二人が、同じ言葉を発した。何度も脳内でシミュレーションを繰り返していた元は、想定外の展開に動転してしどろもどろに答えた。

「え？ つと。あの、お先にどうぞ？」

そんな元とは対照的に、ハルが真剣な眼差しで言い放った。

「私を、元が行けるギリギリの土地まで、連れて行ってくれ」

「は？」

いつもは口数が少なく、ボソボソと話すハルが、やけにはっきりした口調だった。夕口を託す事しか想像して居なかった元は、ハルの言葉を瞬時に理解出来ず、

「連れて行け？」

そう聞き返した。そんな元の心中など気にしていないのか、ハルは言葉を繋げる。

「私は、恐らくヒーシャに成った。既に使用出来るであろう回復魔法の原則が、自分の体にある事が分かる。

しかし、所詮人を救うための能力だ。私が望んでいた力には程遠い……。が、この力を最大限まで、しかも短期間で引き上げたい」

ポカンとハルの言葉を聞いていた元は、「ハッ」と我に返って怒鳴った。

「ば……。馬鹿野郎！！」

エンダ様とか言われて調子に乗ってんのか！？ 低スキルの回復魔

法位で、何に成れたってんだ？

まさか今日、明日で俺レベルにまでになれるとでも思ったか？舐めんな！

何か勘違いしているみてーだけど、俺達の使命は獣を狩りこの世界の民を救う事だぜ。自分の能力開発の為じゃ、絶対無い！！

そもそも絶対死ぬって！舐めてんの？この世界をさ。能力を高めんには、それなりの努力や経験が必要なんだよ！」

ハルは、大声を出しても無駄だと言わんばかりに、無表情で答えた。

「舐めてなどおらん。勿論本気だ。進めば進むほど獣が強くなるのなら、先に進んだ方が民の為になる。一石二鳥だ」

自論を当然の様に押し付けてくるハルに、少し怯みながらも、

「はぁ……」

だから……無理だって。生き抜く事が前提だから。それって、俺に守ってもらうのが目的だろ??

低スキルのエンダは、この町から地道に戦っていくしかねえんだよ。そうやって皆それぞれの持ち場で戦っていけるようになるんだ。

そもそも俺がここに居るのは例外中の例外で、本来だったら自分の力で生きていくしかねえんだ。出来ねえからって、人を頼るなんて虫が良すぎるぜ！」

元の罵倒に怯むことなく、淡々とハルは答えた。そう表情すら変えずに。

「……昔はそう思っていた。何よりも大切なのは過程なのだ。辿り着くまでにどれだけだけの努力を行ってきたのかだと、……いや、今でもそう思っている。そうあるべきだとも。しかし、それでは私が望む結果は得られない。もう一秒も無駄にしたくない。これが一番近道なんだ。元が言う事もよく分かるが、今はそのルールに従う事は出来ない。」

……しかし私一人では、今直ぐに元の戦うレベルまで辿り着けない。正規のルートで行けば、恐らく元が辿ってきた倍以上の時間がかかるだろう。それでは、遅いのだ。

分かってくれ。私は強くなりたい」

何が分かってほしい、だ、元はギリリと歯を鳴らす。頼むから俺の話聞いてくれ。

二人の間を優しい風が通り過ぎ、ハルの髪を揺らしている。その髪の間から垣間見るハルの強い決意が、元を突き刺し、元の心臓は、今やドクドクと大きく高鳴っていた。

「強くなって・・・おめえヒーシャじゃん。ヒーシャが戦える筈ねえーだろ？癒してなんぼだろ？」

あのなあ、おめえが、前線で戦っても勝てるわきゃねえじゃねえか。攻撃一つ出来やしねえよ。同じレベルの奴らと組めよ！癒しまくって強くなんじゃないの？ヒーシャって。知らねえけど。

戦士の俺だって、弱い獣から戦って時間掛けて、少しずつ強くなつたんだよ。近道なんてねえんだよ・・・そうやって、俺はここまで来たんだよ」

説く度に、元は少しずつ悲しくなっていく。短い期間だったが寝食を共にし、仲間として認めてきていたのに。俺が切々と言ってきた事の何一つ、こいつに届いていなかった・・・そう思うとやり切れない。

「元が今まで伝えてくれた事・・・本当に理解している。今のままでは、明日にでも死ぬかもしれない。でも、死なないかもしれない。それに賭けたいのだ。」

ムシがいいことも、分かっている。いざとなったら捨ててもらっても構わない。元が戦っている場所まで連れて行ってくれ」

ハルの言葉に、元は少し心が揺らぎ始めた。ハルの言葉の端先が、いちいち元の心に突き刺さるのだ。

「捨てるって・・・（そんな事、俺が出来ないって分かかって、こいつ！）何をそんなにあせってたんだ？俺がここにきて一年ちよつとだけ。たった一年じゃねえか？んで、こんな獰猛な奴を使えるようになるんだよ。（そう言いながら、元はギヴソンを指差す）。

てか、ごめんだよ、用心棒みたいな事・・・！」

元の最も至極な言葉にも、ハルは諦める様子も見せず言葉を繋げる。元の怒涛と、ハルの淡々とした物言いは、実に対照的で温度差がある様に見える。しかし次の瞬間、ハルの表情に一片の必死さが垣間見れた。

「元、何度でも言う。私を元が戦う場所まで連れて行ってくれ。それから先は、別行動だ。

この通りだ。頼む！」

これ程までに必死なハルを、今まで見た事が無かった。感情が高ぶる仕草を見せたのは、出会った時以来だ。それ以外は、何を考えしているか分からない程、無表情、無関心を決め込んでいたのに。

『こいつ・・・ちよ、しつけえ！』

どれ程、怒鳴ってもなじっても諦めないハルに、元の中で諦めに似た感情が浮上する。

『受け入れなかつたら、こいつは一人で絶対に無理をする』

そう思いながら、天を仰いだ。それは、自分の限界を理解していないからの無謀……。そして、それを分かっているが故に、拒絶する事が出来ない自分も……。

元は最後の期待を込めて、ハルに叫ぶ。

「あーもう！！ お前！！ 超ム力つくんだよ！！ 一人で世界の苦悩を背負ってます、みたいな顔しやがって！ 何なんだ！！

理由を言え、理由をよ！！

皆、洗礼を受けたら使命感で意気揚々とするか、能力を受け入れられず体が拒絶して苦しむか、どっちかなんだ。何を抱えているんだ！ 聞かねえ限り、動けねえ。海を越える度に半端なく獣は強くなるんだ。あそこは俺でもギリギリ勝てるかどうか……。自分の身すら守れねーお前を連れていく事は、俺にとっては相当な賭けなんだ。そのリスクを負うだけの、理由があるんだろう？ 俺には聞く権利があるはずだ！」

互いが一方通行の主張を続け、全くの歩み寄りを見せない。そんなエングダ達のやり取りには、全く興味がないギヴソンは、面倒くさそうに丘の上で横になっている。タロは、両手に組まれたハルの掌に、ちよこんと乗って事の成り行きを見守っていた。

『もう、一か八かだ。くそつ、こんな真剣な奴を打ち捨てて行くなんて出来ねえ。でも、お荷物抱えて戦って、果たして生き延びる事が出来るか……。聞いて納得する内容だったら仕方ねえ。連れて行くしかねえ』

元はたとえ短い期間でも、一緒に戦う意義を見出したかった。ハルは一瞬言葉に詰まったが、体を固くしながらも言葉を繋げる。

「元、私は決して、己の不幸を嘆いている訳ではない。私は真実が知りたいのだ。何故私がこの世界に呼ばれたのか。私がおこに来る為に犠牲にされた事、策略、全てが知りたい。答えになっていないと思うが、今はこれしか言えん。今どれ程重要な事を決めようとしているのか……。分かってる。しかしどのような結果が待っていたとしても、私は受け入れる。そして、絶対に現状を打破して見せる。……。頼む。私に利用されてくれ」

「利用されてくれって……」

ハルの言葉に、元はがっくりと肩を落とす。

第5章 A n d t o a F i g h t - 1

元達は、相変わらず、二人と二匹で旅を続けていた。

一つ目の海はとつくの昔に越え、二つ目の海も、もう目前だ。それでも、一緒に旅を続けているのはパーティとして相性が良かったに他ならない。剛と柔。互いが不足している部分を、戦いの中で補う事が出来た。事実、この一年降りかかった数々の困難を乗り越えて、今この地に立っている。

元は今も獣を狩りに行く最中で、肩にハルを乗せて、豪雨の中ギヴソンを走らせていた。装備しているゴーグルに否応が無しに、雨粒が打ち付ける中、元はハルにそっと目を移した。

『そういえば、ハルのバトルドレス・随分変わったな』

この雨の中、バトルドレスは、雨具仕様に变化して居る。灰色の世界に、一点の曇りすらないバトルドレスは、ぽっかりと浮かび上がる淡い光の様だ。しかし当のハルの表情は、深いフードの中で、何を考えているのか垣間見る事は出来ない。

『一年前・・・エンダになったばつかの時は、薄い布地だったのに。今や立派な厚手の布地に成ってるし、白を基調にした複雑な模様が入っているところなんか、ヒーシャらしいな』

聖者の加護を受けているのか、多少の攻撃であれば、防御可能な強度性を兼ね備えている。これは、ハルのスキルが上がったことにならぬ。

不思議な仕組みだが、エンダとして経験を積みレベルが上がる度に、姿形も性能も変化する。バトルドレスを見れば、そのエンダの強さを測り知る事も可能だ。

『俺のバトルドレスは、地味でつまんねえもんさ。ちょっと模様が変わる位だし』

元のドレスも同じ仕組みなのだが、戦士としての特性か、防具と

しての機能が重視されているらしく、レベルが上がっても差ほど変化を感じさせない。しかし「風を纏っている様だ」という元の言葉で、その性質の高さを伺い知ることが出来る。

移動距離が長いこんな日は、昔の話を思い出す。

『根負けしたんだよなあ。頑固って言うか・・・自己中っていうか。』

結局何を言っても、説得しても罵倒しても、連れていけの一点張りです・・・。俺も甘いな・・・(フツ)

正確に言えば、こうだった。平行線を辿る二人の間に、痺れを切らしたタロが、元の肩に乗ってきて、頬に擦り寄ってきたのだ。共に過ごした長い旅路で、今まで一度も見せた事が無い行為に、元が再起不能になり終了・・・。根負けしたというよりも、タロの一本勝ちだった。

『しっかし、何だかんだで、ホント強く成りやがった。それはすげえよ。って言っても、無茶して、死ぬ思いして、命削って、の結果だけどさ。よく死ななかつたよ、こいつ。』

・・・全く痛々しいんだよ、ホント。

たく、一体何を抱えてんだか。ま、無理に聞かねえがな。ま、結果的には助かっている訳だけど』

元は「くはは」そう人知れず笑った。

遠くで雷の音が木霊する。天候は一向に良くならず、頬を打つ雨が痛い。獣が居る場所まで、先は長い。

元はふと自分を導いた光の事を思い出す。

『あの光から聞いていた事は、全て本当だった。この世界は危機に瀕しているし、エンダは世界を救う民だ。俺は戦士になって、今も戦いの中に身を置いている。』

・・・あの光は、強い意志がなければ扉は開かない。全てを捨てる覚悟があるか？ されば扉は開かれん・・・って話していた。

それこそ皆が人生の絶頂期に導かれ、己の意志で扉を開ける奴らばかりだつて言つてたよな。なのに、こいつはどうだ。この世界に來た意味や意義、最終的には己の意志で扉を開けてないらしい。・・・それはちよつと、辛いよな』

元は結局、ハルを見捨てる事が出来なかつた。それが一緒に旅を続けている、もう一つの理由だ。

打ちつける雨は、未だ止みそうにない・・・その時、ハルが元の肩を叩いた。元は手綱を引き、ギヴソンの走りを止める。元の耳元で告げるハルの声を聞いた。

「右斜め三〇度方向。ここから三・二キロ。目的の獣がいる」

「見つけたか！ よっしゃ、行くぞ！」

ハルが指し示す方向に、ギヴソンを操る。ハルは、ジツとその方向を見つめて全く動かない。これから先は、その視線の先に手綱を引くだけだ。

「ひょー・・・でけえな」

ホンの数分走つた先に、獣の姿を捉えた。徐々に目的の獣に近づきながら、唸る様に呟く。まだ数百メートル程の距離があるはずなのに、障害物から垣間見えるそのサイズは、六メートル強。背中から尻尾まで厚い甲羅で覆われているその姿は、狩りが困難を究める事になりそうで、元に深い溜息を吐かせた。

獣は異常に興奮しているのか、そんな性質なのか・・・周りの木々をなぎ倒しながら前に進んでいる。時折、闇雲に暴れては、鈍い雄叫びを上げる始末だ。

今回の狩りは、こいつが一ヶ月の間に三ヶ所の町や村を襲い、壊滅させてしまった事による。一度人間を襲つた獣は、殺戮という快樂に味をしめ、的確な意識の元、人間を襲うようになる。大半の獣は獍猛な性質な上、この世界の人間は獣を傷つける事が出来ない。その為、懸賞金でエンダを雇い、獣退治を依頼するのだ。それは、

村単位であったり、国単位だったりする。

エンダは、「依頼所カラー」で自分のレベルに沿った依頼を受け、契約を交わすのだ。どこのカラーも、エンダでこった返し、酒場のような賑わいをみせていた。陽気且つ陰気、様々な思いが入り混じった異質な空間で、依頼を探す多種多様なエンダ達が行きかう場所・
・それが「依頼所カラー」だった。

第5章 And to a Fight - 2

膨大な依頼リストの中から、ハルが選んだ獣がこいつ「ザツツケルオン」だ。

「あ？ 無理だろ？ A' って無理じゃねえ？ しかも宝玉の色が深緑じゃねえか。こいつはあ、手ごわいぞ」

元はハルの手元のリストに目を落としながら、これからの展開に深い溜息を吐いた。宝玉の色は、深ければ深いほど獰猛な獣と見なされる。依頼書には様々な情報が収集されているが、中でも宝玉の色は重要な判断材料とされた。

元はネビールと呼ばれる飲み物を飲み干しながら、忠告を続ける。

「無理だって、もう少し薄い宝玉を持った獣ですら、息絶え絶え倒したってんのに……。ねえこつちにしない？ ほら、このB'。これだったら俺らでも、楽に倒せ……。って、ちよつと！ 聞いてる？」

最近は何りの対象を決める度に、こんな攻防が繰り返される。行きつく結果は同じなのだが、元はパーティーの存続の為に、何度も苦言を告げ続けてきた。

「今日こそは絶対に、阻止して見せる！」

ハルは、元が指差す獣に一瞥しただけで、ザツツケルオンの特徴を羅列し始めた。ボソボソと話す声は、カラーの雑踏に掻き消されそうな程、小さい。

「獣名は「ザツツケルオン」。

サイズは三メートルから七メートル。獰猛且つ類いまれな体力と、防御に使われる長く太い尻尾、発達した嗅覚……。と。嗅覚は面倒か。少し厄介かもしれない。接近戦は、要注意だ。

後は……。爪はどんな岩も砕ける威力を持ち、更に威力を増大させる長い腕。その為攻撃は、大きく腕を振り落す、か……。恐らく敵を一撃で仕留める方法に限られると思う。体格から予測すると、

攻撃パターンも単純な筈だ。

しかも清い光に弱い。「癒しの光」で攻撃力及び体力を一五%前後減少させる事が出来る。まあ、二十分位の効果しかないが、その時間が勝負だ」

「ちよつと、ちよつと?」

元が間髪入れずに、苦情を告げた。

「何、受ける気満々で話進めてんだよ!!」

「それに・・・」

ハルは、リストを見ながら言葉を繋げる。

「ここから東二〇キロ地点に居るが、東南に向かって移動を続けている」

自分の額に指をかざし、乱雑に本を捲る様な仕草をした。その表情は真剣そのもので、元は「ググツ」そう言葉を飲み込んだ。

「こいつの目的は、恐らくその先にある町だ。一直線に進んでいる。恐らく後二日程度で、町に到着するだろう。千人近い人口の町だ。襲われる様な事があれば、甚大な被害が出る」

ハルの言葉には、この依頼を無視出来ない緊迫感を纏っている。

『いやいやいや、このパーティを守るのは俺だ。死んだら元も子もねえんだからな!!』

「う・・・。時間はあまりない、か。で、でもよ、随分育っているみたいじゃねえか? 俺達の手には余るぜ。頑張ればどうにかなる、なんて世界じゃないんだからさ」

元の言葉を尻目に、ハルはリストに手を翳し「我は願う」そう呟くと、リストが青白く輝いた。これで契約締結だ。隣で、「ちよ、だから! 俺の意見も、ちったあ聞け!」元が不機嫌そうにブツブツ文句を言っているが、全く気にも留めず、リストから顔を上げようともしない。

その時、隣の席から楽しそうな声が響いてきた。

「ねえ、こっちにしようよ。このタイプだったらこの前、コッ掴

んだしさ！ 絶対行けるって！！」

「B' かぁ・・・ちよつと不安〜。ほら見てよ、意外とスピードが速いじゃん？ 僕ら、すばしっこいのちよつと苦手じゃない？」
元はチラリと隣のリストに目を移した。そのパーティが指差していたのは、正に自分が契約を狙っていた獣だ。元達にとっては、問題無く倒せるレベルの獣なのに、容易に片がつくのに・・・そう思うと、二人に向かって自然と言葉が出た。

「大丈夫じゃねえ？ スピードがあるって言っても、広範囲で意識を広げるタイプじゃねえし。前からの攻撃だけ注意しておけば、行けんじゃねえ？」

元は頼杖をつきながら、あたかも知り合いの様な顔でパーティを見ている。元の言葉に、顔を上げた二人を見て、元は驚きの声を上げた。

「双子？」

知り合い同士でこの世界に訪れるエンダなんて、聞いた事がない。隣のテーブルには、双子と四十代前半位の男女が座っていた。ぱつと見、親子の様なパーティだ。獣の選別は双子に任せているのか、干し肉を肴に酒を飲んでいる。

「「双子じゃないよ」」

「「似てるけどね」」

息もぴつたりな上に、人懐こい笑顔もそっくりな二人だ。ここまで似ていて、兄弟じゃないなんて有り得るのだろうか？ 十代半ばの風貌に、クリクリとした栗毛が良く似合っている。

「へえ、他人の空似か？ めちゃ似てんなあ」

元の感心する様な言葉に、ハルがチラリと顔を上げて、暫し二人を見入っている。二人は互いに顔を見合わせ、ニッコリと笑った。

「「だよ。自分達でもそう思うよ」」

言い合わせた様に、同じ言葉を発する二人は、更に言葉を続ける。あまりにも息がぴつたりで、スピーカーから声が出ている様に聞こえる。

「僕達、出会った瞬間に運命を感じたんだ。互いが欠けていた部分なんだって、ビツと来たよ。ね!」

「へええ〜面白いなあ。何々? 職業も一緒なの?」
どこまでではもれるものなのだろうか……興味本位を全面に押し出しながら、元は楽しそうに問うた。

「そんな訳ないでしょ〜四人のパーティで、二人も同じ職業なんていけないよ」

酒に酔った紅い顔で、女性が話に入ってきた。社交的な元は、自然と他のエンダ達と会話を交わす事が多い(ハルとは全くと言っていい程正反対だった)。

「僕はマジッカーだよ」

「僕はブックマスターだ」

「へえ、ブックマスター? 珍しいな。マジッカーやヒーシャと違って、攻撃と癒しが使えるって本当? 獣を召喚するんだろ?」

「まあね、でもレベルが低い内は中々ね。足手纏いになる事もしばしば」

そう言うと、ブックマスターは小さく肩を上げた。「マジッカー」とは魔法使いの事だ。精霊と契約を交わし、攻撃魔法を使用する事が出来る。戦士とマジッカー、そしてヒーシャはパーティに必ず居る職業だった。

反して「ブックマスター」は、かなり希少な職業といえる。魔法書から様々な能力を有する獣を召喚する事が出来が、レベルが低いうちは、召喚出来る獣も限られて居る上に、かなりの魔法力を消耗するらしい。ブックマスターが海を越えるのは、容易な事ではないと言われていた。

「なあ〜に言ってるの? ロツテってば、自分の価値をホント分かってないんだから! 四八の召喚獣が使えるなんて凄いんだからね! 更にレベルが上がれば、凄い事になるよ。今は我慢さ。それまでは僕が君を守るよ!」

「ジョツシユ・・・ありがとう。君にはいつも助けてもらっていて・・・いつか君の役に立ちたいよ！」

「それは僕のセリフさ、君と一緒に狩りをする事が、僕の生きがいなんだ。君と居れば、僕はもつと強くなれる」

キラキラとした瞳で、互いを見つめる二人に、元は首を捻りながらも感動の声を発した。仲間意識が強い奴はごまんと居るが、ここまです認め合っている奴らは珍しい。

「仲良いなあ」

「こいつらはねえ、自分大好き人間だからね。だからお互いの事が、命の次に大事なのださ」

親父が二人を指差し笑い、女性もケラケラと笑っている。「ははは、そっくりだって言ってもそんな馬鹿な・・・」そう笑う元の隣で、二人は同時に舌を出した。どうも冗談ではなさそうだ。

「じゃ、契約するよ！」

ジョツシユの言葉に、ロツテが頷くと青白い光が周囲を照らす。

「あゝあ、良いなあ・・・」

諦めきれない元の言葉に、双子を見ていたハルが手厳しくピシヤリと言った。

「誰かがやらねばならんだろう。それが我々というだけの話だ。

こいつには、既に何組かのエンダ達がやられている。だからこんな危機的状況でも、野放しだ。時間が無い。選好みしている場合か。

そんな下級（元が選んだ獣を指差し）、そいつらに任せておけばいい」

【下級を狙う、そいつら】と呼ばれた二人は、苦笑いを浮かべている。姿形は幼いが大人の対応に、元は内心ホッと胸を撫で下ろした。ハルの無神経な物言いは、いつも元をハラハラさせた。気の強そうな親父と女性は、ハルの小さな声が聞こえなかったらしく、キョトンとしている。

「うゝ選好みじゃねえ！ 死んだら元も子もないっつもの！！ 能

力に合った獣を選択するのは、ここで生きてく上で死活問題だろ？」
そう訴えられた言葉に、ハルは真っ直ぐな視線を元に投げ、

「だったら自分達がその能力者になればいい事だ」

それだけ言うと、持ち込んだ本を広げ、目を落とした。

「~~~~~！ だから、その能力を得る前に死んだら意味ないじゃんか！！ 既に何組かの・一組になったらどうすんの！？」

元の絶叫に、ロツテとジョツシュがリストを覗き込み、驚きの声を上げた。

「ひゃ〜、ほぼS級じゃん。リストが上がって随分経つのに、未だ倒されていない獣だよ？ お兄さん達、そんなに強いのか！？」

「いやお兄さんって、俺は元だ・・・って、そこじゃなくて。弱くはねえけど、A'はもしもの時が・・・」

この世界の契約は、獣を仕留めて宝玉を持ち帰れば任務完了となる。

逆に、依頼カード（依頼を受けたら発行されるカードで、持っているのと獣の情報が更新される）を破棄するか、受けたエンダが死ぬか、もしくは二十日以内に仕留めなければ自動的に破棄される。怖いのは、契約破棄を続けると契約出来る狩りが限定される様になる事だ。その為、エンダは慎重に成らざるを得ない。

「既に契約は結ばれた。今更文句を言うな」

当然の様に言い放つハルに、

「今更あ〜?? いやいやいやいや！！ 契約する前に、散々反對しましたケド????」

ハルの有無を言わせぬ絶対的な物言いに、隣のパーティ全員が【御愁傷様・・・】そんな表情を浮かべている。皆の表情を横目に、元はギリギリと歯を鳴らした。それでも元は、効果の無い説教を言い続け、そして言いつくすとガツクリと肩を落とした。この雑踏の中、ハルだけが隔離された世界に居るように、元はスルーされ続けた。

『今回も無駄に終わった・・・』

「元、終わった？ だったらさ、この獣の対策を一緒に考えてよ！」

「元が頼りさ」

二人の陽気な声に、元は更にガクリと肩を落としたが、「ちよつと待ってて」そう言うと元は席を立った。ネビールを注文するために、カウンターにドカドカと向かう。

夜が更けると、カラーは更に異色な空気をはらみ始める。興奮と安堵そして不安。様々な想いが交差する空気に、エ نداは飲み食い笑い語り合うのだ。

「・・・行くのはいいんだよ。行くのはさ。獣は絶対に俺が倒すし。だって・・・おめえまた無茶するだろ？」

なみなみと注がれたジョッキを傾けながら、小さな声でボソリと呟く。そして一度ハルに目を向けると、フツと目を伏せた。

第5章 And to a Fight - 3

ハルが前髪に落ちた雫を払った。こんな小さな体のどこに、獣を前にしても怯む事の無い、強固な精神があるのだろうか・・・百戦錬磨の戦士でさえ、獣を前にすると一瞬恐怖に襲われるというのに。

ハルの能力は、他のエンダ達のそれとは全く違う。戦士とヒーシヤの根本的な違いだけではない。もつと根底の部分で大きな違いがあるのだ。ヒーシヤの事は全く分からないが、ハルの術者としての能力は、かなり高いのではないかと感じている。他のエンダと旅したのは初期の頃だけだが、魔法に時々鳥肌が立つ時があるのだ。何て言うのだろうか・・・戦士であれば、獣が切られた事に気づかず絶命する様な、一片の無駄がない美しさというのだろうか。正直、筋肉馬鹿の元には、回復魔法に優れているハルの能力は大変心強い。しかも、倒すべき獣の殆どが、闇に属する類いの為、ハルの補助魔法は有効に機能した。

『術の発動時間の短さ、ましてや術の影響力も相当・・・てか、センスがいいんだよな』

しかしこれは経験を積みめばどうにでも成る話かもしれないので、特段珍しい事ではないのかもしれない。

他のエンダ達と絶対的に違うのは、獣を感知する能力を備えている事だ。三キロ地点では方向を、一キロ以内になると、その性質と大体のレベルまでを感じ取る事が出来るらしい。神出鬼没に出現する獣を感知するのだから、この広い世界において驚くべき能力といえる。

加えてその記憶力だ。村や町に立ち寄る度に、終日書物所に籠る。そうやって得た知識を、額の前で本をめくる仕種で、情報呼び出す事が出来るらしい。胡散臭い話だが、光が浮き出るように文字が見えるのだと言う。そこに、自分の経験を上書きしていると言うの

だ。

しかし、そんな特殊な能力故か、はたまた強くなりたい一心からか、如何せん無理をし過ぎる。息も絶え絶え、町に駆け込む事も多く、何度死にかけたか分からない。それでも、獣を前に引く事を知らないハルを見捨てる事が出来ず、二人は何とか受けた依頼を片づけていった。

『いつになったら、心穏やかに暮らせるようになるんだろう』

元は目の前の獣を見据えながら、声に成らない嘆きを吐く。ハルと一緒に狩りを持続すれば、いつか絶対に命を落とす・・・そう思うのに、気がついたら別の狩りに向かってギヴソンを走らせている。

「気付かれた」

ザツツケルオの異常な興奮を感じ取ったハルが、ボソリと呟いた。嗅覚が発達しているというのは伊達じゃないらしい。気付かれた・・・そんな状況でも、ハルは決して動じたりしない。死にかけていても、レベルが低い敵の前でも、ハルは何も変わらなかった。

「（ちつたー、焦りやがれ！）チツ」

元はギヴソンから飛び降り、手綱を離した。縛り付けて、戦いに巻き込まれないようにする為だ。ギヴソンは毛色の違う獣から一目散に離れ、姿が見えなくなった。戦えない事もないだろうが、獣同士が戦う時は、喰うか食われるか、その時だけだ。人間の為に、そんな危険を冒す筈はない。

『こいつにも、これだけの危機回避能力があれば・・・』

元は嫌みと心配が入り乱れる感情で、ハルを見た。ハルはじつと胸に手を当ててタロのぬくもりを確かめている。服の隙間からタロが鼻だけを出している姿は、何とも力が抜ける様な可愛さがある。

「もう少し、我慢してね」

タロに向かって、優しくハルが呟いた。

クン・・・

ハルの気遣いに答えるように、タロは鼻を鳴らし地面に降り立ち、安全な場所を目指し駆けて行く。本当は一時も離れたくない筈なのに、ハルの足手纏いにならない様に場所を離れるのだ。タロの（元には見せない）聞き分けの良さと、ハルの（元には見せない）優しい言葉に、

「その優しさ、少し位は俺にも向けてくれよ」

言っても嘆いても無駄な言葉を、ブツブツと吐いてみたりする。

第5章 A n d t o a F i g h t - 4

ゴアツ

その時、元達の直ぐ真横を、直径二メートルの大木が通り過ぎた。風圧で二人のバトルドレスが揺れる。二人がスツと目を向けると、ザツツケルオンが直ぐそこまで迫っていた。

「ふうん、熊だな」

元の言葉通り、姿形は二足歩行をする熊そのものだ。深緑の瞳は、執拗に元達を見下ろしている。大きく体を左右上下に揺らしながら、時々呟きに似た唸り声を上げた。村を襲った興奮が蘇ったのか、瞳孔を異様に開かせ、流れ落ちる涎と鼻息を荒くする様は、殺戮自体が快楽・・・今まで何度となく見てきた光景に、「はっ、楽しんでやがる」元が苦々しく吐き捨てる。

犠牲になった民を思うと、いつもこの瞬間は堪らない気持ちに陥るのだ。

元は背中からスリりと剣を抜き、獣に向かって構えた。自分の身丈程ある剣が、豪雨の中鈍く光り輝く。長期戦は不利だというハルの言葉を思い返ししながら、ハルが仕掛けるタイミングをジツと待つ。ザツと一歩、獣が近づいたその時、周りに低い詠唱が響き渡った。

「エルザ スロウ 届け 清い光」

詠唱が終わるや否や、ハルの掌から呪文を携えた光の魔法陣が出現した。波打つ様な魔法陣の出現を導くがの如く、周囲に荘厳な歌が木霊する。空気が震えた・・・そう感じたのと同時に、魔法陣がハルを離れ、勢いよく上昇を始めた。魔法陣は大気を巻き込みながら、獣のサイズまで急激に広がったかと思うと、一気に振り落とされた。ザツツケルオンが光輝く魔法陣に包まれた瞬間、その巨体が大きく揺れる。

ギヤガガガアア！

空気を揺らす雄叫びを上げ、両手を広げ天を仰ぐ。余程の苦痛なのか、目の焦点は定まっていない。しかし元来の闘争本能から、覚束ない足取りで攻撃を仕掛けてきた。清い光で動きが鈍いとはいえ、やはり攻撃力は半端がない。長い腕の遠心力で、鋭い爪を左右上下と振り落としてくる。逸れた攻撃は、大岩を真つ二つに打ち砕いた。しかしハルの言葉通り、単純攻撃で軌道が読みやすい。元は、間合いを取りながら、獣の太い肩を目掛けて大剣を振り落した。

ガチン！！

「固え〜！！」

金属音が周囲に響き渡る。剣が鋼鉄の皮膚によって、弾き返された。腕全体に伝わる衝撃に、思わず剣を持ち替えて痺れた手を振った。

「力比べか・・・」そう呟きながら、元はスツと剣を構える。

ドン

次の瞬間、元は獣の目の前だった。降りしきる雨の中に、元の残像がぼんやりと残る。スピードと破壊力、元の一糸乱れぬ怒涛の攻撃が、ザツツケルオンを捉えた。

ガキン！ガキン！

しかし、固い皮膚に阻まれて致命傷を負わせる事が出来ない。その上、嗅覚が発達している為か、元の攻撃に対して絶妙な防御力を発揮してくる。

「くっ！！」

元は気を練り込む為に、剣先に集中した瞬間、

「やべっ！！」

元の右目に、ザツツケルオンの長くて太い尻尾が見えた。そう気が付いた時には、時既に遅く、鋭い衝撃が元の右脇を襲う。痛恨の一撃は、元をそのまま真横に弾き飛ばした。木々を数本なぎ倒し、大木に全身から打ち付けられると、衝撃で水滴が豪雨の様に降り注ぐ。

「がはあ・・・」

「！！」

思わずハルは、元に視線を移した。一時の間の後、なぎ倒された木

々の間から、倒れたままの姿で、よろよると片手が上がった。血に染まった唾を吐きだしながら、横腹に食い込む激痛に、

「い・・・てえ。なんだよ・・・。尻尾、防御どころじゃなくねえ？ 何が単純な奴だって？」

恨めしそうにハルが居る方向に目を向ける。そんな元の言葉など届く筈も無いが、

「ふむ、新しい情報だな。上書きしておこう」

ハルは、抑揚の無い声で呟くと、獣に視線を移した。

第5章 A n d t o a F i g h t - 5

ギヤギヤギヤア

ザツツケルオンは、目の前の小さい生き物に視線を落とした。コバエの様に纏わりつく生き物は、たった一撃で立ち上がれない程のダメージを受けている。どちらから先に片づけようかと迷いながら、ハルに視線を移した。

『これは小さすぎて面白くない。こいつは最後の楽しみにしよう。遊べる玩具がノコノコ出てきたんだ。恐怖に引き攣る顔が見たい。さっきの生き物は、動けない程のダメージだ。いたぶりながら、ゆつくりと遊んでやる』
そう判断すると、元が倒れている方向に体を翻した。

獣の判断を横目に、ハルはボソリと呪文を唱える。

「ル ペオ セイン 届け 癒しの泉」

ハルの足元より魔方阵が浮かび上がり、倒れている元の真上から光の泉が降り注いだ。光の泉を全身に受け、元は飛び跳ねるように立上がり、ハルに向かって声を掛けた。

「いよっしゃー！ 全回復！！ ハルくサンキュウウ」

先程までの激痛が、嘘みたいに無くなっている。ヒーシャの魔法、癒しの効果は絶大だ。

元に向かって歩みを進めていたザツツケルオンは、一瞬目を見開いた。ダメージを与えたはずの生き物が、勢いよく立ち上がり、しかも負わせた傷の後遺症を微塵も感じさせないとは。

目の前の状況を怪しく光る眼で見届け、ハルに向けてグルリと体を反転させた。自分の動きを封じ込め、仲間を回復する何かが使える生き物は何度か見てきた。ハルを見据え、ギラリと深緑の眼が光ると、ゆつくりと歩みを進める。

『攻撃力のある生き物を叩きのめしても、何度でも起き上がった。それは、この小さい生き物のせいだ。攻撃力が強い生き物は、こいつを殺してからゆっくり相手にすればいい』

ザツケルオンは、緑の目をギラギラさせながら、一步一步ハルに近づいていく。自分の力でどうにでもなる命が目の前に居る・・・獣は興奮に身を震わせた。

「ちよお、ちよ、ちよつと待て！ お前の相手は俺だ！！！」
ハルを攻撃対象に変えたザツケルオンに向かって、元は焦り叫びながら駆け出す。

「ふむ・・・こいつ魔法を理解している。頭が良いな」

今や眼前に立ちただかるザツケルオンを前にして、ハルは冷静に判断した。力だけではない、この感の良さに何組ものエンダが犠牲になったのだ。エンダと戦い生き残る度に、獣は強くなり手強くなる。契約を交わしたならば、自分達が狩りを成功させなければ、世界の脅威は増すばかりだ。

「それでいい」

ザツケルオンの判断に、ハルは嬉しそうに呟く。五メートル級の獣は、下から見上げると大木の様だ。こんな獣と対峙する事になるうとは、一年前は思いもよらなかつた。・・・命を摘む事に、躊躇していた自分が居たのに。

『一年か・・・早いものだ』

その刹那、

ギャーガガッ

ザツケルオンが地の底から響くような雄叫びを上げた。ギラリとハルを見据えると、長く太い腕を一気に振り落した。自分にとつては、ゴミ程度の生き物だ。この一撃で決まる・・・そう判断を下す。ハルの栗色の瞳に、ザツケルオンの鋭い爪がくつきりと映った。

「ハ、ハルー！！！」

『仕留めた!!』

ザツシュ!!

太い爪が、地面に深く突き刺さる。地面をえぐる程の一撃に、土が激しく飛び散った。獣は打ち付ける雨の中、天を仰ぐ。深緑の瞳は瞳孔が大きく開き、その涎が滴る口元は、ニヤリと上に引き上げられていた。

第5章 And to a Fight - 6

ザツケルオンは、体の奥底から震える様な快樂に浸った。悦に入り、ブルリと体が震える。簡単に片付いて物足りない感拭えないうが、少し楽しめそうな奴は残っている。振り落した爪を地面から抜き上げ、小さき人間の最後を確認するべく目を落した。そう、まるで勝利の美酒に酔いしれるかのように。

バラバラと、爪に付いた土が地面に落ちた。

「！」

つい先程まで、快樂に酔いしれていた獣は、えぐれた地面を凝視し、一瞬の沈黙の後、「グルルルウ」そう低く唸った。先程までの高揚は、一瞬の間に萎びれ、全身を震わせる怒りに変わる。絶対的な自信で視線を落としたものの、当然あると確信した死体がない。寸で避けたのかと周りを見渡してみたが、その姿はどこにもない。・・・どこだ！ 間違はなく近くにいます。しかも生きています！ 気を付ける！ 自分の嗅覚がそう忠告する。

沸々と湧き出る怒りから目の前の木を掴んだ時、左目の端に違和感を感じた。現実にあつてはならない光景に、ザツケルオンの心臓がドクリと跳ねる。その時、目に飛び込んできたのは、自身の腕を駆け上がるハルの姿だったのだ。

「ハル！ 無茶すんな！」

元はこの展開に、心臓が潰れる程、ハラハラしながら叫んだ。

『あーもう！ またあんな事して！』

通常ヒーシャのバトルドレスは、ロング丈の清楚なタイプに変化する。それはエンダの戦う手法に応じて、バトルドレスが変化するからだ。元来ヒーシャは、後方に位置し仲間の援護を行う。癒しが存在価値であるヒーシャは、直接的には戦いに参戦しない。

これは、エンダの常識中の常識だ。

しかしハルは、後方で援護するだけに甘んじるようなタイプではない。ハルのバトルドレスがひざ丈程のスカートにスパッツ、そしてブーツなのは、ハルが自らの身を呈して、獣に攻撃を仕掛ける事に他ならない。

腕が振り落された瞬間、ハルは直前で攻撃を避け、そのままザツツケルオンの腕にしがみ付いた。そして死角になる位置に掴まり、ジツと身を潜めていたのだ。基本、獣の弱点は額に輝く宝玉であり、勿論この獣も例外ではない。その場所を目指し、ハルは一気に腕を駆け上がる。

自分自身の弱点を知っているのだろうか？ ザツツケルオンが、躍りになって腕を大きく振り回してくる。その瞬間ハルは、ザツツケルオンの腕を蹴り上げ、獣の額に向かって高くジャンプをした。目線は宝玉に据えたまま、素早く呪文を詠唱する。

「セルメイ ザ オルガ 指せ 光の道標」

唱えた呪文が終わるや否や、ハルは渾身の力を込めてザツツケルオンの額に両手を振り落とす。ハルの掌が獣の宝玉に触れた時、体が一瞬硬直しザツツケルオンの全身に稲妻に似た衝撃が走った。こんな苦痛は嘗て受けた事がない。割れんばかりの絶叫を上げ、バランスを崩す獣から、ハルは側面一回転で体を翻し地面に着地した。

「何が起きたんだ！！」

全身を稲妻に貫かれて、ザツツケルオンが地面に倒れ込んだ。痛みは正気で居られないのか、周りの木々を全てなぎ倒し、苦痛にその身をねじらせた。

ギヤギギギイイイイ！

「ハル！！ だから、無茶するなって・・・」

しかし無事に着地したハルもまた、片足について全身の苦痛に苛まれていた。勝機はハルにある筈で、一切傷など負っていないのに、

まるで相打ちのような状況下だ。ハルは、両足を地面に着きながら、声に成らない声で、苦々しく呟く。

「くっ……相変わらず、光の魔法は攻撃には向かない……」
何度も肩で息をした後、激しく咳き込んだ。

第5章 And to a Fight - 7

ハルが負っている苦痛は、ヒーシャの存在価値にある。

ヒーシャの存在価値は、救いだ。その救いの魔法を攻撃魔法に転換すれば、必然的に魔法に対して拒絶反応が出る。この世界では、反対魔法と言われている代物だった。

例えば「光の道標」は、本来獣の体力を奪う魔法なのだが、こんな体力馬鹿に使用しても差程の効果も期待出来ない。ハルはそう判断し、魔法を攻撃用に転換したのだ。

『転換する事で、通常体力を奪ったり動きを鈍らせたったりって、獣にとつちやゝ地味ゝに嫌な魔法が、苦痛を伴う魔法になるんだからなあゝホント、魔法って不思議なモンだよな』

反対魔法とは、救いを生業とするヒーシャに赦される唯一の攻撃なのだ。

しかし基本、ヒーシャに選ばれる人間は、性質が攻撃的ではない。そこで起こる心の葛藤が、術者に大きな負荷をかける。それが反対魔法を使い、己の命を削る要因となる・・・定かではないが、それ故に、ヒーシャは自らに反対魔法を使用するのを禁じるのだ。

『いや、そもそも使う事すら難しんだよ、本当は。通常の魔法だったら、遠隔操作も可能だろうけど、反対魔法は触れてナンボだからなあ』

通常ヒーシャは獣に直接触れられるような、運動能力を持ち合わせていない筈だ。そんなヒーシャの常識を全て覆し、ハルはタブーを繰り返す。その度に苦痛を負い、レベルが高い獣になれば成る程、代償は高かった。ハルは苦々しくうつすら笑った。

『分かっている。命を削っても、それが致命傷に成らない事位は・・・しかし、これが狩りに有効ならば、使わない訳にはいかない』
ダメージを与えるとという意味では、大変効果がある攻撃であるが、

実は殺傷能力は無い。ヒーシャは、獣の命を直接的に狩る事は出来ないのだ。アンデッドであれば、反対魔法に転換するまでもなく倒す事も可能だが、それは闇に支配される悲しき獣に、救いの手を差し伸べるヒーシャの救いだと言われている。

身体が張り裂けん程の代償を払いながらも、苦痛を与えるだけに留まる。それなのに、命を削る位の代償を負わされるのだ。正直、ヒーシャとしては割に合わない。

全身に鋭い痛みが走り抜けた。ハルは大きく息を吐く。

『やはりレベルが高すぎたか……。クツ！ この制限……。相も変わらず口惜しい……。！』

ハルは薄れゆく意識の中で、今までも何度となく感じてきた苦悩を思い返す。いずれこの意識も途切れるだろう。倒れるその瞬間まで、ハルは自問自答を繰り返すのだ。

『何か！ 何か方法がないもの……。なの……。か……。』

「たく……。また無茶しやがって」

元がぶつきらぼうに呟いた。今やハルは、両腕両膝をついてピクリとも動かない。栗色の長い髪が垂れ下がり、その表情を垣間見る事は出来なかった。いつの間にかタロが戻り、心配そうにハルの周りをグルグル回っている。

『早く宿に連れていかねえとな』

元は、首をゴキゴキと鳴らした。口では酸っぱく説教をするが、正直有り難い魔法には違いはない。このクラスになると、攻撃力・防御力が高い場合、自力で負ける可能性がある。旅を進める度に獣は強くなり、ギリギリのラインで何とか勝っている状況だ（一番の原因は、ハルがハイレベルな獣に限定し、契約を結ぶ事のだが……。獣が正気を保てない程のダメージは、防御率を著しく低下させ、獣を狩りやすくする。

だからと言って、命を削らなければ出せない技なんて、必要ない。

『そんな戦い方、嫌だつて言ってるのに、聞きやしねえ。もつと力を合わせれば、俺達だったら何とでもなるんじゃないの??』

元は、巨大な剣を一度大きく振り落とす。

ブオン!

空気が裂かれる音と共に、幻影で一筋の光が差した。

今やザツツケルオンの意識は、受けたダメージで完全に錯乱状態に陥っている。元は、剣に全意識を集中し、そして頭上高く飛び上がった。

元は、剣の持つ特性を引き出し、活かす能力に秀でている。例えば今所有している剣は、闇に深く属する特性を持つが、これに自分本来のパワーを絡ませることで、最大限に剣の個性を引き出す。

鋼鉄の皮膚を持つ獣ですら、太刀打ち出来ない怒涛の技。元の最大の奥義、

「デス・アラール」

低く唱え、大きく剣を振り落した。

第5章 A n d t o a F i g h t - 8

元は、消え行く獣の骸にジッと目を落とした。ザツツケルオンの身体が全て消滅した時、ゴロリと拳程の宝玉が地面に転がった。宝玉に向かつて、元は暫し手を合わせ続ける。これは狩った獣と犠牲になった全ての人々に対する元達の儀式であった。

そして宝玉を拾い上げると、狩りの完了に天を見上げ、

「無事に済んだな」

今回も死ななかつた。エンダとしての役割を全う出来た事に、元は深く息を吸った。

元達が町に入る頃には、雨は上がり、雲の切れ間から光が差し込み始めていた。雨が止むと、空気が澄んで特有の甘だるい感じになるのは、どこの世界も同じだ。しかし今の元に、そんな情緒に浸る心の余裕など無い。

町の外れの繋ぎ場にギヴソンを預けると、その足で宿屋に駆け込む。元に担がれているハルは、ぐったりして意識が無い。顔に生気がなく、エンダに成る前のハルを思い出させて、元の心をざわつかせた。タロも元の肩の上で、心配そうに覗き込んでいる。

『焦んな・・・大丈夫だ』

バタン

建物が軋む程に扉を開けると、受付に駆け込んだ。『早くハーブを焚かねえと』しかしそこに店主の姿はなく、代わりに何かを打ち付ける音が響く。カウンターから覗き込むと、奥でガタイのいい親父が、木槌を振りかざしている姿が見えた。

「あ？　ここ宿屋だよな？」

親父は一心不乱に、手元の錆びた剣を伸ばしている。しかし作業に集中しているのか、元の存在に全く気づいていない。元は店の奥に向かつて叫んだ。

「親父！！ 部屋を一つ用意してくれ。んで、ベッドにこのハブを焚いてくれよ」

そう言いながら、小さい包みをヒラヒラさせた。店の主人は、元の声にも顔を上げる事無く、

「あんちゃん、ちよつと待つてくれよ。今、それどころじゃ無えんだ。いくつもの町を潰した獣が、ここに向かっていているらしいのさ。その対策で町は大忙しなんだよ。」

くそつ！ エンダは来やしねえし・・・何が救いの民だ。俺らじや、どうせ勝てっこねえが、おめおめやられる訳にはいかねえ！。

てか、旅の人、死にたくなかったら、町から出た方が身の為だぜ
！」

そう答え、ガンガンと木槌を振り続けている。作業を止める気配が全くしない。確かに親父の言葉通り、町の人々の騒然とする様は、宿の中に居ても分かる。

「ゴホ・・・」

意識が無い中、時々苦しく咳き込むハルを横目に、元は焦る気持ち在必死で押さえる。

「あー？ その獣ってザツツケルオンの事だよな？ 奴は俺達が倒したからさ、

だから、早く部屋を用意してくれよ！」

元の言葉で、ようやく店の親父が手を止め、ポトリと木槌を落とし、元を見据えたまま、ガバツと立ち上がると、カウンターに駆け寄り足早に言葉を繋ぐ。焦る気持ちが高鳴り過ぎて、足元やら壁やらの道具を全てなぎ倒していた。

「マジかよ！？ あんたエンダか？？ いやいや、今までに何人ものエンダがやられた獣って聞いたぜ？ ガセだったら・・・」

親父の言葉に、元は心底疲れた顔を浮かべ受付の机を叩いた。

「お？ 何だ！？ クレームなら後にしてくれ」

親父の呆れる声を聞きながら、掌を広げた。その掌から深緑の色を湛えた宝玉が、ゴロリと転がったのだ。その転がる石の動向を目で

追っていた親父は、

「これ・・・は？ 宝玉？ ザツツケルオンの？・・・確かに、おふれに出ていたその色のようだが・・・」

こんな姿になっても恐ろしいのか、恐る恐る近寄って、宝玉を覗き込んでいる。

「なあ！ 分かったら早く部屋！！ 早く用意してくれよ！」

「あ・・・ああ」

宿の親父は言われるままに、部屋を用意し（ハーブも焚き）、慌てて宿を飛び出して行った。駆け出して行く親父の足音を聞きながら、

「全く、あんなペラペラに伸ばした剣で何が出来るんだい!?!」
親父が必死に打ち付けていた剣を思い返し、溜息を吐いた。獣によって命を落とす犠牲の多くは、この世界の民が居住地を離れない事によるものだ。その為エンダは、獣が町に到着する前に、倒さなければならなかった。

『逃げりゃーいいのに。てか、逃げよよ。・・・何故戦えない獣相手に』

同じ地に留まれないエンダには、そんな民の行動など理解出来ない。何とか守る事が出来た町の様子を落とす、暫し元は物思いに耽るのだった。

第5章 A n d t o a F i g h t - 9

元はハルをベッドに寝かせ、ハーブが立ち込める部屋のソファにドサツと腰かけた。

「疲れた〜」

元は、親父が用意したお茶をすすると、ようやく戦いから解き放たれた気になれた。宿屋の親父は余程焦っていたらしく、テーブルの所々にお茶が溢れこぼれている。そんな慌てぶりに、フツと笑った。ベッドの縁で、タロがハルの顔を覗き込んでいるが、当分目が醒める気配はない。

「無茶しやがって・・・」

ハルの無謀な狩りは、今に始まった事ではない。戦いの度に、身を削る攻撃を仕掛け、有効と判断すれば何度でも反対魔法を使った。その度に、こつやつて宿に駆け込み、ヒーシャを癒すハーブ「センス」を焚く・・・今まで何度繰り返しただろう。

「すんなって言うてんのに・・・何度言っても、魔法で攻撃する事は止めねえし・・・。どうしたもんか」

ハルの特異な能力が著しく向上したのは、今の戦い方によるもの大きい。(勿論、人知れずトレーニングを繰り返し、努力している事も知っている)

体力、スピード、瞬発力、そして魔法。戦士でもないヒーシャが、獣と直接対峙するなんて聞いた事がない。獣を熟知するハルの戦略は、攻守共に高い成果を上げた。でも、と元は思う。

「こんな事続けていたら、いつか死ぬぞ・・・。獣の腕を伝って額を直接狙うなんざー・・・」

元は思いきり肺からフウーと息を吐いた。ハーブのセンスによって、自分の疲れた体も癒されていく。ハルの無謀さは褒められたものではないが、あの戦闘センスには、正直いつも驚く。

「お前のそれは、天性のもんか？ 瞬時に一番効果のある戦い方

を識別して、自分が描く狩りに獣を誘導する。それに加えて、攻撃に転換するあの素早さ。

うん、それは確かに認める。こいつだったら、マジでいい戦士になっていただろう……。しかし所詮ヒーシャだ。直接攻撃の能力の低さから、あんな危険な行動に出ざるを得ない。一度反対魔法を使っちゃうと、後は使い物にならねえ。ひどい時には気絶しちゃう。

俺が戦いの中で倒れたら、俺らパーティーは全滅だぜ？」

そう、独り言のように呟いた時、

「すまない。あの戦い方が一番効果的だと思ったから」

ハルの消え入りそうな、謝罪する声が聞こえてきた。元は一人言を聞かれた気まずさがあったが、お茶をテーブルに戻し、すぐさまベツドに駆け寄った。

「大丈夫か？」

一度目を閉じ、そしてハルが答えた。

「慣れてきたのか、前ほど辛くはない」

ハーブが焚かれた中でも、中々回復しないのだろう。ハルの顔は青白いままだ。そんなハルの顔色を覗き込み、

『ウソ言いやがって……。』

そう思いながらも、「そうか」と元は答えた。

「もう少し休みな。目が覚めたら、飯食いに行こうぜ」

元の言葉を聞いて安心したように（元にはそう見えた）、ハルは静かに目を閉じる。眠りに就く寸前に、寝言のように呟いた。

「食事……。先に行ってくれ」

そして、また深い眠りに落ちていった。

結局ハルが目を覚めたのは、次の日の正午だった。突然スイッチが入ったかの様に、ムクツと起き出し、シャワー室に籠った。隣の部屋で待機していた元は、ハルが起き出した気配を感じ、ハルがシャワーを浴びている間、汚れた服の洗濯を終えた。ベランダに大

量の洗濯物を干し切った時、ハルが軽い感じのワンピースに着替え、シャワー室から出てきた。

狩りでついた泥を洗い流し、すっきりしたハルに向かって、元は不機嫌そうに文句を告げる。

「なーにが、慣れてきた・だ！ 前より、ずっとひどくなってるじゃねえか。初めは三時間程度だったのに、今回なんざ約一日だ。もう、二度と反対魔法は使わないよ！」

プリプリ怒っている元の横をスツと通り過ぎ、タオルで長い髪を乾かしながら独り言の様に答えた。

「・・・だから、先に食事をして来いと言ったのだ」

ハルは包みの中から、皮で編まれたブーツを取り出し、スリッパから履き変える。体力が戻れば戻ったで、淡々とそんな憎まれ口をきく。元はギリギリと歯ぎしりをすると、

「ち、げーよ！！」

腹が減っているから言ってるじゃねえ！ いつか死ぬぞって言うてんだ！」

仁王立ちする元の横を再度さらりと横切り、一度だけ振り向き言った。長い髪がふんわりと揺れ、髪から花の匂いが立った。

「待たせたな。食事に行こう」

何を言っても暖簾に腕押しの間答に、悶絶しながらも、ハルの後ろをブツブツ文句を言いながらついて行く。ドアの近くに駆けていたカーディガンを取ると、

「おいっ！」

と元は呼び止め、バツと投げつけた。ハルは羽織ながら、ゆっくりと礼を告げた。

「ありがとう」

元はハルの言葉にそっぽを向きながら、「フン」と、鼻を鳴らした。

ハルが目覚めます・・・こんな当たり前の遣り取りが、当たり前で無くなる・・・そんな日が来るかもしれない。このまま目が覚めないのではないか、ハルが倒れる度、そんな不安に駆られるのだ。

こいつには「パーティー」の一員として、行動しなければならぬという思考が欠落している、その元はブツブツと呟く。

『人の気も知らねえで・・・』

第5章 And to a Fight - 10

町の飲食店は、人々の驚きと唾然とする感情が入り乱れ、俄かに騒然としていた。視線の中心は元とハルの二人で、そんな人々の視線など気にもせず温かい食事を堪能している。口に頬張った肉を、飲み込むのもそこに、元が叫んだ。

「おばちゃん！ 鳥の丸焼き二つ、モリモリサラダ、セルニノのスープ二つに、魚の香草揚げ、魚貝のパエリア二つ、ん」と、取り敢えず握り飯二〇個・・・んでネビール二杯。急いでね！ あっ、全て大盛りで！！ 頼むよ」

おばちゃんと呼ばれた女将は、元の注文が入る度にビクリと体を揺らす。そして何とかグルリと振り返ると、「は・いよ。ちょ」と、待つて下さいね」引き攣った笑いを元に向けた。元達は、店の全てを食い尽くさん勢いで、食事が運ばれる端から、箸を付けている。今や厨房は元達の注文に大混乱し、罵声が飛び交っていた。

右手におにぎりを持ち、左手にメニューを掲げながら、

「他に何か食べたいものあるか？」

元が口一杯に頬張り、幸せそうな表情を浮かべハルに問うた。時折「あゝ幸せ」だの「あゝ旨え」だの感嘆の声を上げている。ハルはハルで、美味しいのかそうでないのか分からない表情のまま、食べ物を口に運び「元に任せる」と小さく答えた。店に居合わせた客らは、次から次へと繰り返される注文に、

「何か見ているだけで、腹一杯だな」

そう言いながら、注文を取下げ始めている。どちらにしても厨房には、他の注文を受ける余裕は無い。豪快さは元だが、ハルも静かに且つ早いスピードで、端から平らげていた。

全ての食べ物がテーブルから無くなった時、元が頬を赤く染め幸せな表情浮かべ言った。

「はあー。食った。久々の食事は、やっぱ最・高だな。ま、急に

腹一杯食べると、身体に悪いから、今日は腹八分目しておくかあ
「そうだな」

ナプキンで口を押さえながら、ハルも頷く。異世界の民、エンダ達の言葉に店の者達は、一斉にどよめいた。

「もう米一粒さえも無いよ・・・」
そう店主の嘆く声が、厨房に低く落ちた。

「通常はちよつとでいいのに、戦いの後は腹が減るよなあ」

「ああ」

「てかさ、この世界の良いところは、飯が美味いって事だよなあ」

「ああ」

「だよな、これで飯が口に合わなかったら、目も当てられんな！
楽しみっていつたら、飯位じゃねえ？」

「そうでもない」

「マジ？　そうそう地域特有の特産品があるのも、旅に醍醐味が増すっていうもんだよな」

「ああ」

「知ってるか？　ここの特産は、名牛だぜ！　丸焼きが旨いんだってさ、後で喰おうぜ」

「そうだな」

「でもさ、もっと観光も充実してりゃーイイのって思わねえ？」
「そうか？」

「そうだよ！　もっと娯楽とかさ、必要じゃん？　生活の活力っていうかさ。それに情報が本ばかりっていうのもどうかと思うよ。この世界は進化がないよなあ。原理が違うのか、機械化っていうのに限界があるんだよなあ・・・」

「お前は、もっと本を読んだ方がいい」

「・・・無理」

ほぼ一方的に元が捲くし立てるのだが、こんな会話が延々と続く。

狩りの後はいつもこうだ。お茶を飲みながら、ゆったりとした時間を共有して過ごす。暖かい日差しが店内に差し込み、少し眩しい。

ハルの膝で、タロがうとうととしている。そんなタロを、優しくハルが撫でている。元はこの光景を見るのが好きだった。

こんな空間でお茶を飲んでみると、昨日の戦いが夢みたいに思える。二人で食事を摂る。それは狩りが成功した、死なずに生き延びた。その実感を得る為の大切な儀式だった（と、少なくとも元はそう思っている）。

ハルもこの時間だけは、本を読む手を休めた。元には、それが単純に嬉しくて仕方がない。

その時、二人への関心とは別の場所で、どよめきが走った。周囲の出来事に、一片の興味がない二人は、

「海を越えるタイミングはどうする？」

これからの旅について話しあい、「もう少し後じゃねえ？」なんて話をしている。その注目を集める主が元の隣に立った時、初めて二人は顔を上げた。

「不躰で申し訳ないが、ザツツケルオンを倒されたエンダ殿でお間違いないか？」

小奇麗にした男が、二人の従者を連れて声を掛けてきた。

「町長！」

店の人間が声をかける。お辞儀をされたようなのだが、恰幅が良すぎて、そうは見えない。どうもお腹でつかえているようだ。

「エンダ殿、この度は、この町をお救い頂き・・・お礼申し上げます」

救う？ 何の事だ・・・瞬間そうポカンとした表情を浮かべた元は、
『あー、今回の狩りは、獣に狙われていたこの町を救う為だったっけ』

すっかり本来の目的を忘れていた元は、先程浮かべた表情を何とか取り繕いながら、

「お礼を言われるまでもない。別の依頼で片づけたままです」
そっけなく答えた。そもそも自分達は狩りに見合う報酬を受け取っている。命を掛けているとしても、自分達に与えられた使命を全うしているだけだ。

ハルはそんな社交辞令に全く興味がない様子で、店にお茶の催促をしているし、タロはタロで、クハーと欠伸をしながら、ハルの膝で丸くなっていた。

『こいつら本当に自分の事だけだな・・・』
元もママな方ではない。しかし、自分よりもマイペースな奴らのせいで、多少ママに動かざるを得なかった。

『こんな時、取り計らうのは必ず俺の役目だよ』
心の中で舌打ちした。

「いやいや、エンダ殿がおられなかつたら、今日にもこの町に到達し、この町は全滅していた事でしよう。

エンダ殿の数は限られている。数多く存在する獣の中から、あの獣の契約を交わして頂いていた・・・それこそが奇跡です。本当に助かりました。何かしらお礼をさせて頂きたいのですが・・・」

「いや、本当に・・・」
「いえ、是非！！ 町に情報が届くのが遅れて、何の痛みも被っておりません。それでは、我々の気が済まないのです」

町長の申し出に、流石に無下にも出来なくなり、元はスツと立ち上がった。エンダは獣を倒す生き物だと毛嫌いしている人間も居る中、町長の申し出は大変に有り難い。しかし正直面倒なのだ。エンダは、この世界の民との接点を、極力避けていた。

「町長、お気遣いありがとうございます。しかし、我々は使命を果たしただけです。どうぞお気になされぬよう・・・」

「しかし・・・」
それでもと食いつく町長に、ハルが珍しく口を挟んできた。

「金は要らん。あの獣の宝玉があるからな。我々は十分過ぎる報酬を得ている」

バサリと切り捨てる言葉に、「そうですね……」と意気消沈をして町長が頂垂れた。しかしハルは、話は終わっていないと言わんばかりに、言葉を繋げていく。

「話は逸れるが、町長殿は書物など集めておいでか？」

『だから声を掛けたのか……』

ハルの思惑に、元は呆れながらも動向を見守る。ハルが積極的に行動を起こす事は稀で、大概が情報や書物に関するものだった。

「え、書物ですか？ あ、あくそうですね、歴史やらなんやら先代が集めていた本はあるようですが……私は興味がないもので書庫に眠っておりますな」

町長の言葉に、ハルの目がキラリと光った（そう、元は思った）。むしろ、獲物を狙う獣バリの鋭さがある。

「ふむ。町長殿のせつかくの申し入れ、無下にするのも……。そうだな、金はいらんが……町長宅で食事を振る舞って頂く位なら、なあ元」

『なあ元……て』

ハルの言葉に、町長は顔をパアと明るくし、元の手を握り締めた。

「その様な事で宜しければ、是非！ そうだ、町の者も集めましょう。存続の危機を救って頂いたのです。今夜はお祝いですな。夜通し祝いましょうぞ！！」

町長の言葉に、周りの人々も歓喜の声を上げた。民の嬉しそうな声を聞くと『……断らなくて良かったかもな』そういう気持ちになる。元の満たされる気持ちとは裏腹に、

「素晴らしいご提案だ！ 町長のお気持ち、有り難くお受け致します。そうだ！ 今からお邪魔しても宜しいですよね！」

ハルがグイグイと話を進め始めた。

流石に準備が出来ていないので、とやんわり断られていたが、

「書庫にありますのでお構いなく。むしろ出入りしないで頂きたい」

攻防戦の末、ハルが結局図々しく押し切った。何一つ相手の都合な

ど聞いちゃいない。

「おいっ！ 少しは遠慮しろよ！」

ハルのあまりの強引さに、元がこっそり耳打ちをする。その言葉に、「よもや断るつもりじゃないだろうな」と眉間に皺を寄せながら、

「何を言う。相手が是非にと言っているんだ。町長の顔に泥を塗るつもりか？」

それに、個人宅の書庫には流通していない書物も多い。民の家になど、滅多に入れん。この機会を逃す手はない」

当然の様に持論を正当化し、言い切るハルに、

『いやいや、本音は「それに」の部分だけだよな？ ってお前、いつもそうじゃん』

もう一言、言いたい気持ちをグツと押さえた。ハルの旅の目的は、世界中の本を読む事に違いないと元は思う。今にでも町長を引っ張って行きそうな勢いのハルに、小言を言う事を諦めた元は、

「俺は一度、宿に戻るぞ」

何とかそれだけ伝えたのだった。

第5章 A n d t o a F i g h t - 1 1

話が済むと、ハルは町長達を急かすように店を後にした。町長の大きな体が左右に揺れて、後ろ姿はダルマの様だ。お付きの者達が、あたふたと慌てて後ろを付いて行く。

その後ろ姿を見送りながら、元は深い溜息を吐いた。

「全く・・・招かれたっていうのに、あんな服で出席するつもり？ 最悪バトルドレスでもいいけど、やっぱそれなりのかっこするべきっしょ。たく・・・信じられねえ。・・・おっと、そうそうタロの蝶ネクタイもいるよね」

ブツブツ言いながら、元は店の女将を呼んだ。

「テイクアウトで、店にある鳥の丸焼き全部ね」
元の言葉に呆れ顔で

「もう水しか売れるものがないよ。ていうか、もう店仕舞いだから。」

そう断られた。そんなに食べたつもりがないのだろう、元はあからさまに「ええ??」そう驚いた顔を浮かべ、

「もう!?!」

思わず口から本音が出てしまう。片づけを行っていた従業員達全員にジロリと睨まれ、「あれ?」と、居づらくて早々に店を後にしたのだった。

「うーん、だつてさ、俺達だけ美味いもん食う訳にはいかんだろ」

昨日とは変わって良い天気、町は活気に溢れている。夜の祭りは盛況になるに違いない。その時の人々の笑顔を思うと、自然と鼻歌が出る。昨日ザツツケルオンを狩った事を伝えてからは、遅くまで騒然としていたが、今は随分と落ち着きを取り戻していた。「良かった、良かった」と鼻歌交じりに、中央に歩みを進めると、幸いに

賑わう市場を見つけた。大道芸人が至る所で芸を披露している。民族調の音楽は、町の雰囲気を一層賑やかなものにしていた。

「お！」

巨大な牛を一頭、丸焼きにしている屋台が目に見え込んできた。

「ウヒヨウ、これが名牛かあ。超、旨そう！」

丸焼きを前に、元はジュルリと唾を飲んだ。『やっぱり特産品はいい！！ 気分が踊るぜ』元はそんな事を考えながら、牛の品定めに入った。

「らっしやい！ あんちゃん、どの大きさに切るかい？」

でかい出刃をクルクルと回しながら、屋台の店主が勢いよく声を掛けてきた。元は指で顎を擦りながら、

「んーちったく小さいが・・・一頭丸ごとくれ。あ、切らずにそのまま。あ、包まなくて良いから」

「へ？」

あんぐりと口を開けた店主に金を渡すと、元は肉汁が滴る丸焼きを串のまま肩に担いだ。

「なんだい、兄ちゃん。今からパーティかい??」

怪訝そうに問う店主に、元は「大喰が居るんでな」そうニヤリと笑った。

町の外れには、大きな檻が三つ用意されている。ある程度規模が大きな町には大概ある風景で、獣専用の檻だ。町に連れて入る訳にはいかないの、ここで預かってもらうのがこの世界のルールである。ギヴソンレベルの獣であっても壊れない檻は、エンダに重宝された。

町に立ち寄れば、毎回こんな狭くて貧相な檻に入れられる。プライドが高いギヴソンにとって、不名誉極まりない扱いに、いつもの如く暴れたのだろう。檻が少し凹んでいた。しかし壊すまでは至らないようで、荒い鼻息が先程までの興奮を物語っていた。しかし元の姿を見て落ち着いたのか（どうなのか元には不明だ）、大人しく

元をジツと見ている。

「おら、食え」

元はそう言いながら、屋台で買った肉の塊を投げ入れた。ギヴソンは思いがけないご馳走に、ギラギラ涎を流しながら喰らいつく。その様子を見ていた元は、檻の近くにドカツと座り込み、二カツと白い歯を見せた。

「はは、やつぱり逃げなかつたな」

少し嬉しそうに呟いた。戦いの度に手綱を離しているのに、いつの間にか戻って来るのだ。決して、すり寄るわけではないが、この獰猛な獣は元の傍を離れようとしなかつた。

・・・信じられないが、今では元を飼い主として認めているように感じ始めていた。

他のエンダからは、寝首を狙われていると言われる事もあつたが、そのチャンスはいくらでもあつた筈だ。命からがら生き延び、半分気絶している二人を町に運んでくれた事も一度や二度ではない。

物凄い形相で、一心不乱に喰らい付くギヴソンを見ながら、

「・・・あゝあ、お前がもうちよつと可愛かつたら、なああ」

元は本当に無意識に、本音が口から漏れた。その瞬間、ピクンとギヴソンが反応し、鋭い眼光が元を貫く。思わず元は、頭を下げた。

「あ、いや・・・、その・・・ごめん。えつと、ごめん」

ハルは、テーブルの上に本を高く積み上げ、片端から目を通していた。

「・・・やはり歴史書は全て同じか」

期待していなかった結果だが、ハルは溜息交じりに呟いた。しかし、諦め切れず積み上げた本に手を伸ばす。テーブルの下には、読み終えた本が次々に積み上げられていた。

左に積まれていた本を手を取った時、

「え？」

その本から感じる魔力に、手を止めた。それは今にも消えそうで、思わず自分の魔力で補うようにギュッと抱きしめた。ハルはまだ微かに残る魔力の感触を確かめながら、ゆっくりと捲る。一枚一枚丁寧に、そして慎重に目で文字を追った。本は五〇ページ程の厚さしかなく、表紙も厚紙で作ったような代物だ。重要な事由が書かれている書物・・・そんな印象は到底感じさせない。

しかし内容を読み進めるうちに、ハルの手が止まった。

「・・・これは一体？ どういうことだ？」

ハルは最後の一枚を読み終わった後も暫く考え込み、書庫には沈黙が静かに流れている。カビ臭い書庫の中に、夕暮れの赤い光が差し込み眩しい位だった。

夜半過ぎから、町の至る所に灯りが灯り、獣の脅威を回避した町は、お祭りムードに酔いしれた。町長の家の大広間では、弦楽器の音楽が奏でられ、人々が軽やかにダンスを舞う。

「ハル！ まだ本を読んでんのか！？ もう宴は始まってんぞ。」

ほら、持ってきてやったから、これに着換えるよ」

ハルは、元からフンワリとした春色のドレスを手渡された。そう手渡す元も、小奇麗に礼服を着こんでいる。あの男臭い荷物のどこに、

こんな服を仕込んでいるのだろう。押しつけられたドレスに、ハルは眉をひそめ、

「バトルドレスで良からう。礼服の代わりになる」

心底嫌そうに答えた。元は想定内の返答に、

「駄・目・だ！ エンダとして招かれたんだ。これが礼儀ってもんだ！」

頑として受け入れる隙がない。いつもは豪快でガサツな元だが、礼節を重んじる性格だった。反してハルは、意識の範疇が元のそれと違い、その思考が理解出来ない。もう一度異論を唱えようと口を開けたハルに対して、

「駄・目・だ！」

頑として聞き入れようとしない元に、深い皺を寄せながらも、ハルは深い溜息を吐いた。

「何だよ、溜息を吐いたって駄目だかな」

ハルの態度に、ブーと頬を膨らませながら、叱られた仔犬の様な表情を向ける。そんな元の態度に、もう一度溜息を吐くと、

「仕方がないな。今回は迷惑を掛けたし、その詫びだ」

ハルは体を反転させて、ドアに向かって歩き始めた。

「お、おい」

「着替えてくる。ついでに、タロの蝶ネクタイも、な」

そう答えると、春色のドレスを一度揺らし、ドアを開けた。

宴は主役の二人を取り囲み、人々が代わる代わる感謝の意を述べてくる。元が器用に応対し、何とかエンダとしての面目を保っていたが、とても宴を楽しむ余裕などない。

ハルは挨拶などにはお構い無しで、端から料理を片付ける事しか考えていない。元の恨めしそうな視線を物ともせず、大きな魚に手を掛けている。

楽しい宴は、終わる気配なく続く。

人の波が途切れると、元も参入して二人して丸焼きに喰らい付いていた。そう言いながらも、元は普段以上に周囲に気を張っている。

「何だよ、俺にはつか押し付けやがって。ちったーお前も相手をしるよ！」

音楽に掻き消される程の小さな声で、元は恨み節を吐く。

「エンダの面目とやらを保ちたいのだろう？ 私には出来ないの
でな」

サラリと答えるハルに、更に元は喰い付いた。恐らく周りの人々には、仲の良いエンダの二人に見えているに違いないが、会話は和気藹々とは言い難い。

「とやら、っていうな。分かるでシヨ？ 俺達が民と均衡を取らないといけない事位さ」

ハルは、こんがりと焼いた肉を淡々と口に運びながら、元を一瞥し言った。

「民に係るから、無駄な気遣いが必要になるのだ」

「~~~~あのなら・・・誰のせいだっつーの」

「私は満喫している」

ハルの言葉に、もうこいつに何も言うまい・・・そう元が更に肩を落とした時、

「楽しんでおられますかな？」

今日の宴を催した、町長が声を掛けてきた。元は口一杯に頬張った肉をゴクンと飲み込み、

「ええ、このような場を設けて頂き感謝しております。私達は、義務を果たしたただけですが、皆様のお役に立てて光栄です」

そう会釈をした。先程まで小声で愚痴を言っていた人間とは思えない程、そつなく答える元を横目に見ながら、

『私達の世界では、どんな奴だったのだろうな・・・』

そんな事を思ったりもする。常日頃からそれなりの場所であれば、その場所に適した礼節を行う事が礼儀だと、口煩くハルに注意を促した。旅の道中からは想像も出来ない姿を見ると、一つの人格で二つの人生を歩む運命の不思議さが身に染みる。

「いやはやゝ最近のエンダ殿は随分と品格のある方々ばかりで、我々も安心してこの世界を託す事が出来るというものです」

町長はホクホクと、満足そうに頷いた。その言葉に、サラダのコーナーに行きかけたハルが、グルリと振り返り口を挟んだ。

「町長殿は、一世代前のエンダに会われたことが？」
ハルの手元にある料理の量に、驚愕の表情を浮かべながら、町長はウーンと唸る。ハルは町長の話を聞きながら、料理を次々に口に運んだ。

「いえいえ、そのようなエンダ様がおられたと聞いた事があるだけですな。噂話で大変失礼だが、ピーターが無い、ケンタが無いなどと、訳の解らない事を言っては、暴れて手に負えなかったとか・・・」

事あるごとに、一昔のエンダの話は町や村でよく出る。言動や行動に問題があり、しかしこの世界を救う役割があり・・・随分とこの世界の人々と衝突を繰り返していたという。お蔭で民とエンダの間に深い溝が出来た事は、エンダの黒歴史となり、両方に厳しい制限が強いられる事となる。その事を思えば、クライアントとは円満な関係が望ましい。元の行為も、それに通じるところからきているのだらう。

「ところでエンダ殿は、この先のご予定をどのようにお考えですかな？」

町長が話題を変えた。

「そうですね。二つ目の海を越えたいと考えております。もう少し先の話になりそうですが・・・」

元の回答に「こほん」と、町長が真剣な眼差しで言った。

「エンダ殿・・・。宜しければずっとこの町にいて下さいません

か？ 世界に散らばるエンダ殿が、命を掛けて戦っておられるのは百も承知です。が、しかし獰猛な獣は次々と増え続けておる。数年前に比べると、人類が直面している脅威は、格段に増えております。しかも、獣の行動は神出鬼没……。

ザツケルオン程の脅威に直面したのは、今回が初めてですが、お二人がおられなかったら、確実にこの町は廃墟と化していただしよう。この町にお二人が留まって頂ければ、何と心強い事か！」

町長の言葉は、もはや懇願に近い。獣に怯えて暮らす生活を虐げられる日々に、人々のストレスは極限に達している。特に今回は助けとなるエンダが、その刃に倒れた獣だった。人々の恐怖は図り知れない。

『……獣の進化が早い。本当に厄介だ』

エンダと獣、互いの進化が日々せめぎ合っている。獣に対する恐怖は、民のそれと一緒だ。進化に追い付けなければ、昨日の敗者は自分だったかもしれないのだ。

町長の願いに、元は困惑した表情を浮かべながら答えた。

「町長の申し入れ……、大変ありがたく思っております。何とかお力になりたいのですが……。しかし、エンダは一つの場所に留まる事が出来ません。我々は、永遠に旅を続けるしかないのです」元の言葉に、町長は落胆した表情を浮かべたが、二人の真剣な表情に、フウと息を吐き、

「そうですね。……エンダ殿が町に留まらない事も分かっていますが、ご無理を申し上げました。残念ですが、諦めましょう。大丈夫、もしまた危機が訪れたとしても、なあと、我々は何度でも立ち上がって見せますぞ」

申し訳なさそうに頭を下げる元に、町長は白い歯を見せながら、二カりと笑った。

笑う町長の言葉に暫し考え込んでいたハルが、声を掛けた。

「失礼を承知で聞くが……何故町を捨てない」

無表情（知らない人間から見たら、真剣な表情に見えるかもだが）で、本当に失礼な質問をするハルに、元は肝が冷える。しかし元の静止も聞かず、ハルは静かに問う。

「ちょ！ ハル！」

「これ程の町だ。女、子供も居る。・・・町を捨てるのも、一つの選択肢ではないのか？ 生きていたら、何度でもやり直せる」
ハルの言葉に、重々しく町長は頷きながら言った。

「エンダ殿のお言葉は至極もつとものです。しかし何故でしょうか。・・・育ってきたこの町を、どうしても、どうしても捨てられないのですよ。獣の存在が明らかになった瞬間に、町から離れる様に告知はするのです。私は立場上、皆を守る責任がありますので。しかし皆の選択肢に、町を捨てるという文字が出てこない。獣は恐ろしい。・・・それなのに、ここが大事で、町を離れる事が出来ないのですな」

「そうか・・・」

そう呟いたきり、ハルは何も言わなかった。

「ははは、エンダ様から見たら、何を固執しているのだと思いでしょうな」

「人々の歴史が積み重なって町が形成されているのです。・・・おいそれと捨てられないのでしょうか」
元の言葉に、町長は頷き言葉を繋げる。

「エンダ殿、この地に見えられた際には、是非お立ち寄り下さい。町中で歓迎致します！」

町長は恭しく頭を下げた。

第6章 Crossing the road 1

「この道は・・・？」

ハルが元の肩に手を添えた。二人は狩りを終え、町を目指し移動している最中の出来事だった。元はハルのサインに、林の中を疾走するギヴソンの手綱を引くと、ごついゴーグルをグイと引き上げた。

「どした？ 町はまだ先だろ？」

ハルがスツと左横の茂みを指差す。そこには、三メートル程の茂みが続いている。

「茂みが何だつて？ 何か居たか？」

「道がある」

「道？ ま、けもの道ぐらいは・・・て、おい！」

ハルが元の肩からスルリと降り立つと、茂みに向って歩き出した。ハルの突拍子ない行動は今に始まった訳ではない。元はやれやれという表情を浮かべながらも、ハルの動向を見守る事にした。

ハルが茂みに手を掛けると、確かに道らしきものが出てきた。

「ホントだ」

ハルは体を翻し、スタスタと戻ったかと思うと、元の肩に乗り、脇道を指差した。

「行くぞ」

そう一言だけ言葉にすると、既に意識は脇道に向かっているのか、ジツとその先を見つめて動かない。ハルの指示に、元はドツと疲れに襲われた。狩りを終わらせた帰りな上、今回も楽に勝てた訳ではない。痛めつけられて疲れた体を、一刻も早く休めたい元は、不服の声を上げた。

「えゝなんで」

「何でとは何だ？」

「こんな脇道に何の興味があるってんの？」

自分の意向を理解出来ない元に、ハルは静かに言葉を繋ぐ。

「この道は地図に記載されていないにも関わらず、かなりの道幅で且つ舗装されている。道の痛み具合から見ても、人の往来が見て取れるだろう」

言われてみれば、脇道とは言い難い程の立派な道だ。

「・・・えつと、だから何？ こんな道位どこにでもあるっしょ。ていうか、道を全部把握してるのか？ いやいや、それよりも面倒くせ〜の。次に行く町で早くユツクリしたいんだよ。ほら、お前がめちゃくちゃ契約するもんだから、体が・・・」

グチグチ文句を続ける元に向かって、「早く行け」とだけ告げると、視線は脇道の先を見据えて動かない。勿論ハルに苦情を言った所で、聞き入れる様な耳をもつ奴ではない。ハルの性格を熟知する元は、大きな溜息を吐き、ギヴソンの手綱を脇道方向に引いた。

「て言うかさ、何て言うの？ 俺の意見って、全くもって考慮されなくねえ？」

口を尖らせ、元が拗ねた表情を浮かべているが、ハルのフォローは一切ない。元は更に口を尖らせた。

「へ〜結構栄えてんな！」

町は小規模ながら、多くの人々が行き来する活気がある町だった。

「うお〜！ テンション上がるわあ〜。なあなあ、後で武器屋に行つていいか？」

通りには至る所に露店が出ている。新しい町が好きな元は、先程までの不満などどこ吹く風という様に、声を弾ませた。武器屋に行つて、カラーに行つて、旨い特産品を食べて〜などと、今にも駆け出しそうな勢いだ。

「これ程の町が地図に載ってねえってなあ。比較的新しい町なのかもな」

町の賑わいにキャツキャツと浮かれる元の隣で、ハルは町の様子に無言で目を向けている。元が露店の店に向かって、ハルを呼び止めた、その時だった。

「きゃ〜！」

すぐ目の前の女性が金切り声を上げた。そしてグルリと振り向き様に、

バシッ！

いきなり元の頬を平手で殴ったのだ。肌が弾かれる音と、只ならぬ雰囲気に、周囲が一気に静まり返り、視線が一斉に向けられた。しかし一番呆然としているのは、叩かれた元、本人だ。自分に何が起きたか理解出来ずに、頬を押さえポカンとした表情を浮かべている。痛みなどないが、女性に叩かれたショックで、思考が脳に達していない。元を殴った女性は、ブルブルと震えながら、怒号の一声を発した。

「この痴漢！ 今お尻、触ったでしょ!?!」

目の前でギツと睨む女性は、仁王立ちで元を見据えている。黒髪がよく映えるはつきりとした顔立ちは、目を見張る程美しい。眉で切り揃えられた前髪が、この女性の魅力を引き立たせている。体のラインに沿ったTシャツに短いデニムのショートパンツ。スツと伸びた素足は、固めの黒革のブーツに良く似合っていた。

『エンダか』

ハルは二人の動向に目を向けた。

第6章 Crossing the road 2

「・・・は・・・はあ!? 痴漢〜!?」

突然、痴漢呼ばわりをされて、ようやく頭に血が巡った。当然の事だが、今まで痴漢と呼ばれた事も、そんな卑劣な行為に走った事も無い。

「ああ!? 突然殴った上に、言うに事欠いて、痴漢呼ばわりかあ? 冗談じゃねえ! 誰がためえの汚い尻なんか触るかよ!」

動揺と憤りで冷静さを失った元は、女性に向かって暴言を吐いた。元には珍しい事で、ハルがチラリと元に目を向ける。元の暴言に、女性の怒りは、一気にMAXとなった。元を見上げてギツと睨みつけ、腕をガシリと掴むと、

「何ですって!? 痴漢した上に、開き直り? ホントに最低な男ね! でかい図体して、エンダの風上にも置けないわ! ちよつとこつちに来なさいよ!」

「ちよ、だから俺じゃないって!」

相手が女性という事で、元も無碍に出来ずにいる。

「ミディ、本当に彼なのか?」

女性の隣に立っていた男性が、ミディと呼ばれた女性の肩を掴んだ。「ほう」

ハルがその男性の姿を見て唸る。クールな顔立ちの中に、どこか少年の面影が残る魅力的な男だった。切れ長の涼やかな目元も、アッシュ色のナチュラルショートも、均整の取れた筋肉質の体も、更に男の魅力を引き立たせている。見た目は二十代前半といったところだ。

『ほうって何!?』

ヒーローを彷彿とさせる目の前の男も気になるが、己以外に興味が無い筈のハルの反応に、元はピクリと眉を上げる。背中に身丈程あ

る剣を背負っているという事は、元と同じ戦士だろう。しかし元にはない、洗練された美しさがある。二人から醸し出されるオーラは、周囲を圧倒していた。

「オプト！ こいつに決まっているでしょう！ 私のすぐ後ろに居たのよ？」

埒が明かない問答に、ハルがチラリと、陽の高さを確かめた。

「・・・」

いよいよもって周囲が騒然としてきて、大きな人だかりが出来始めている。エンダとして、こんな不名誉な事で目立つなど許されない。元はグルグルと混乱する頭で、如何にこの状態を乗り切るか考えあぐねていた。

「もう！ あんたのせいで、目立って仕方無いじゃない！ いいから、こっちに・・・」

グイツと引く女性の手を払う事も出来ず、しかし汚名を着せられたまま場を離れる事も出来ない元は、アワアワと動揺して動けない。

その時、ハルがミディの手をスツと取った。そして耳に付くほどの平坦な物言いで、

「この男は痴漢をする様な奴じゃない。お前の勘違いだ」

そう言い放った。やっと出て来た助け船に、元は安堵の声を上げる。

「ハル！」

突然手を取った少女に驚きながらも、

「な、なによ、仲間？ 痴漢の片棒を担ごうっていうの？」

取られた手を払いのけ、ミディはギツとハルを睨む。このような状況下で、冷静なハルの態度に、ミディは何故か息を呑んだ。

「少し落ち着け。腰回りに変化は無いか？」

ハルの言葉に、ミディはハツとした表情を浮かべ背中に目を向ける。

「あ！ 無い！？」

腰に手を回し、顔を蒼白とさせている。

「え・・・無いって、ミディどうしたの？」

事の成り行きを見守っていたのだろう。仲間と思しき二人が声を掛けて来た。

一人は色素が薄く透き通る肌を持った女性だ。クリリとした大きい瞳が緑の色に輝き、頬と唇に注す桜色の赤みが女性の儂さを際立たせている。フレアのミニのワンピースに、毛皮のショート丈のベスト、膝上まであるハイソックスに、ショートブーツが何とも可愛らしい。

「ミディ！　もしかしくなくても、宝玉無くしたとか？　マジで？　一ヶ月分の食料だぜ？」

もう一人の男は、吊り眉の垂れ目に無骨なあご髭が良く似合う男だった。白のTシャツに黒レザーのシャープなジャケット、そしてこれたまたシャープなカーゴパンツにこの男のこだわりが見て取れる。

『随分と、華やかなパーティーだな』

元はイザゴザに巻き込まれている最中にも関わらず、目の前のパーティに釘付けになった。しかしミディが発した一言で、元の怒りは頂点に達する。

「無くしてなんか……。もしかして、あんた達グルで……。」
疑惑の視線を投げ付けるミディに、元は額に青筋を立てながら、怒りに拳を震わせた。

「て、てめえ、今度は盗っ人呼ばわりか！？　俺らは誇り高きエングダだ。生きる為だとしても、その名を汚す位だったら死を選ぶぜ！」

元の怒涛に、あご髭の男が「ヒュー」と口笛を吹いた。

第6章 Crossing the road 3

元の怒涛にミデイが体を硬直させる。その姿を見て、怒りに任せて怒鳴り付けた自分自身に、元は深いショックを受けた。茫然と立ちつくす二人に、周囲の沈黙が雑踏に変わる時、ボソリと聞こえた小さい呟きに元は耳を疑った。

「図書館が閉まるな」

この声は・・・、ぐるりとハルに視線を向けると、バックから革袋を取り出すハルの姿があつた。

「ハ・・・」

元の言葉を待つ事なく、スツと袋の口を広げて見せる。「え、何？」突き出された袋の中を、居合わせたエンダ全員が覗き込んだ。大きな声で揉めていたかと思えば、今は袋を覗き込む異様な光景に、町の民達は声を押し殺し通り過ぎて行く。一瞬の沈黙の後、顎髭の男が小さく感嘆の声を上げた。

「すっげえ」

大小合わせて十個近い宝玉が、光を受けて輝いている。深い色彩に、相当の獣であつた事は容易に想像が出来て、目の前の二人に言葉を失う。ハルは、中から一つ取り出すと太陽光に宝玉を翳した。宝玉から反射される陽の光は、ハルの白い肌に、薄い紫の光を映し出す。

「お前達四人で一ヶ月分といえば、Bクラス前後だ。ちなみにこの中には、そんな小物は居ない」

元は『これだけ言えば、分かるだろう』・・・そんなハルの声が聞こえた気がした。聞き様によっては自慢とも取れる言葉だが、ハルの表情には一切の驕りや優越感はない。淡々と事実を述べているだけだ。しかし与える影響度を、ハルはよく分かっている・・・元は微動だにしないハルの表情に視線を落とすと、ミデイが少し不憚りなってきた。

「ッ」

ミデイが言葉を失う横で、オプトが小さく頷き、元に向かって頭を下げた。

「すみません！ 明らかに当方の勘違いです。恐らく何者かが宝玉を盗んだ時に、ミデイの体に触れたのでしょう。もしかしたら落としてしまったのかも知れませんが。どちらにしても、偶々後ろにいらっしまったのが、お二人だったにすぎません。不快な思いをさせて、申し訳ございませんでした！」

オプトの頭の下げっぷりに、元は毒気を抜かれた。清々しい・・・元はこういう人間が嫌いではない。

「いや・・・あくもういいや。あなたが頭を下げる事じゃないしさ。俺らが犯人じゃないって分かってくれれば」

手を振りながら答える元の肩にガバツと腕を回し、顎髭の男が声を掛けてきた。

「いや〜男だねっ、気に入った！ 俺、ナツメ、宜しく」
元に向かってニヤリと笑うと、手を差し出した。見た目もチャライが、言葉自体も軽い。

「あんた、百パー戦士だよな。うちのリーダーもそう。やっぱり戦士は筋肉の付き方が他と違うよな！」

ナツメの言葉に、元も「そうか？ って、自分だって前線で戦う系の職業だろ？」そう問い返す。

「まあね〜え」

一気に溝が埋まる三人に、ミデイが声を荒立たせた。

「ちょ、ちよっと！ オプトもナツメも信用するの？ この人達が犯人じゃないって決まった訳じゃ・・・」

「ミデイ！ いい加減にしる。この人達に、俺達の宝玉を狙う必要性なんて無いよ。それにそんな事をする人達じゃない」

オプトの言葉にミデイは頬を赤らめ体を翻すと、「オプトの馬鹿！」
そう言い放ち人込みを掻き分け姿が見えなくなった。

「ミデイ！」

仲間の女性が直ぐに後を追った。ミデイの事は、この女性に任せているのだろう。ナツメがさかさず声を掛ける。

「ララ！ 俺らカラーに居るから」

ララは片手を上げて答えると、色素の薄いゴールドの髪をなびかせ駆けていった。ララの後ろ姿を見送りながら、「・・・全く」オプトは深い溜息を吐く。何だかこのパーティの特色が見えたようで、元はポリポリと頭を掻いた。

「巻き込んですみません。お詫びをしたいのですが・・・あれ？ ここに居たもう一人の方は？」

いつの間にか、ハルの姿はどこにもない。言わずと知れた単独行動に、元は眉をピクリと上げた。そうだ。これこそ、うちのパーティの特色だ。

「あいつ、こんな事には一切興味がねえ奴なんで」

助けてくれた事には間違いない筈なのだが、何となくスッキリしない元は首をもたげた。

第6章 Crossing the road 4

ミデイが居なくなり、ポツンと残された元は、グルリと周りを見渡した。町の民は元達を避ける様に、行き交っている。

「ハア・・・」

痴漢の汚名は晴らせた様だが、民に与えた不信感を払拭するには時間が掛るだろう。今後この町を訪れるエンダ達を思うと申し訳ない気持ちになる。

「あの、もし良かったら」

表情を暗くした元が振り返ると、オプトとナツメの姿あった。ナツメがカラーの方向を指差しながら、

「一緒に飲もうぜ！ 仲間が迷惑掛けたしな」

そう声を掛けてきた。是非にと頭を下げるオプトに誘われ、元は二人と一緒にカラーに赴く。社交的な元と、似た様なタイプの二人が打ち解けるのに、時間は然程掛らなかつた。三人は、時には熱く時には馬鹿話を繰り返すと、数十分後には往年の付き合いかのような雰囲気になった。ハルと二人の旅を長く続けてきた元にとっては、内容一つとっても新鮮だ。

「お宅らのトコは、女の子が可愛くていいな」

元の本気ともつかない呟きに、ナツメが口の中の食べ物吹き出した。

「ちよ、もう！」

オプトが飛んだ食べ物払いながら苦情を口にするが、面白くて堪らんと言わんばかりにナツメが笑う。酒が入ると陽気になる様で、大声で笑い転げている。

「元、あんただんだけいい人なんだよ。チカンの、泥棒だの散々言われたのにさ、可愛いってどうなの？」

ナツメの言葉に、先程の失態を思い出し、元はポリポリと頭を掻いた。今は笑い飛ばしてくれる二人が有り難い。

「あゝそんなんだけど。ミディの気持ちも分かるし・・・痴漢に遭うって嫌じゃん？　っていうか、俺の対応も良くなかったしな」
元はそう言くと、グビリとネビールを飲んだ。ふとオプトと目が合うと、野菜スティックを一齧りしながら、ニッコリと笑っている。オプトの仕草に、恋愛感情が欠落している筈のエンダ達（女性）が色めき立っている。

「オプト〜ここでもモテモテじゃん。見てよ、あの熱い視線！」
オプトの言葉に、元は耳を疑った。オプトは肩をすぼめている。

「え・・・、俺達には・・・」

「そ、恋愛感情なんてもん、ねえよな。恋やら愛やらって、エンダになつた途端、欠如する感情だよ。でもさ、オプトは別さ」

ニヤリと笑うナツメに、元は「ほおお」そんな呟きしか出て来ない。ナツメの言葉と、周りの視線にうんざりだと言わんばかりに、オプトは溜息を吐いた。

「エンダとして使命を果たす事以外に興味はない」

「まあねえ、好きになつた処で、何も残せる訳でもねえしな」

微妙に二人の会話は噛み合っていない。オプトが眉間に皺をよせてナツメを見た。ナツメの言葉はエンダの宿命を指している。エンダは人を好きになる事も無ければ、子孫を残せる体でもない。エンダは、狩りをする為だけに存在している、と言われる由縁だった。

色々あつたのだろうか・・・オプトの苦虫を嚙潰した様な表情に、元はそれ以上踏み込んで聞くのを止めた。溜息を吐いた後、オプトが気持ちを切り替える様に、言葉を繋ぐ。

「元のパーティもいいじゃん。ハルさん？　あの存在感はちよつとなないよ。クールだよな」

オプトの弾む声に、見る人が見たらそんな評価になるのかと思うと、元は目から鱗が落ちた。今日だって、発した言葉は二言位じゃ無かつたか？

「え？　あれってクールっていう一言で片付けていいものなの？　あれはもう自己中通り過ぎて、世界の中心は自分だから、って言

っているもんだけど？」

元の必死な弁明に、「仲間の自慢は出来ないよな」そういう顔を浮かべている。

「でも元を助けてくれたじゃん。あの合いの手は良かったよ」

「いや、あれは、早く図書館に行きたいからであってさ……」
ゴニヨゴニヨと歯切れの悪い元に、オプトは優しい眼差しを向ける。その穏やかな表情に、元は暫し魅入った。

『何だろう……。この感じ』

元の視線に気づいたナツメは、ニカッと笑いながら言葉を繋げた。ジヨッキの中は既に空で、カウンターに向かって手を上げている。

「気付いた？ うちのリーダーいい男だろ？」

元は思考を読まれていたのかと驚いたが、素直にナツメの言葉に頷く。

「ぶ、ぎゃ、はっはっは！ ホント、素直」

元の頷きに、もう堪らん……。そうナツメが吹き出した。

「ナツメ、からかうなよ。俺なんてまだまだだ。あの宝玉、A、S級だろ？ しかもたった二人で、旅を続けているなんて。俺達も強くなってきたと思っていたのに……。世界は広い」

目を伏せるオプトの瞳に、長い睫毛の影が落ちる。

「いや、狩りはさ、ランクじゃないよ。苦しめられている大勢の民を如何に多く救うか、だろ？」

「確かにそうだけど、S級の獣が一度現れると、一体どれだけの民が犠牲になるか」

「そうだな。最近はA級以上の獣が激増しているからな。たく、厄介だよ。ま、C級から知恵付けてS級になる獣だっている位だ。小さいのから潰すのも、一つの手だぜ」

目を輝かせ、語り合う戦士二人に、「戦士って、基本純粋な奴が多いよな」ナツメが軽い溜息を吐く。

「でさ、一緒に狩りに出よって話になってさ！」

借りた大量の本に囲まれたハルに、元が意気揚々と話し掛けた。積み上げられた本の束に、元はチラリと目を移したが、オプトの「クールだよ」その言葉を思い出し、視線を反らす。

「そうか・・・これがクールか・・・」

賑やかな宿の談話室で本に没頭するハルは、中々顔を上げてくれない。「なあ〜て！」そこから更に十数秒が経過した時、読んでいる本に区切りがついたのだらう、ハルは一度顔を上げて、

「行きたければ行けばいい。私はこの町で待機している」
そう言い放った。

「え〜一緒に行かぬえのかよ」

「必要がない」

ハルのバサリと切り捨てる言葉に、一緒に狩りに出るつもりだった元は、不服の声を上げる。

「ええええ〜、一人かよ」

一人で他のパーティに入るのは、結構な気を使うものだ。俄かで組まれたチームなら、然程問題でもないが、パーティは狩りの形が出来上がっている。連携を巧く取らないと、パーティが全滅する事もある位だ。膨れる元を余所に、本のページを一枚捲り、ハルは視線を落とす。

「どうでもいいが、あのオプトという男、お前と同じタイプだ。中々客観的に己を見る事など無い。お前には、いい機会になるだろう」

ハルの言葉に、元はブハツと噴き出した。

「俺と〜？ 全然じゃん？ どっちかと言うと、俺力技多いし、あいつ技巧派そうじゃん？ 一緒に行くなら、その技盗まねえとな」

ハルはチラリと元を見て、「好きにしる」そう言つと本に目を落とした。その後は何を離し掛けても、ウンともスンとも返事が無い。

「いいのか？ ホントに行っちゃうよ？ 当分帰ってこないかもよ？」

ハルと二人で狩りをする事に慣れている元は、大勢で狩りに出るリ
スクもそしてその逆も重々承知している。ハルの無反応に最後は、

「うゝ・・・じゃ、一ヶ月ルールな・・・」

そう言いながら、ドサリと椅子に座って剣の手入れを始めた。ど
んなに会話が無くても、一人で部屋に戻る気にはなれない。ハルの膝
で丸くなるタロヤ、話し掛けるなオーラ全開のハルの傍が居心地が
良かった。そんな自分に、くははと元は苦笑いを浮かべる。

暖炉の炎がユラリと揺れて、薪がパチリと弾けた。

第6章 Crossing the road 5

次の日、早朝になると五人は町の入り口に集合した。既にオプト達の服装はバトルドレスに変形し、狩りに向かう意気込みがヒシヒシと伝わってくる。

『ハルはドライだからさ』

「今日から一ヶ月、元が狩りに付き合ってくれるから、皆宜しくな」

オプトが皆に元を紹介する。ララがちょこんと頭を下げて、

「元さん、宜しくね。私はララ、ヒーシャよ。守りは任せて！」
人懐こくニツコリと笑う。

「元でいいよ。ララ宜しくな」

ハルには無い愛らしさに（特に望んでもいないが）、元は新鮮な気持ち覚える。暫しの沈黙が流れ、

「ミディ」

オプトがミディに向かって少し強めに声を掛けた。ミディは昨日の感情を引きずっているのか、そっぽを向いたままだ。

「私はまだ納得した訳じゃないから」

棘がある物言いに、元は良心がチクチクと痛む。これまた新鮮といえば、新鮮なのだろう。

「ミディ」

少し呆れた様に声を掛けるオプトに、ばつが悪そうに「マジック」だけど？」何故か疑問形で答える。元は特に気にした様子を見せず、全体を見渡し、

「元だ。職業は戦士。慣れていないメンバーが入って、戦いにくい事もあると思うけど、宜しくな！」

二カツと笑う元に、ミディ以外は笑みが零れた。

「元、ハルさんは？ 一緒じゃないのか？」

オプトが首を捻り、声を掛けてきた。

「あゝえつと（必要がないって言ってたなんて言えねえー）体調が優れなくてさ？ 今日には大事を取ってるよ」

「え、付き添わなくていいのか？」

「あゝ大丈夫、大丈夫！ あいつ、気を遣われんの嫌がんだ。ユツクリしとけば、治るから」

元はブンブンと手を振る。苦しい言い訳に、嘘が付けない元は、ダラダラと嫌な汗をかく。心配してくれるオプトにも申し訳がない。

「それで獣は、どんなタイプ？」

ララが大きな瞳をパチパチとさせて言った。

「これとこれだ」

手にはAレベルの獣の契約カード二枚が添えられていた。

「一匹は町から五十キロの地点に居る獣だ。道中狭い道もあるから「ボルボツコ」での移動は考えていない。歩きで行こう。今回は元も居るし、Aクラスに挑戦だ」

「役に立てばね」

「ミディ」

諫められたミディは、フンとそっぽを向いた。「元、すまないな」申し訳なさそうに頭を下げるオプトに、元は頭を振った。

「俺の事は気にすんな。あんま揉めると、連携が悪くなっちゃうからな」

元の言葉に、真剣な表情で頷くと、「よし、出発しよう！」「オプトが号令を掛けた。

「濁竜」

ナツメの蹴りが獣の脳天を直撃した。獣の体が、地面にめり込む。獣のタイプによっては、真っ二つにする事も可能な技だろう。

「ち、切れないか」

技を見る限りでは拳士のようなのだが、ポケットに手をつ突っ込んだまま脚力のみで攻撃にその実力は測り知れない。それにバトルドレ

スさえも、着崩し風になるとは、ナツメのこだわりは相当なのだろう。

「蒼天乱舞」

元とオプトが同時に技を仕掛けた。獣を挟んで向き合う二人の攻撃に、獣は雄叫びを上げ絶命した。

「やった」

ララがジャンプをしながらガッツポーズをする。

「へえ、やっぱ、元やるねえ。うちのリーダーと同じタイミングで凄じじゃん？ ていうか、技まで同じってなんなの？」

「いや・・・獣の属性で、皮に保護が掛かっている様な奴だと、通常の技だと切れないから」

オプトと全く同意見の元は、ウンウンと頷き、

「でも一緒じゃねえよ。オプトは一秒間に二十近い攻撃を行っている。俺はせいぜい十が限度だ」

元は笑みを浮かべたまま、

「くそ・・・同じ技でここまで完成度が違つと、ちょっと悔しいっていうか・・・もっと技見極めねえと!!」

心中穏やかではない元と同様にオプトの心中も煮えたぎっていた。

「上位ランクに狙いを定めているだけはある。殺傷力は元が上・・・一太刀の鋭さと深さは比べ物にならない。何だ？ 居合か？」

戦士の苦悩を余所に、Aレベルの獣を問題なく倒しパーティは俄かに興奮していた。パーティの家計を預かっているミディも人知れず一息を吐いた。

第6章 Crossing the road 6

「地を這う地獄の炎よ 救いの無い罪深い魂に 永遠なる終焉を聞け 地獄の門」

黒と赤のバトルドレスに包まれたミデイが歌う様に呪文を唱える。ミデイのバトルドレスは赤の長いジャケットコートに黒のショーツパンツ仕様だ。魔法が獣を包み込み、そして爆音と共に弾けた。いくつもの炎の球体が何十にも重なり合い、獣の周囲に地の底を揺らす重低音が響き渡る。

「・・・マジツカーの魔法って、迫力あるなあ」

黒魔術に慣れていない元は、ミデイから派生した魔法にゴクリと息を飲んだ。ヒーシャの魔法が荘厳な音楽ならば、マジツカーの魔法は打楽器を打ち鳴らす感覚に似ている。

魔法の効果が終息に向かう頃、獣が消し炭の様に黒く小さくその姿を変えた。

「や・・・やった・・・？」

今では原形を留めていないが、巨大な芋虫の姿で出現した時は、一瞬全員が一步後ずさった。ララは引き攣りながら、小さくガツツポーズを決める。皆が安堵した時、オプトが厳しい叱責を飛ばす。

「まだだ！」

その声と同時に。小さくなった消し炭がパツクリと真つ二つに割れたのだ。

「え？」

「孵化？ そんなタイプ!？」

皆がザツと戦闘態勢を整えた瞬間、獣は蛾の成虫の姿で空に飛び出した。

「まずい!!」

元が地面を一気に蹴り上げて、空を飛んだ。空中戦は何倍も分が悪い。元は蛾の腹を狙って剣を振り被り、剣が獣を捉えた時、突如光

の粒子が元の視界を奪った。クラリと意識が遠のく。

「元！」

ナツメの渾身の蹴りが、獣を地面に叩き落とした。しかし元もまた、受け身が取れずに地面に強く叩き付けられる。

「動かないで、毒が回る！」

薄れゆく意識の中で、元はララの呪文を聞いた様な気がした。スウっと消えゆく自我が突然くつきりと鮮明になった時、目に映ったのは、手から光の花弁を溢れ出させたララの姿だ。花弁が元に降り注がれた時、体から毒素が抜けた。

「ゴホツ・・・サンキュ、ララ」

体に毒が回る感覚というのは、全く慣れない。おぞましい感覚に、元が一つ溜息を吐いた時だった。

「ギガ ヒュート」

ナツメの攻撃で、岩にめり込んだ獣が、岩を砕き空に舞い上がるうと羽根を広げた時、オプトの呟きが、元の耳にハッキリと届く。剣を抜いた、次の瞬間には獣が塵の様に消滅していた。

「・・・！」

元は膝を付いたまま、オプトの狩りに眉間に皺を寄せた。

「元、どうぞ〜」

ララが革袋に入ったお茶を差し出す。皮の内部に特殊加工されている為、お茶は白い湯気を立てている。町に戻る道中での一時の休憩は、エンダ達の心をゆっくりと癒した。

「サンキュー」

元達が一緒に狩りを始めて、数週間が経過していた。今では元もすっかりパーティに溶け込み、強力な戦士を得たパーティは、狩りの精度を格段に上げている。

「やっぱ、戦士が二人居ると、狩りの安定感がパネエよな」

ナツメがホオと煙草を吹かすと、ユラユラと白い煙が立ち上った。

ナツメの言葉に重なる様に、ララが弾む声で答える。

「分かる！ 元が来てから狩りが楽になったもん！ 加えて、オプトの技の切れも格段に上がったみたいだよ」

二人の言葉に、オプトはキラキラと目を輝かせた。

「そうなんだー！！ 元の技の精巧さと言ったら！ スッと獣の体に吸い込まれていく様だよ。獣は切られた事すら、分かっていないんじゃないのかな？」

「嬉しそうだねえ。普通はさ、悔しがるもんじゃねえの？」

オプトの嬉しそうな表情に、ナツメがからかう様に声を掛けた。オプトはナツメの指摘に、ボリボリと頭を掻きながら、少し顔を赤らめる。

「悔しいさ、物凄くね。でも何倍も嬉しいんだ！ 元の技を見てみると、自分を冷静に分析出来る。こんな機会に出会えた事に感謝するね」

「俺も！ 技つていつの間にか体が会得しているもんだけど、独学じゃん？ 同じ戦士の技なんて見る機会なんてねえし。めっちゃ勉強になるんだよなあ。特にオプトの技つてさ、根本が近いっていうか、自分の技と比較しやすいって言うか」

その時、元の脳裏にハルの言葉が過った。

【あのオプトという男、お前と同じタイプだ。中々客観的に己を見る事など無い。お前には、いい機会になるだろう】

そうだな・・・そう元は深く頷く。同時にハルの洞察力に震えが来る位だ。あの町中でホンの少し時間を共有しただけなのに、一体何が分かったというのだろう。

「でもさ、勿論Aクラス以上ってハードル高いけど、何となく感じ掴めてきたばくねえ？ ホント、元のお陰だよな」

ナツメの言葉に、オプト達は自信に満ち溢れた表情を浮かべる。元は「俺じゃねえよ。お前らが凄いんだって」そう言いながら、苦笑した。

『自覚が無いって怖いねえ。特にオプトだ。水を得た魚みたいに、狩りの成果を余すことなく自分の力に変えて行きやがる』

例えば元の強さは努力を重ねて、鍛練した賜物だ。しかし彼は違う。一言で言えば、エンダとしての素質だろう。

『こんな奴らが居るんだな……。たく、悔しいったら』
どんなに努力しても届かない絶対的な領域を目の当たりにしてしまつたのだ。今は自分の力が上だが、いつか必ず抜かれる日が来る。しかし屈辱よりも、こんなに頼もしい人間がエンダとして戦っている事に、安堵と誇りを覚えるのも事実だった。

元が深い感慨を受けていると、

「元、俺達のパーティーに入らないか？ ハルさんも一緒にさ」

「へえ？」

オプトの突然の提案に、元は素つ頓狂な声を上げた。しかしオプトの表情は真剣そのもので、ジツと元を見つめる表情に、元はどう答えていいものか、直ぐに返事が出来ないで居る。ナツメとララは微笑みを湛えて、元の一言を待っている。

「待つてよ、パーティーの事なのに、勝手に決めないで」

すぐさま、ミデイが異論を唱えた。

「ミデイ……。昨日皆で話し合つただろう？」

「でも……。やつぱり私は嫌なの！ 勘違いしないでね！ この男が（この男つていう時点で深い溝を感じるが）煩わしいとか、ウザいとかつて理由じゃないから！ 一つのパーティーに戦士はともかく、ヒーシャ二人つて……。無駄でしょ？ 私はララ一人でいい」

「ミデイ……」

ララが元とミデイに申し訳なさそうな表情を浮かべた。ミデイの言う通り、ヒーシャはパーティーに一人は必須だが、大所帯では無い限り複数人を抱える事はしない。やはり狩りで最重要視されるのは、攻撃力なのだ。流れる沈黙に、元が慌てて言葉を挟む。

「あ、いや！ オプトの誘いは、超嬉しいけど、俺ら二人が性に合っているし。あいつ団体行動が出来る奴じゃねえし！ てか、ララのきめ細やかなサポートは、あいつには無理だから」

元々受ける気がない誘いだ、パーティの空気に元はブンブンと両手を振った。

「元」

オプトが残念そうに声を掛ける。元はパーティに馴染んでいるし、狩りに慣れた二人が仲間に加われれば、狩りの成功率を格段に上げる事が出来る。リーダーとしてのオプトの判断は間違っていない。しかしララを仲間として大事に思うミディの言葉も無碍に出来ない事も事実だ。

『ハルはなあ、ヒーシャというよりも、もう参謀って感じでララとかぶりはしねえけど。多分ララが居たたまれなくなるな。……いやいやいやいや、そもそもあいつに他のパーティは絶対無理!!』

シインとなった皆の空気を変える様に、ナツメが明るく声を掛けた。オプトもララも気分を変えて、明るく勤めている。

「んじゃ、元との最後の狩りを決めに一旦町に戻ろうぜ！ 次はどうする？ Aランク？ それともA'行っちゃう？」

「きゃ〜A'？ 初の試みだよね！」

「でもさ〜元が居る内に、体験しておこうぜ！」

「言ってる〜！ でも疲れたよ〜数日休ませて〜」

「そうだな、ずっと狩りの連続だったから。三日位は休もうか」

「賛成〜」

「元は後一週間だろ？ ハルさんと合流するのは。随分と待たせてしまったな」

「ああ、気にすんな。あいつは好きな様にやってんから。でも最後に皆にハルを紹介したいなあ！ 愛想が無くて、自己中で、無表情で無関心で、性格きつくて、強引な奴だけど、良い奴だからさ！ 真顔でハルを語る元の言葉に、ナツメがブハツと吹き出した。

「元〜それ全然褒めてねえよ」

「え？ 嘘、超褒めてんだよ？ ホントそんな奴だから」

「ギヤハハ〜、俺ハルさんに言っちゃおうかなあ!!」

ナツメの言葉に、元は必至の形相で止めた。あの絶対零度の洗礼を受けるのは、俺だけでいい。

「いや、マジで止めておけ。あいつの無表情を目の前にしたら、誰だって固まるって」

元の言葉に、皆（ミミディを除く）が、笑い声を上げた。

第6章 Crossing the road 7

休暇に入って三日目の朝、元はハルの部屋のドアを叩いていた。

「おゝい、居ねえのかよ？」

部屋からは全く反応が無い。結局この休暇中、ハルに会う事は無く狩りの成果も話せずに居る。

「そりゃー、一カ月間に宿に居なかつたら別々に旅をするって約束事はあるけどさ……。ちえ……。面白い話しが沢山あるのになあ。」

元がブツブツ文句を言いながらカラーの扉を開けると、相変わらず昼間から大勢のエンダでこった返していた。

「先に換金してくるから」

ミデイがカウンターに向かって体を翻す。

元がリストをバツと広げると、皆でどの獣にするか、頭を捻らせた。この瞬間が運命の分かれ道かも知れないのだから、真剣に成らざるを得ない。

「うゝん、A' って本気で強そうだよね」

「ああ、でもこの獣だったら、ミデイとナツメが突破口を開いて俺と元がトドメを刺す。ララは全体をフォローっていつもの作戦で行ける筈だよ」

「えゝこの獣は外したいな。あまりスピード能力が高いと、場所によつては不利だ。足場が悪いと俺の攻撃は半減するからさ」

「ていうかさあ、ナツメは拳も使えつて。足場が悪いのなんて、十分に補えるよ」

元が呆れ顔で言う忠告に、ナツメは真剣な表情を浮かべながら、元を見据えて言葉を繋ぐ。

「駄目、それは俺のポリシーに反するから」

「なんじゃそりゃ」

元の言葉に、オプトとララが嘖き出す。オプトがくっくつと、さも可笑いと言わんばかりに、

「年に二回位は見られるよ」

そう笑いながら補足を入れた。ナツメが拳で戦うのは、よっぽどの獣と出くわした時だけらしい。

「オプト、言うなって」

ナツメが顔を赤らめながら、言うばやきに、思わず笑みが零れる。こんなたわいのない時間も、後数日かと思うと不思議な気持ちに陥る元だった。

「ちよつと！ それ私達の宝玉じゃないの!？」

その時、ミデイの怒涛がカラーに響き渡った。一瞬、皆で顔を見合すと、

「あいつ、また・・・」

眉間にシワを寄せて、オプトが立ち上がる。追って、三人も席を立った。特にララは心配そうな顔を浮かべ、駆け足で中央に向かう。皆で人を掻き分け進むと、カウンター近くでミデイが、三十後半の男の首元を吊るし上げている姿が見えた。

「・・・え？」

オプトが目の前の光景に、言葉を無くす。

「ミデイ!!」

「オプト！ こいつよ、私の宝玉を盗んだのは！ 馬鹿じゃないの？ ノコノコと現れて！」

「ミデイ、離すんだ・・・」

「オプト!？」

「この人、エンダじゃない」

「え？」

オプトの言葉に、ミデイは咄嗟に手を離すと、男はドサリと尻餅を付いて激しく咳込んだ。

「まさか・・・」

元達はオプトの言葉に男を凝視し、一気に血の気が引いた。その瞬間、カラーの雑踏が一瞬で消え、ザツと場に居合わせたエンダ達が一步後退さる。

「私……」

ミデイの顔から血色が失せ、ブルブルと震え始めた。その間、俄かにカウンターが慌ただしくなると、エンダ達に緊張が走る。

「違う！ 私はそんなつもりじゃ……」

カウンターの従業員に向かって、ミデイは声を震わせながら訴えるが、一人が縄を持ち出しカウンターから飛び出してきた。

「だから、違うっ！」

ミデイが一步後退った。

「動かないで！」

店の従業員の一人が、震えながら叫ぶと、余計に場の空気を凍らせた。

「み、皆、落ち付け……」

女性の金切り声が響く異様な空気に、カラーの店主があたふたとし始めた。溢れる汗を拭う事も出来ずに、拳動不審になっている。

「待っ！」

オプトが手を差し伸べ、一步前に踏み出した時、

「ほう……これか、お前が盗んだ宝玉は。盗むリスクを負う割に、安いアイテムに手を出したものだな」

静寂に包まれたカラーに、抑揚の無い低い声が響いた。

「……ハル」

いつの間にか、ハルが男の前に膝を付く姿勢で座り込んでいる。元の呼びかけに答えず、ハルは男に淡々と話し掛けた。

「お前達民の中では、呪いを纏うと言われているような代物だ。

何故手を出した？」

ハルの能面の様な表情に怯みながら、男は腰が抜けた様に動けない。

「その男から離れなさい！」

従業員の手には、ナイフを掴んでいる者まで居て、エンダ達は見守る事しか出来ずにいた。

「よりによつて、エンダから盗みを行ったんだ。何かしら理由があるのだろうか？」

周りの雑踏など、全く意に介さず、ハルは淡々と問い掛けている。抑揚の無いハルの声に、従業員達も固まった様に動けない。

「エンダにとって、この石は己の命そのものだ。それはこの石に価値があるからではない。守るべき民の・・・お前達の命の重さと等しいからだ。その石の存在こそ、我々がこの世界に存在する証。・・・教えてくれ。何故石を盗んだ？」

ハルの表情は変わらず能面のままだが、その言葉に男は額を床に擦り付けた。

「申し訳ございません！！ お金がどうしても必要だったので、本当に申し訳ございません！」

皆一様に、この後の展開が読めず、ゴクリと息を飲む。それはエンダも、この世界の民も同じだ。

刹那、男の言葉を受けて、ハルは男を見据えたまま店主に声を掛けた。

「店主、この男はエンダの宝玉を盗んだ。しかし反省をしているようだ。このまま許してやってくれないか？」

カウンター越しにカラーの店主が、その大きな腹を揺らしながら、従業員に向かって手を伸ばす。

「あ・・・ああ、ぬ、盗みはいかな。エンダ様、確かにこの男も反省しているようだ。許してくれるかい？」

そう少し顔を強張らせながら、ミディに向かって言った。

「勿論さ！ 誰だって間違いはあるよな！ いいよ！ 許す、許す！！」

ナツメがヘラヘラと笑いながら、ミディの肩を抱いた。当のミディは、顔を青く、体を強張らせたままだ。ハルはユツクリと回りを見

渡し、

「騒がしたな」

そう言いながら、Aクラスの宝玉をゴトリとカウンターに置くと、未だに茫然と立ちつくすエンダ達に向かって声を掛ける。

「ここは私の奢りだ。楽しんでくれ」

ハルの言葉に、エンダ達の歓声がワツと上がると、カラーに陽気な声が響き渡る。

「お嬢ちゃん、太っ腹だねえ！！ よっしやく、酒を樽でもってこい！」

「ねえちゃん、こっちにネビールとロブスター香草焼き！ 後、アスパラポテトのチーズ焼きと、塩豚のペペロンチーノ大盛り！」

「こっちの注文が先だ！ ビーフストロガノフにモリモリサラダと白レバーのパテ！ えーと、えーと・・・取敢えず何でも持ってきて！！」

様々な注文が飛び交う中、エンダ達の気遣いに目を向けると、元達はハアと深い安堵の溜息を吐いた。

「嬢ちゃん、上手いね、何とかまとめてくれて、助かったよ」
腹を擦り、溜息を吐く親父を一瞥すると、ハルはスツと立ち上がった。

「店主・・・困るぞ。カラーに町の人間を入れるとは。」

我々は民を意図的に傷付ける事は出来ないが、不慮に傷つける可能性はゼロじゃない。カラーは民と一線を画する唯一の場所だからこそ、エンダはカラーに集まるのだ。その場所に、民が紛れ込むなど、前代未聞だ。こんな状況でお前達に肅清されて、協会に突き出されたら堪らない。協会が関与してきたら、この店もただでは済まないぞ」

鋭いハルの視線と畳み込める物言いに、親父はしどろもどろに答える。先程よりも、大量の汗が噴き出していた。

「う！ こっちも気をつけているんだが。参ったねえ、町の人間

が入り込むなんて思っ ちゃいね からなあ？ でも穩便に済んで良 かった、良かった！」

そう言うと、でかい腹を抱えながら親父はそそくさと店の奥に引っ 込んだ。その後姿を、ハルは眉間に皺を寄せたまま目で追っていた が、目線を下に落とすと小さな溜息を吐いた。

第6章 Crossing the road 8

「あの・・・」

背後からの声に振り向くと、ミデイがララに付き添われて立っていた。目線を下に向けたままの姿で、

「あ、あの、助けてくれて、た、助かったわ」

たどたどしく礼を延べる。しかしハルは興味がなさそうに、間髪入れず厳しい叱責を飛ばす。

「お前の為ではない。飛び火で粛清の対象になるのを避けただけだ。自分の主張を突き通すのは結構だが、相当の責任が付き添うのも事実。自身が負える範疇を見間違うな。お前を助けんとして、仲間までも対象になるところだ」

厳しいハルの言葉にも深いショックを受けたが、粛清という言葉に、ミデイがビクリと体を揺らした。そんなミデイを支えながら、

「助かりました！ ハルさん、ありがとうございます」

深々と頭を下げるララに一瞥すると、ジツと見据えたまま動かない。自分に目線を据えたままのハルにララは困惑気味に「あ・・・の・・・ハルさん？」そう声を掛ける。そんな三人の様子に目を向け、元はハルの存在にフツと肩の荷を下ろした。ハルを見ると無意識に安心する自分に、元は気づいていない。

「ハル、カラーに居たんだな。ナイスだぜ、いやマジでどうなる事かと。この世界の民に手を出したら、強制的に協会に突き出されちまう。俺達、民に対しては、潜在的に抵抗も出来ないからな」

元は冷や汗を拭きながら、ハルに声を掛ける。

「ミデイ、元の言う通りだよ。ホントに気を付けるよ。協会に連行されたエンダが戻って来たって話は聞かないんだからさ。翌日、カラーの死亡リストが上がったっていう、話まで聞くぜ？」

「・・・粛清って嫌な言葉だね。ミデイ、本当に良かった。大事にならなくて」

ナツメや、安堵の溜息を吐くララの言葉に、ミディは瞳を伏せる。

『本当に危なかった。・・・あの女の言う通り、自分だけじゃない、仲間まで対象にされるところだった』

仲間まで巻き込んでしまつたら、そう思うと心臓の高鳴りは中々収まってくれない。連行される仲間を助けようとして、パーティ全員が粛清されたなんて話もよく聞く話だ。

「皆が無事で良かったよ。ハルさん、ありがとう」

オプトは心底安堵の表情を浮かべ、礼を述べたが、ララから視線を外したハルは、今度はオプトを凝視している。

「オプト、ここは騒々しい。外に出よう」

ハルが声を発した。二人はほぼ初対面だ。それなのに、その自然感に周りがドキリとした。ハルに導かれる様に、全員がカラーの外に出た。薄暗いカラーに居ると、時間の感覚が薄れるが、既に陽が高くなっていく。

オプトを見据えながら、ハルはさも当然と言わんばかりに言葉を繋ぐ。

「助けた礼が欲しい」

「え？」

何故分らない？ という表情を浮かべるハルに、元はポカンと開いた口が塞がらずにいる。他人の為に尽力を尽くすタイプでもないが、見返りを求める奴では絶対にならないからだ。

「礼い？ ハル、何言つてんの？」

呆れた声で口を挟む元に一瞥した後、更に言葉を繋げた。

「お前達が一緒に狩りを初めてほぼ一カ月だ。その間、何故あの男は換金しなかったのか？ ま、換金すると言っても、民にとって手続きは容易ではないがな。不思議だと思わないか？ 一ヶ月もの間の今日という日を何故選んだのか」

ハルの言葉に、オプトはジッと考え込んでいる。

『・・・お似合いだな』

話の展開が掴めない元は、向かい合う二人に目を移しそんな事を考えていた（どうせハルの思考を理解する事は出来ない。導き出される結論を待つ癖がついている元は、二人の会話に気もそぞろだ）。醸し出される雰囲気、ミディやララの様な派手さはない。しかし、何故か視線が外せなかった。元はふと自分の全身に目を落とす。エリダになって数年経つが、今まで一度も容姿を気にした事は無かった。

『・・・』

「あの男が、計画的に俺達の前に姿を現したと？」

怪訝そうに言葉にするオプトに、

「さあな。偶然と言いきれば偶然なのだろう。しかし私はそんなに都合よく考えられない性分だな。そうは言っても、私は部外者だ。あまり表立って動きたくない」

あんなに表立って、事を沈めたくせに何を・・・そう元以外全員が心の中で突っ込むが、誰一人口に出来ずにいる。今にもオプトの腕を掴んで歩き出しそうなハルに向かって、ミディが声を荒立たせた。

「ちよつと、オプトを巻き込まないで！ 行くなら私一人で行くわ！！」

「お前では役不足だ」

「な・・・」

冷やかなハルの視線に、ミディは体をカッと熱くした。恩は感じているが、正直そこまで言われる筋合いはないだろう。思わずミディがグツと前に踏み出しそうになった瞬間、ハルの平坦な言葉が続いた。

「お前達、全員でパーティなのだろう？」

『お・・・』

この言葉にピクリと全員が反応した。そんな中、元は皆を見渡し『こいつら、仲間意識高いもんな』そう頷く。

『全く、人を都合よく操りやがって・・・』

元はハルの行動に深い溜息を吐いたが、ハルの思考の行く先がハツキリするまでは傍観する事に決めた。ハルの言葉に、オプトが頷く。「ハルさん、あの男が何故我々から宝玉を狙ったのか探ればいいんですね?」

「ああ、それでチャラだ」

オプトは一度息を吐き、スツとハルを見据えて言った。

「分かりました。仲間が粛清されるのを守って頂いたんです。どこまで解明出来るか分かりませんが、やってみます・・・ハルさん、最後まで見届ける為に、勿論一緒に来てくれますよね?」

探る様なオプトの言葉に、

「ああ、仕方がないな。・・・しかし一つ条件がある。何が起きても、私の事に口出しするな」

そんな都合のよい事を言葉にした。

「え・・・と」

元の頭は状況についていけていない。それはナツメ達も同じ事だ。

「ん、ま、よく分かんないけど、オプトがそう言うなら、いいよ。でもさ、これからさどうすんの?」

ナツメの言葉にミデイも「原因が私なら、仕方ないじゃない」「そうブツブツと呟いている。ララは「オプトが決めたならいいよ」「笑いながら頷く。

「えっと、これだけの町の規模だぜ? たった一人を見つければ、結構至難じゃないか?」

訳が分からないが、どうもあの男性を見つけたらしい・・・元は首を捻った。

「あれ? そう言えば、タロはどうしたの?」

先程までの騒動中、確かにハルの肩にチョココンと乗っていた筈だ。それなのに、今は姿が見えない。

「タロはあの男を追って行った。じきに戻ってくるだろう」

『追って行った? いつの間にそんな芸当が出来る様になったんだ!?!』

元は頭がクラリとして、よろめいた。どうやらハルとタロの絆は、
相当なものになっていくらしい。

外に漏れる程のカラーの賑わいを余所に、タロを待ち続けるエン
ダ達は、何とも言えない時間を無言で過ごすのだった。

第6章 Crossing the road

そんな中、一人花壇の縁に座るハルを気遣って、ララがスルスルと近づいて行く。ララから人懐こい笑顔で話し掛けられたハルは、顔だけを上げた。二人が並んでいる姿だけ見ると、何と微笑ましい事か・・・目を向けた元は表情を緩めた。

「ララ、ナイスじゃん。まあた、傍若無人な態度とかとって、ララが傷つきそうで心配っちゃ心配だが、同性との付き合いも大切だからな」

こんな機会を狙って、元は敢えてハルから離れていたのだ。常日頃から、ハルは狩り以外に興味を持つものがあつた方がいいのとは思っていた。

「チャレンジャー・・・」
ナツメがボソリと呟く隣で、オプトはハルに目を移した。

「ハルさん、ヒーシャですよ？ 今癒しの魔法はどこまで会得していますか？」

弾ける様に問うララに、ハルは言葉を発しようとしな。元から見たハルは、ララにどう接しているのか測りかねているように見える。

「ププツ、ララの人懐こさに無下にも出来ずって感じか？ ま、確かに今までに居ないタイプだね。いい、少しは対人スキル鍛えろつての」

元は目線を遠くに飛ばしながら、一言一句を逃さぬ様に耳だけを必死に傾ける。

「ハルさん？」

「あ、ああ、どこまでとはどういう事だ？」

「え？ えっと、会得して居ない魔法って、感覚ですがこう、何て言うのかな、感じたりしないんですか？」

「・・・魔法を感じる？」

怪訝そうな表情を浮かべるハルを見て、ララはハツと言葉を飲み込んだ。

『確か魔法にセンスが無いと、感覚が鈍って魔法を根本的に理解出来ないって聞いた事がある。いけない・・・悪い事聞いちゃった』

「あ、良いの！ ごめんなさい、変な事言つて。えつと・・・あつと、あつ私もヒーシャなの。パーティに二人もヒーシャはいらないって言われるけど、守りは固い方がいいもんね。だからあの・・・」

何を言っても変わらないハルの無表情や、自己の失言を恥じて、ララは完全に動揺してしまった。自分が何を言っているのか分からなくなり言葉が続かない。当のハルは、更に眉間に皺を寄せて、ララの言葉の意図を考えていた。

『話が掴めん。何故コロコロ話が変わるのだろう。魔法原理の話はどうなったのだ。どちらかと言うと、その話が気になるが・・・』
花壇には、燦々と太陽の陽が降り注ぎ、咲き乱れる花に反射して眩しい位だ。

その時、ハルがララを見据えて、言葉を発した。澄んだその声は、とても良く通り皆の心に響く。

「ヒーシャだからなどと考えて生きるのは無駄だ。エンダとして与えられた能力は一つだけならば、ただ己の道だけを突き進めば良い。そうすれば、こんな単純な世界の中だ。自ずと役割は確立する」
ララはハルの言葉を瞬時に理解出来なかった。しかしハルの凜とした態度を見て、ただただ反射的に言葉を繋いだ。

「貴方は悩んだりしなかったの？ 力だけが正義の様なこんな世界で、癒ししか出来ない自分に」

ここまで言葉にして、ララはハツとして言葉を止めた。皆の視線が自分に向けられている事に気づいたのだ。そして、言葉にする事で、初めて自分の中の迷いに気付いた。

「ララ・・・」

ミデイが心配そうな顔を向けている。ララの動揺する態度にも、特に気にする事も無く、ハルは淡々と言葉を繋ぐ。向けられた視線は、どこまでも真つすぐで、思わず反らしたくなる程だった。

「無いな。私が居なければ、元はとっくの昔に死んでいる。それは私だけが成せる事だ」

突然名前を出され、更にハルのお陰で生きていると言われた元は、絶句後、声を上げた。

「それはこっちの台詞だ〜!!」

そう絶叫し、更にもう一声文句を言う所を、ハルの声で遮られた。

「タロ」

その時、タロがハルの肩に勢いよく駆け登った。擦り寄るタロに、くすぐったそうに目を細める仕草は、今までのハルの印象を覆すものだったのだろう。ハルの表情を眺めていたナツメがボソリと呟く。

「可愛いな〜そうやって、いつも笑っていれば超可愛いのに」

「可愛い〜!?!」

ナツメの言葉に、元は硬直した。ハルに向かって「可愛い」などと表現する発言を初めて聞いたからだ。長年旅を続けてきた元ですら、今まで一度も「可愛い」と思った事はない。ハルはあくまでハルだ。思わずもう一声が出そうになったが、ハルの超絶覚めた表情に、言葉を飲み込んだ。

「お〜寒! 未だにハルさんの突き刺す視線で、体が凍っちゃったみたいになまく動かせねえ」

ナツメはブルリと肩を揺らす。全員がタロから先導されながら、目的地に向かい歩みを進めているところだった。町の中は至る所で人々が語り合い、人々の笑顔で溢れている。直ぐ脇を駆け抜ける子供達に、元達は満たされた気持ちになった。

「全く・・・可愛いなんて、戦うエンダに向かって失礼だろ」

「何で〜? おかしいよ? その発想。だって可愛かったじゃん。オプトもそう思っただろ?」

「そりゃ〜・・・！」言葉を繋げようとしたその時、後方から刺すような視線を感じ、思わず言葉を止めた。オプトが途中で言葉を止めた事を、別の意味に捉えたのか、ナツメが下から覗き込む。

「ぷぷぷ〜何？ 硬派なオプトさんはハルさんみたいなのがタイプ？ 可愛いけどさ、止めときなく、ありゃオプトと言えど、手に負えないよ」

ナツメが嬉しそうにからかってくる。その言葉に、冷やかな視線を返し、オプトはナツメの首を腕で締め上げた。

「だから〜」

「ギブギブ！！」

はしゃぎながら（端から見たらそう見えるだろう）目の前を歩く二人に、ミディは溜息を吐いた。

「全く！ 男ってどうしてあんなに単純なのかしら。って言うか、本当にこの方向で大丈夫なの？ ね、ララ」

半分呆れながら、吐き捨てる様に言う言葉にも反応が帰って来ない。ミディはララの腕に手を添え、

「気にしなくていいよ。このパーティにララが必要なのは、紛れもない事実なんだから」

心配そうに声を掛ける。

「う、うん。大丈夫よ。それは分かっているの」

そう淡く微笑み、元と共に先頭を歩くハルに目を向けた。グングンと進むその歩みに一切の迷いはない。

「あの二人・・・前だけ見て旅を続けているんだね。二人がどんな風に旅を続けてきたのか分かる気がするな」

ララの呟きに似た言葉に、ミディはどう答えるか迷ったが、結局何も言わなかった。その視線がしつかりとハルを見据えていたからだ。

「お前ねえ、余所のパーティ掻き乱すなよ、めっちゃ、微妙な空気流れてんじゃん」

元が隣を歩くハルに、ボソリと苦言を言った。普段は明るく振舞い

一切苦悩など見せないララも、エンダならではの悩みを抱えていた
のである。強制的に職業が決まってしまう中、どの職業になったと
しても悩みは尽きない。

「私は何も言っではおらん。差ほど意味のない言葉を、己の思考
で勝手に解釈しているに過ぎん。全く人は往々にして迷う生き物だ
な」

感情なく呟くハルを上から見下ろしながら、元は呆れる様に言った。
「はあ？ 生きてんだから、悩むって当然じゃねえか。未来が
分かっている訳じゃないんだからさ。・・・特に俺達みてえに、こ
んな世界に来て、狩りだけやってりゃな、悩みもするさ。何とか自
分を納得させて生きてえんだよ」

頷きながら、己自身に言い聞かせる様な言葉に、ハルは元を一瞥し
た。目が合った瞬間、

「てか、絶対お前の方が俺から助けられているから！」

ハルの言葉を引きずる元は、ハルを指差し、ここぞとばかりに鼻息
を荒くするが、

「そうか」

全くどうでもいいと言わんばかりに曖昧に頷いている。

「そうかじゃねえ」

ぶつくさ文句を言い続ける元の隣で、ハルはタロの歩みに目を移す。
その時、先頭を歩くタロがピタリと止まった。

タロがゆっくりと振り返り、一度クイツと顔を上げる。

「タロ……すげえじゃん」

「どこ？」

「随分、町の外れだな」

「小さい家ダネ」

目の前に現れた、民家に向かって皆が銘々に感想を延べた。裕福そうな町の中央とは打って変わって、みすばらしい一軒家だ。

「で、どうすんのお？」

元の言葉に、ハルは「ああ」そう頷くとふと手を扉に手を掛けた。

「あー！」

皆が一樣に驚きの声を上げる中、そのまま家の扉を開けて入って行ってしまったのだ。

「ちょ、ハル！ やばいつてー！」

エンダは住人の許可無く民家に入ってはならないと、固く禁じられている。それこそ有無を言わせず、肅清の対象になっても文句は言えないのだ。

「ひ……ひい……！」

あまりの咄嗟の行動に、皆が動けずに居た時、案の定、住人の叫び声が響き渡った。

「おい！ハル……！」

慌てて後を追う元の後姿を見守り、皆が一樣に顔を見合わせる。今更何だが、元の気苦労が分かった気がした。

皆が追う様に民家に入ると、そこにはハルの姿は無く、奥の扉が開け放たれていた。その奥から、叫びにも似た声が響き渡る。そんな悲痛な叫びの後に、またもや感情の無い声が響いた。

「ど……どうか！ どうか娘だけは、助けてくれ！」

「我々エンダはお前達に危害は加えない」

元が恐る恐る部屋を覗き込むと、小さい部屋の窓際にベッドで眠る子供の姿が一番に飛び込んできた。眠っているのか意識は無く、血色の無い肌がやけに生々しい。その子供を守る様に、あの男が上から抱え込みながら、ハルに向かって訴えている。躊躇なく歩みを進めるハルの後ろで、ララが心配そうに呟いた。

「病気なの？」

ララの言葉に、男はガクリと膝を着いた。

「アミラタセブンという病です」

「アミラタ……って、主に小さい子供が発症するっていう……難病ですよ」

ゴクリと息を飲むララの緊迫した言葉に、

「治らないの？」

元が心配そうに声を掛けた。元はこの手の話にとても弱い。大人の半分にも満たない小さい体で、大人以上の苦しみを負う姿を見るのは忍びなかった。

「うっん、特效薬があつてね、アミラタという薬草がすごく効くの」

「あ、その薬草が高価とか？」

「そんな話は聞かないけど……」

困惑するララの言葉に、男が肩を震わせながら、声を絞り出した。

「いいえ、薬草自体は高価なものではないんです。発症してから一カ月以内に服用すれば、そんなに怖い病気ではありません」

何だ、全然危機的状況ではないのだなど、皆が安堵した表情を浮かべる中、ハルが額に手を翳す。

「大量に派生する植物ではあるな。ただし派生場所が限られる事に加えて、生物の命の短さがネックだ」

ハルの言葉に、男はハラハラと涙を零した。

「そうなんです。この町から西にあるヤドギの洞窟の中に生えている薬草です。この地方の病気を賄える程、派生しているのですが、一ヶ月程前から、獣が住みつく様になってしまっただんです」

男は深い絶望感に沈む様に、言葉を繋ぐ。話の展開に、エンダ達は言葉を嚙む。カラーのリストで狩りの対象を決めるエンダにとつて、獣の直接的な被害を民の口から聞くなど、ほぼ皆無だったからだ。

「よりにもよつて、出現した獣がS級クラスだったんです。私財の全てを投げ打つて、何とか契約金を捻出しても、S級クラスの獣に見合つお金などありません。恐らくあまりの懸賞金の低さに、エンダ様の目にも止まっていないでしょう。もう、もう時間が無いんです。明日にでも娘は死んでしまいかもしれない。そう思うと居ても立つてもいられなくなつて」

「目立つエンダの宝玉を盗む事で、何とか狩りにまで引つ張りだせないか……と考えた訳だな」

こんな時のハルの感情無い物言いに、元はいつも心がズキンと痛む。『こんな身に詰まる話を聞いても、何も感じねえの？ そんな何も響くものが無いのか？ もっとさ……』

父親の言葉に、エンダ達は言葉が出なかった。実力が見合わない獣は、ランクを見た時点で見る事もしない。ランクが高い獣に大勢の民が命を落としている事は承知しているが、現実的に手が出せないのだ。エンダの苦悩の一つである。その上生活の糧でもある懸賞金が低くては、正直割に合わないと思うのも事実だ。

「難しい問題だ。エンダは事の発端まで知る由はない。恐らくリストには、洞窟に巣つくる獣位にしか書かれていない筈だ。リストに書かれるのは、実際に犠牲になつた被害だけだからな。仮に現況を知りえたとしても、S級は中々手が出せるものではない。命を掛けているとはそういう事だ」

ハルの言葉に、どこにもぶつけようの無い理不尽さに父親は拳を震わせた。

「分かつて……いるつもりです。娘の可愛さに……理不尽な事を言っているのも……。エンダ様も命あつての救いなのですか……ら。でも、でもどうしても諦める事が出来なくて！」

この父親の最大限の理性であろう言葉を絞り出した。

元がハルに向かって勢いよく体を向けた時、先にオプトがナツメ達に声を掛けた。

「皆……」

オプトの言葉に、

「S級なんて私達には荷が重すぎるわ。分かっているんでしょ？」

オプトの顔をジッと見つめながら、開口一番にミデイが声を発した。「確かになあ……今まで戦った事が無いレベルだよな、ちよつと自信がないネ。それに一ヶ月狩られていないって事は相当強いって事だよ。懸賞金だけが目的のエンダばかりじゃないんだから」

ナツメが腕を頭に組みながら、ウーンと唸っている。「でも……！ でも！！ こんな小さい子供が苦しんでいる。この子だけじゃない、出現して一ヶ月でしょう？ 薬が手に入らずに命を落としている民だっているかもしれないよ」

ララの言葉に、オプトが力強く頷く。そして決意を固めた声で、仲間に向かって言葉を放った。

「俺、ほおっておけないよ。確かに身の丈に合っていない獣だと思っ。でも……！ ここで見捨てたら、この世界に来た意味が無いじゃん。いつか、スクラスの獣を倒せるようになった時、絶対今日の事を思い出して後悔すると思う。」

でも、命は大事だ。無理について来てくれって言わない。ただ、俺は行かせてくれ」

オプトのストレートな言葉に、ナツメがドコンとオプトの肩を叩いた。その表情は真剣そのもので、ミデイもララも同じ表情を浮かべている。

「な〜に、一人でカツコつけてんの？ 一人で行かせる仲間だっと思ってんなら、パーティ解消なんだけど」

「ナツメ……」

「全くだよ。リーダー一人で何が出来たっていうの？　ちょっとS級舐めてない？」

「ミディ」

「そうだよ！　私達も強くなったし、今回は元さんやハルさんが一緒でしょ？　きつと勝てるよ！」

「ララ」

「て言うか、勝たねえとさ！　こんな小さい体でこの子も頑張っているんだからさ」

元が、オプトに向かってニヤリと笑った。オプトの表情から不安が消え、力強い決意がみなぎっている。

「元……。皆、ありがとう！」

オプトの言葉に頷くエンダ達の姿を、ハルが無表情で眺めている。

「え、え、え？　獣を倒してくれるん……ですか？」

予想外の展開に、父親が呆けたような表情を浮かべた。この一ヶ月どれ程カラーに掛け合っても、直接エンダに交渉しても無駄だったのだ。目の前のエンダ達の宝玉を盗んだのも、半分は自暴自棄になっていた。彼らの姿を見た瞬間、ただただ体が動いた。

「死力を尽くします」

オプトの真剣な表情に、繋がった希望から男は涙をハラハラと流す。

「……ただし」

盛り上がるテンションに、水を指すが如く冷やかなハルの声が響いた。

「絶対ではない。我々のリスクと相当の覚悟は必要だ。我々が戻らなかつたら、国に訴えるんだな」

それでも父親は深々と頭を下げた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8274x/>

エンダ

2011年12月29日12時01分発行